
DEVIL HUNTER`Sのリアルな世界

Vergil

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL HUNTER、Sのリリカルな世界

【Nコード】

N56640

【作者名】

Vergil

【あらすじ】

《最強の悪魔狩人》 《若き蒼の狩人》 《無限の力を求める狩人》
が合間見える時・・・ 《聖女歌姫》 《星の姫》 《閃光の姫》 《
夜天の姫》・・・ “魔帝” “魔剣士スパーダ” “魔界” “
霸王”そして、“悪魔の右腕” “血族” 全てのパズルがはまり一枚
の絵が完成する・・・ 魔界への道が開かれる・・・ 今伝説
が蘇り始める。

独自設定が沢山の含まれています。

そういうのが苦手の方はお勧めしません。

DEVIR HUNTER、Sのリリカルな世界始まります。

番外編用アンケート

これは本編とは全く関係無い事何ですが、番外編を格上で要望やリクエストがあったら報告をお願いしたいと思いました。

出来るだけ送ってくださった方々の要望、リクエストにお答えする予定ですが、流石に限度がありますので、ご了承ください。

一応僕が考えている番外編も結構何個あります。それに被ったのがあれば確実にやります。

諸注意とかキーワードの方でもう分かっていると思いますが、この作品では……

ダンテが5人とバージルさんネロとキリエが出演します。後はリリなの勢です。

ダンテは1〜4のダンテとアニメverのダンテを出します。

その上でアンケートをします。これは無期限です。

内容の例えなんですけど、

- 1・まさかのオッサン×原作キャラの結婚シーン
- 2・DMC勢のダンテ、sがジェル側でネロとバージルがなのは組に味方していたらというIF
- 3・ジェルvsダンテDMC4の酒飲み比べ対決とか
- 4・ぶっちゃけ、伝説の魔剣士と魔王と霸王の三人による飲み会でよくね。

もうギャグだろうがマジだろうが漫才だろうがガキつかネタだろうが、シリアスだろうが何でもいいです。特にこんなの100%有り得ねえみたいなりクエスト、要望だと更に嬉しいです。

番外編は本編が終わっても続ける予定でいますので、ドンドン下さい。

番外編の要望やリクエストあったら送ってください。

メッセージ覧でも、感想の方でも良いので送ってください。

後、今上げた例の中でマジでやるかもしれないと言つものもあります。

諸注意

諸注意

- - - - -
- - - - -
- - - - -
書き忘れていました。

これは『デビルメイクライシリーズ』と『魔法少女リリカルなのは
s t r i k e r s』のクロスオーバー作品です。

特に『デビルメイクライ』の原作知識が多く出てくるので、デビル
メイクライの知識を知っていないとわからない部分も多く出ると思
います。

1) デビルメイクライのキャラクターの性格で、これは違う。コレ
はダンテじゃない！ とかネロじゃない！ とかなるかもしれませ
ん。目をつぶっていただけだと嬉しいです。後、バージルさんの性
格が180°真逆になる予定です。
基本的にキャラが崩壊しますのでご了承ください。

2) 先に言っておきますが、コレはとある小説に影響されています。

3) 此処が一番大事です！！ この小説にはダンテが5人出てきま
す。後、バージルさんも出演しますというか出てきます。それと、
独自設定と自己解釈も多く含まれています。

4) 後、番外編もドンドン書いていこうと思っていますので、まだ

出てきてないキャラも出てきます。
番外編は基本的に本編と何の関係性もありませんのでご理解いただけると思います。

5) カップリングも考えています。ネロ×キリエは決定事項です。
後はダンテ×原作キャラとバージル×原作キャラを考えております。
これは本編で殺るか番外編で殺るかは決まっております。

6) デビルメイクライ側のキャラが反則並にチートです。リリなの側のキャラはもうちょっと強いんじゃないのって思つかもしれませんが、ご了承ください。

以上を踏まえてお読み下さい。

セリフ・名言集（前書き）

D M Cのデビルメイクライのセリフと名言を集めてみました。
今後使うセリフも沢山入っています。

このセリフが足りないと言つものがあれば送ってください。
すぐ加えますので。

セリフ・名言集

【閻魔刀・疾走居合い】

“ Die! ” 「しね!」
“ Scum! ” 「クズが!」

【フォースエッジ・兜割り】

“ Be gone! ” 「失せる!」
“ Blast! ” 「跳べ!」
“ Cut off! ” 「斬る!」

【幻影剣】

“ Don't get so cocky. ” 「舐めるな!」

【反撃】

“ This may be fun! ” 「楽しめそうだな!」
“ Now, I'm a little motivated! ”
「さあ、少し本気を出すか!」

【挑発】

“ Where's your motivation? ” 「…やる気があるのか?」 M7
“ Where is my opponent? ” 「俺の敵は何処だ?」 M13
“ Come on! ” 「来い!」 M19
“ Too easy. ” 「イマイチだな」 M19
“ This is the power of Sparda. ”
「これがスパダの力だ」 M20
“ You shall die. ” 「死ぬがいい」 SE

“ Humph , How boring . ” 「フン、退屈だな」
SE

“ Humph , What 's wrong ? ” 「フン、どうした？」 SE

“ Be gone ” 「失せろ！」

【武器切り替え】

“ Rest in peace . ” 「安らかに眠るがいい」 M13

【魔人化】

“ You will not forget this devil 's power . ” 「悪魔の力を思い知らせてやる！」 M13
“ You are not worthy as my opponent ! ” 「貴様では相手にならない」 M13

20 “ You 're going down ! ” 「ひざまずけ！」 M

【絶刀】

“ This is the end . ” 「これで終わりだ！」

“ You Trash ! ” 「ぶち壊してやる！」

【敗北】

“ Dante ! ” 「ダンテ…！」

“ Ridiculous ! ” 「馬鹿な…！」 SE

動作 セリフ 日本語訳

コンボB (フィニッシュ時) “ Too easy ! ” チョロいな！

ストリーク/ハイローラー “ Be gone ! ” 失せろ！

” C r a s h ! ” 壊れる！

” D i e ! ” 死ね！

” B l a s t ! ” 吹っ飛べ！

” E X ス ト リ ー ク / E X ハ イ ロ ー ラ ー ” C r a z y ! ” クレイジ
I !

” ダブルダウン（溜め1〜2） ” S h o w d o w n ! ” 終わり
だ！

” ”
” ダブルダウン（溜め3） ” D o u b l e D o w n ! ” ダブル
ダウン！

” E X キ ャ リ バ ー / E X シ ャ ッ プ ル （溜め1〜2） ” I s t h i
s ! ” これでもか！
” ”

” E X キ ャ リ バ ー / E X シ ャ ッ プ ル （溜め3） ” L e t ' s r o
c k ! ” 派手に行くぜ！

” D T 発動 ” D o i t ! ” やるぜ！

” S w e e t ! ” 最高だぜ！

マキシマムベツト(溜め時) ”Cry out now!” 泣
き叫べ!

”Not so bad!” イカすぜ!

”Scum bags!” クズが!

シヨウダウン ”It's beginning!” はじめるぜ!

”Dance dumb!” 踊れ、マヌケ!

”You're going down!” くだばれ!

シヨウダウン(フィニッシュ) ”Dust to dust...”
”塵は塵に...”

”Ashes to ashes...” 灰は灰に...

バスター(対ザコ) ”Catch this!” これでもくら
いな!

”Go down!” 落ちろ!

”Sweet!” 最高だぜ!

” Get lost! ” 消える!

バスター (対ビアンコアンジェロ) ” Fire! ” 発射!

バスター (対アルトアンジェロ) ” Brutal! ”

” Break! ” 砕ける!

” Die! ” 死ね!

バスター (”、魔人化時のみ) ” Fuck you! ” くだば
れ!

バスター (対ダンテ、弾き返し) ” Is that ally
ou got? ” それがお前の本気か?

” (吹き飛ばし) ” Tough guy, huh... ” タ
フだな...

” Not so fast... ” 焦るなよ...

バスター (対ベリアル、地上) ” Is that ally yo
u've got!? ” それで本気か!?

” Things're really beginning to

heat up!” 熱くなってきたぜ!

”(頭掴みver)” Is that all you've got? Then down to hell you go!

” 燃料切れか? だったらそのまま寝てる!

”(頭掴みverDT時)”

バスター(対アンジエロクレド)” Wrong, Cred...

” あんたは間違っている!

バスター(対サントウス)” You are demon. Not me!” 悪魔はてめえの方だろうが!

” Pray for help savior, you're gonna need it!” 神に祈りな、お前には必要だろう

” Not interested in your bullshit!” てめえの戯言には興味ねえんだよ!

バスター(対魔王サントウス、トドメのみ)” Checkmate!” チェックメイト!

” Jackpot!” ジャックポット! / 大当たりだ!

挑発(D-C)” Common!(Come on!)” 来いよ!

” What's you say?... Huh!” 何か言ったか? ハッ!

” Shall we dance? ” 踊ろっか？

挑発（B-A） Hoo! Common!（拳法のような構えで）
フー！来な！

” Bang! . . . Ha-ha!（銃を向けて撃つフリ） ” バン
！ハッハッ！

” Scum! . . . Ha-ha-ha!（首をカツ切ってサムダウン） ” クズが！ハッハー！

” What's up? . . . Ha-ha-ha!（首をカツ切ってサムダウン） ” どうした？ハッハー！

” Time to die!（剣を地面に突き刺して） ” そろそろ死んでもらおうか！

挑発（S） ” Hey! hey! hey! Come on! babes!

. . . Okay. ” ハイ！ハイ！ハイ！来いよ！マヌケ共！ . . . よし

” Ok! . . . This may be fun. ”（拍手しながら）
ら） ハハッ！ . . . 楽しめそうだな。

” Common! Babes! Ha-ha-ha! Common
! ho!”（エアギタープレイ） 来いよ！マヌケ共！ . . .

動作 セリフ 日本語訳

チェンジ・ソードマスター ” S w o r d M a s t e r ! ” ソ
ードマスター！

“(ノーモーション) ” S w o r d ” ソード！

チェンジ・ガンスリンガー ” G u n S l i n g e r ! ” ガン
スリンガー！

“(ノーモーション) ” G u n ! ” ガン！

チェンジ・ロイヤルガード ” R o y a l G u a r d ! ” ロイ
ヤルガード！

“(ノーモーション) ” R o y a l ! ” ロイヤル！

チェンジ・トリックスター ” T r i c k s t e r ” トリックス
ター！

“(ノーモーション) ” T r i c k ! ” トリック！

チェンジ・ダークスレイヤー ” G a m e s e t ! ” 終わりだ
！

“(ノーモーション) ” C h a n g e ! ” チェンジ！

ハイタイム ” B l a s t o f f ! ” 吹っ飛べ！

ミリオンスタブ ” Break down! ” 砕け散れ!

ラウンドトリップ ” Freeze! ” 動くな!

ドライブ ” Drive! ” 突っ走れ!

オーバードライブ ” Drive! One! Two! ” 突っ走れ! もう一発! いや、二発だ!

ダンスマカブル ” Get outta here! ” 消えろ!

PF 666:オーメン ” Adios, Amigo ” あばよ、友よ

挑発(D・C) ” Common! ” (2種類) 来い!

” Hey! What's up! ” オイ! どうした!

挑発(B・A) ” Common! ” 来い!

” Hey! What's up ” オイ! どうした!

” Hurry up baby ” 早く来い! マヌケ!

挑発(S) ” Show down! ” 決着をつけようか!

” H a h a h a . . . H a - h a ! ” ハッハッハ . . . ハッハ!

コイツを! (First Whip it out!)

突き刺す！(Then I thrust it!)
力をこめて！(With great force!)
角度を変え！(Every angle...!)
刺す！(It penetrates!)
さらに！(Until...!)
もつと強く！(With great strength!)
ブチこんでやる！(I rum it in!)
最後に！(In the end...)
絶頂を迎えた後 (We are all satisfied .
. . .)

君は自由だ (And you are set free . . .!)
Remember what we used to say?
JACKPOT!
Not very classy for someone's
dying words .

You're going down . . .
You're resting time!! Haaaaaaa
aa!!
Scam!

Though a fight every now and a
gain does make life more inter
esting, don't ya think? (刺激があるか
ら人生は楽しい そうだろ?)

I'm absolutely crazy about i

t ! (楽しすぎて 狂っちまいそうだ!)

Y o u , r e g g r o u n d e d (オネンネしてな。)

D o w n a n d o u t ! (絶望的だな!)

S w e e t b a b y ! ! (イケてるぜベイビー!)

B l a s t o f f ! ! (吹っ飛べ!!)

C h e w o n t h i s ! (こいつを喰らえ!)

I t , s c o o l ! ! (クールだぜ!!)

A s h t o A s h (灰は灰に還れ)

D u s t t o D u s t (塵は塵に還れ)

T i m e t o r o c k ! ! (ロックの時間だ!!)

G o b l o w y o u r s e l f ! ! (xxxxxしてな!!)

「坊やの番だぜ。

ヒーロー役はくれてやるよ。
楽しみな。」

バージル「今回だけはお前に付き合っってやる」

ダンテ「決め台詞は憶えてるな?」

ダ&バ「JACK POT!!!」

【親父はそんなに不細工じゃないね】

ジエスター：メチャ苦勞したぜ！

途中で誰かがおっ死んだら

計画が台無しになっちまうわけよ！

そこでお互いを戦わせて弱らせつつ

無事ここに着けるように案内してたのさ！

こーんなおバカちゃんに変装までしてな！

おネネの時間だよメアリ

ママの所に連れてってあげよう

レディ：やってみな

バージル：道化は退場の時間だ アーカム

ダンテ：サーカスは終わりって事さ

ネロ「そうさ、この手がおまえぶっ殺すためにある」

ダンテ「Devils Never Cry...」

ダンテ「ストロベリーサンデー持ってきたら

命だけは助けてやるよ」

M11

ベオウルフ：スパイダ・・・スパイダ！

ダ：おいおい ママからドアの使い方習わなかったか？

ベオウルフ：臭う 臭うぞ！

ダ：そりゃ悪かったな 今度から香水でも付けとくよ

ベオウルフ：これは裏切りの臭い！あの忌まわしきスパイダの！
スパイダの血族 生かしてはおかん！

ダ：親父のケツを息子が拭くか どうかで聞いたような話だな！

ベオウルフ：忌まわしきスパイダの血を引く者！

目は見えずとも 貴様の臭いは覚えた！貴様を殺すまで追い続けてやる！

貴様の臭いを辿ってな！

ダ：親父の尻拭いもしなきゃならないのか
もうちょっと楽させて欲しいんだけどな

ベオウルフ：見つけたぞスパイダの血族
言っただけだ 貴様の臭いは憶えた
このまま貴様を逃がしたりはしない！

ベオウルフ：さっきの男とは別人なのか？
だがこの臭いは あの男と同じ
二人いたのか スパイダの血族が

ダンテ：ヤバい仕事は大歓迎だ 分かるだろ？

ダンテ：感情を高ぶらせて流れ落ちる涙は、
他人を想う心を持つ人間の特権であり、

証明なのだ。もしも涙が流せたなら、
そいつはもう悪魔なんかじゃない

トリツシュ：それでも魔剣士の息子かしら
パパから剣の使い方教わらなかった？

Give me more power！（もっと力を！）

ダンテ：チエツクメイト

レディ：「家族を想って泣く悪魔もいるのかもしれない」

番外編 1 ダンテVSネロ〜三度目の戦い〜（前書き）

番外編第一号、やっと更新できました。

一発目はダンテEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEVSネロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

番外編アンケートをお願いします。

無期限なのでドンドン申込下さい。

よろしくお願いします。

詳しい事項は「番外編アンケート」をお読み下さい

番外編1 ダンテVSネロ(三度目の戦い)

周りに何も無く、風も無くただ単に広いだけの空間《魔界》に二人の男性が居た。其処には《悪魔》の存在はいなく、此処にはこの二人の男性しかいない。

二人の男性は向い合うようにして立っている。

一人は《黒》の名を持つ“元騎士”の《若き悪魔狩人ネロ》

もう一人は《悪魔も泣き出す史上最強の悪魔狩人ダンテ》

この二人が向い合うようにして立ち会っていた。

ダンテには何時ものおちゃらけた巫山戯た雰囲気は一切感じられず、マジな雰囲気になっている。

それはネロも同じで、全身に緊張感が走っている。

「こうして真面目に向かい合うのは久しぶりだな……ダンテ。」

「そうだな、大体一年と少しか。ネロ。」

お互いがお互いをちゃんと、名前で呼んでいる。

ネロは“ダンテ”と、ダンテは“ネロ”と呼んだ。

「まあ、大体そのくらいだな。」

ネロは愛剣の《赤き女王・レッドクイーン》を抜き、ダンテも愛剣

の《反逆の剣・リベリオン》を抜いた。

「俺等の戦いに言葉も合図も必要ないよな。」

「Ha! ! 今更何を言っているネロ。」

ダンテは笑い飛ばす。

それから言葉は交わされる事は無く無言と静寂が包み込む。
もう言葉は必要ない。

其処からは、

「H a a a a a a a a a a a a a a a a ! ! !」

「Y e a a a a a a a a a a a a a a a a ! ! !」

“ 剣 ” と “ 誇り高き魂 ” で語るのみ。

《ネロ》と《ダンテ》の衝突。

《レッドクイーン》と《リベリオン》の激突。

ダンテとネロの周りの空間・次元が歪み崩壊と消滅を起こす。

しかし、《魔界》にはこれといった被害は全く起きていないし、地形も歪んでいなかった。

この地はかつて《伝説の魔剣士スパード》と《魔帝ムンドウス》が激突した土地。

簡単には崩壊も消滅もしない。唯一ダンテが本気の100%フルパワーで戦える場所でもあった。

それはネロにも同じことが言えた。

《レッドクイーン》と《リベリオン》の激突する金属音が連続して何回も鳴り響く。

ネロとダンテは一瞬の内に何十手も振るう。金属は一つしか聞こえないが、実際は何十回もぶつかり合っていた。

あまりの剣筋の速さに金属音が一つしか聞こえなく、刀身自体が直視自体なんて出来ない。

見えるのは只、止まって見える刀身の残影だけだ。

一進一退の攻防や激戦だけでは言い表せない戦闘。

《レッドクイーン》と《リベリオン》がぶつかりあう度に周りの空間・次元の崩壊と消滅を起こす。

ネロとダンテは只の一振りだけで、次元・空間を歪ませる。

まるであの戦いを思い返させる。テメンニグルの頂上で行われた兄弟の殺し合い。

若き頃のダンテとバージルの戦い……

だがそれでも、今戦っているのはダンテとネロ。

「ちっ！」

舌打ちをするネロ。

ネロは全ての攻撃に《イクシード》を発生させている。

そうしなければ、《史上最強の悪魔狩人ダンテ》の猛攻に打ち合うことなんて出来ない。

ネロが舌打ちをしたのはその事で無い。

押され始めているのだ、ネロがダンテによって。

相手は《魔帝ムンドウス》を封印した男でもある。最初の激突はただ一番下のローギアで戦っていた。だが、ネロの場合はギアを殆ど最初からハイにまで上げて打ち合っていた。

しかし、ダンテは徐々にギアを上げ始めてきて、それにより徐々に押され始めるネロ。

ネロもそうなる事を分かりきっていた。

ダンテの全ての能力値はネロの10倍以上。

それでもダンテには無くネロにしか持っていない“最高の武器”がある。

それが、

「ウラアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

《デビルプリンガー悪魔の右腕》通称

ネロは《デビルプリンガー》でダンテを打ち上げる用にして拳を放つ。

アッパーカットだ。

「ちっ！」

ダンテも舌打ちをした。

幾ら頑丈のダンテとは言え、《デビルプリンガー》のパンチを喰らっては溜まりもない。

ダンテは《リベリオン》を前にだして、《リベリオン》の腹で防ぐ。

瞬間、物凄い爆音が鳴り響く。

空間・次元の歪みが今までの比にならないほど周囲に出現した。

防いだのは良いが、あまりの衝撃にダンテの身体10m以上上空に

浮いた。

《デビルプリンガー》の特性の一つ《スナッチ》という、半透明の《デビルプリンガー》が伸びて遠くの物を掴み引き寄せる技で、ダンテを掴んだ。

「Go down!! (落ちろ!!)」
渾身の力でそのまま地面に叩きつける。

地面には深さ10m以上、半径50m以上の巨大なクレーターが出来、ダンテを叩きつけた位置から半径1?範囲に亀裂が入った。

ダンテは叩きつけられた瞬間、その場でバウンドした。そのバウンドした高さも以上ではなかった。軽く10mは超えていた。

「Blast!! (吹っ飛べ!!)」
殴り飛ばした。

殴った瞬間、肉が潰れる音と骨が砕ける音が鮮明に聞こえた。その衝撃は100?以上出している貨物列車に轢かれた方が未だマシだと言える程の衝撃を秘めていた。

ダンテは尋常じゃない速度で吹っ飛んで行った。
飛距離は300m強。

普通なら地面に叩きつけた瞬間に勝負は決まるだろう。
しかし、相手はあのダンテだ。この位で終わるような雑魚では無い。
ダンテはこの《魔界》の頂点に君臨する最強の《悪魔》《魔帝ムンドウス》を封印した男だ。

言わばこの《魔界》の頂点とも言える男でもある。そんな男がこれ

しきの事で終わるわけがない。

ネロは直ぐに《レッドクイーン》のグリップを捻り、《イクシード》を最大までストックした。

MAX - ACT -

「やっぱり、決まらねえか。」

ネロの肌にビンビンと伝わってくる。

目の前に居る強大過ぎる存在に今の攻撃は殆どダメージを与えていないと、経験と勘で分かってしまう。

「やるようになったなネロ。」

もう前方20m以内に居た。

こんな距離、ダンテにとって無いも等しい。それはネロにも言えた事だが格が違う。

「次はコツチの番だ！」

「!!!!!!」

目の前に《リベリオン》を振り上げているダンテが目映った。高速移動と言うレベルではない、瞬間移動のレベルだ。

ネロは《レッドクイーン》で防ぐのは間に合わないと瞬時に判断して、《デビルブリンガー》で防ぐいだ。

「があ！」

耐えきれなく、物理法則を無視した速度でネロの体が吹き飛ぶ。普通なら追いつけないが、ダンテは違った。

もうネロの真後ろに出現した。ダンテの《スタイル》の一つ《トリックスター》の《エアトリック》という移動方法。瞬間移動のようなものだ。

そのまま《リベリオン》を振りかぶって、

「コレが本物の……」

「クソが!!」

「Blast!! (吹き飛ばせ!!)」

ネロは物理法則を無視した速度のまま、無理矢理身体を捻り《デビルブリンガー》を突き出して防御したが、まるで意味をなさなかった。

ダンテの言葉通りに吹き飛んだ。

それもさつき吹き飛ばされた速度よりも速い速度で吹き飛んでいった。

それは放物線を描きながら吹き飛んでいくレベルじゃないく、ストリートに吹き飛んでいった。

その衝撃は300?で走る新幹線に衝突されるのとは比較にならないほどの衝撃がネロを襲った。

「Ha-Ha!!」

ダンテはネロに向かって《リベリオン》を投げた。それは《ソードピアス》

《リベリオン》は一筋の銀色の矢となり、真っ直ぐネロに向かって次元・空間を破壊し突き破りながら突き進む。

吹っ飛びながらもそれに気づいたネロは、《右手》でブルーローズをガンホルスターから抜いた。

直ぐ様銃口を《リベリオン》に目掛けて発射。

三発計六発の弾丸が《リベリオン》に当たるが、速度は全く衰えない。

此処の中で舌打ちをしたネロは、ブルーローズの空薬莖を投げ捨て、すぐに懐からクイックローダーにはまった弾丸を装填する。

此処まで時間は1秒足らずでやってのけた。

ネロは銃口を迫りくる《リベリオン》に向けたまま、ブルーローズに魔力を集中させた。

ブルーローズから紫色の魔力が放出される。

「BINGO!!」

引き金を引く。

反動がネロを襲い、もの凄い勢いで体が反る。

それにより《リベリオン》の線上から外れる。

弾丸は見事に《リベリオン》に衝突し、大爆発を起こした。

それは《チャージショット3》、《ブルーローズ》に魔力を蓄積させて弾丸を放ち、着弾して時間差で爆発を起こす技なのだが、今回は着弾した瞬間に大爆発を起こした。

それはネロが改良を加えた言わば《チャージショット3・改》といえよう。

《リベリオン》は宙を回転しながら落下していき地面に突き刺さる。それをネロは《デビルプリンガー》で掴み、投擲の構えをした。

「オラアアアアアアアアアア！」

力一杯ぶん投げた。

それは、ダンテの《ソードピアス》以上の速度で鋭さだった。
そのままダンテに向かって突き進む。

「Huh Crazy!!!!!!」

楽しそうに叫ぶダンテは自分に向かって突き進む《リベリオン》に
向かって走る。

端から見れば自殺行為だ。

だが、走っているのはダンテだ。

「Ha - Ha!!!!!!!!!!!!」

ダンテは有り得ない事に《リベリオン》の柄を掴んだ。

瞬間、ダンテの腕が千切そうになったがそんな事はお構い無しに、
無理矢理力で押し込んだ。

「ガンスリンガー!!!」

ダンテの体に濃い青色の魔力が迸る。

武器を《リベリオン》から《エボニー&アイボリー》の漆
黒と白銀に輝く大型の二丁拳銃に切り替えた。

二つの銃口は100m位先に居るネロに向けられていた。

「ネロ……」

引き金に指をかけて、

「熱いキスの雨は……」

ダンテの両手に魔力が蓄積して、真紅の雷が放電していた。

「嫌いか？」

引き金を引いた。

「良いねえ!!! 最高だ!!!」
ネロを覆い被さるようにして襲いかかる弾丸。
ネロの視線の先には黒い弾丸の雨しか見えなかった。
避ける隙間なんて無い。様に隙間なく覆い尽くしていた。

普通なら絶望する所だが、ネロのテンションは最高潮に達して、
テンションゲージを突き破った。
最高の笑みを魅せる。

ネロはブルーローズを収めた代わりに、《右腕》に一本の日本刀が
握られた。

それはダンテの兄バージルの愛刀。

《魔と人を分かつ剣》 《次元を切り裂く剣》 その名は - - -

《閻魔刀》

ネロは体中に入っている無駄な力を抜いて、全身脱力して目を瞑つ
た。

弾丸の嵐が目前に迫ったその時、

「シッ!!!」

目を見開いて、神速の速さで《閻魔刀》を振るった。
目の前の次元・空間が湾曲して、ネロに迫っていた弾丸の嵐がすべ
て切り裂かれた。

それこそバージルが最も愛用した技の一つ《次元斬》
その名の通り次元を切り裂く剣技。

「Huh」次元斬を完全に自分のものにしたのか。」
ダンテのテンションゲージが急上昇した。

「Ha-Ha!! 最高だ!!」
位置的にネロの真上に来たダンテはエボニー&アイボリーの銃口をネロに向けた。身体を捻り、引き金を引いた。

「Crazy!!!!!!」
《レストーム》弾丸の嵐が一点集中的にネロに降り注ぐ。
ネロは《レッドクイーン》を抜いて、《レッドクイーン》と《閻魔刀》の二刀流になった。

「Crazy!!!!!!」
ネロは《イクシード》を限界までストックしていたので、それを利用し、体全身を使い切り上げた。
それを三連続でやってのけた。《MAX-ACTIVEXハイローラ》
たったの三連激で弾丸をすべて切り落とした。

「シッ!!!!!!」
直ぐにダンテに向かって《閻魔刀》を振るった。
見えない斬撃がダンテに向かう。

「Com、n baby!!!!!!」
甲高い金属音が鳴り響く。
ダンテは《リベリオン》を振るい、《閻魔刀》の斬撃を防いだ。

「マジか!?!」
体がガクンツ! と傾き体勢を崩した。
そんな絶好なチャンスを見逃すようなネロじゃない。

ネロは地面を蹴って飛び上がった。
瞬く間にダンテを追い越した。

「コレでも……」

《閻魔刀》を《右腕》の中に戻して、《レッドクイーン》の剣先を真下に居るダンテに向けた。

《レッドクイーン》の刀身はマグマの如く真っ赤に燃えたぎっていた。

「喰らいやがれ!!!!!!」

急降下を始めた。

それはダンテに向かって放たれた紅き閃光。 空気中にある酸素を取り込んで行き炎が噴出する。

刀身に炎が纏い、更に激しく燃える。

- MAX - ACTの限界を突破していた。

それをダンテは只見ているわけではなかった。 《リベリオン》を掴んでいる右腕を後ろに引いて力を溜める。

「Double」

ダンテに向かう紅蓮の刀身

「イイイイイイイイ」

溜めた力を爆発させて光になる刀身

「Down!!!!!!」

「ヤアアアアアアア!!!!!!」

《レッドクイーン》と《リベリオン》の剣先が触れる。

爆裂音が《魔界》全土に鳴り響く。

瞬間、二人の得物が投げ飛ばされ一つは物凄い速度で影が更に上空に上がり、もう一つはそれを超えるような速度で地面に激突した。

「ぐはっ！」

ネロの身体は更に上空に吹き飛び。

「うお！」

ダンテの身体は地面に叩きつけられた。

《レッドクイーン》と《リベリオン》は空中で回転をしながら、地面に突き刺さった。

《リベリオン》はダンテの顔のすぐ横に突き刺さった。頭一つ分横にずらしていら、顔に《リベリオン》が突き刺さっていた。

「クソが、体が動かねえ。」

ある程度の高さまで到達したネロは、重力にしたがって落下を始めた。

落下速度は徐々に上がっていく。ネロの今の状況はパラシュートなしスカイダイビングをしているようなもので、更に身体全身を襲う痺れの為に身体を動かせない。

地面までの距離は10mを切った。

地面と激突まで目前。その傍に《レッドクイーン》が地面に突き刺さっていた。

「冗談じゃねえよな。」

そのまま頭から突っ込んだ。

土煙が舞い上がり、辺り一帯が見えなくなったが、ネロの影らしき

ものが見えた。

ダンテは立ち上がり《リベリオン》を引き抜いた後にその影に視線を向けた。

まるで逆十字架のような影だった。

ダンテは軽く《リベリオン》を振り払う。

するとどうだ、辺り一面を覆っていた砂煙が消し飛んだ。

「ぶツ！！ 八八八八八八八八八八八八八八八八！！！！ 最高だ

ネロ！！！！！！」

拭いた後、腹を抱えて大爆笑し始めるダンテ。

ダンテが見たものは……

頭が地面に突き刺さり、背筋をキレイに伸ばしているネロの姿だった。

それは、バッファオーマンのフェイバリットホルドの一つ、超○十字架落としを喰らった状態と全く同じ状態だった。

ネロは手のひらを地面に着けて、逆立ちの要領で頭を引っっこ抜いた。地面に足をつける。左手で地面に突き刺さった《レッドクイーン》を引き抜く。

頭を揺らして髪に着いた砂を振り払った。

ドルウン！！ という爆音が鳴り、刀身が徐々に赤く染まっていく。ネロは何度も《レッドクイーン》のグリップを捻り《イクシード》を発生させる。

溜めれるところまで溜める。

「はあああああああああ！！！！」

《悪魔の右腕》でダンテの顔面を力一杯ぶん殴った。

ダンテの顔は地面にめり込み、地面には亀裂が入った。

ネロはまたダンテの髪の毛を掴み上げて《悪魔の右腕》をコンパクトに振って連続して殴る。

連続して殴る度にダンテの体がまるで痙攣でもしたかのように動く。

思いつ切り《悪魔の右腕》を振り上げて、

「おらあああああああ！！！！」

顔面に向けて、全体重を乗せたパンチがダンテの顔面に叩き落とし。強烈すぎるパンチがダンテの顔面に突き刺さる。その瞬間、辺り一帯に突風が吹き荒れる。

今までで一番の威力であり亀裂が入った。

此処までやっておいてもネロは攻撃の手を緩めるきは一切無い。

立ち上がったネロは《悪魔の右腕》でダンテの胸倉を掴み、持ち上げる。

「ネロ。前と同じパターンだと飽きるぞ。」

呆れたように言うダンテ。ネロ自身はそんな事は言われなくても分かっている。

ネロは初めてダンテと合って、一回目のダンテの戦闘の時に似たような事をしたのを今でも鮮明に思い出せる。

「そんなの分かっているさ。」

ネロはダンテの背後に回り腰に手を回してホールドした。

「お！？」

声を上げるダンテ。これから何が起こるのが楽しみになっている笑みだ。

「らあああああああ!!!」

飛び上がった。ダンテは一切の抵抗を見せない。

ある程度の高さまで来た時に、体勢を変えた。ダンテの脳天を真下にした。

「昇天してる!!!!!!」

身体を捻り、回転を加えた。

高速回転運動をしながら徐々に落下速度を上げていき、地面にダンテの脳天が……突き刺さった。

ネ口は直ぐにホルドを解いてその場から離れる。

ダンテの体が重力に従って地面に倒れる。頭は地面に突き刺さったままである。

見るからに首の骨が逝っていた。だって首が360°捻られていたから。

それでもダンテは死んでもなく、やられてもいなかった。

その事は重々承知していたネ口。

《悪魔の右腕》の疼きがドンドン強まって行く。

肌でも感じ取れる………空気が大気が振動している。

風なんて噴いてないのに、服が靡いて砂が舞い上がる。

ダンテが地面から頭を抜いて立ち上がる。立ち上がった後、首を元の位置に戻した。

口からは血が流れていて、それをそこら辺に吐き出した。首の方に手をやり色々な方向に動かす。

傷が治ったのを確認すると、ネ口を視線で射抜く。

オーラが体中からでる。

目は血のように真っ赤に輝き、声が重なる。

まるでエコーがかかるように。

背後には半透明かした騎士のような《異形》の姿が見える。

《悪魔の右腕》には力が開放された《閻魔刀》が握られていた。

ダンテは指を鳴らす。真紅の雷がダンテに向かって“昇る”まるで、空に帰る“龍が如く”

ダンテの瞳は血のように真っ赤に輝く、只ネロよりも色が濃い。

声が重なり、エコーみたいになる。

そして、《リベリオン》の髑髏の目が見開かれて血のように輝く、ダンテの瞳と何ら変わりなかった。

《リベリオン》が目覚めた。

ダンテはネロと違い、姿が《異形》の姿に変わる。

その姿こそがダンテの《悪魔》

ネロは《閻魔刀》を構え、ダンテは地面に突き刺さった《リベリオ
ン》を抜いた。

『 Let's Rock!!!!!!』

二つの魔剣《閻魔刀》と《リベリオン》が邂逅する。

” テ ン

《閻魔刀》と《リベリオ

《ネロ》と《ダン

“ 今決着が着く

番外編1 ダンテVSネロ〜三度目の戦い〜（後書き）

どうなるか凄く気になるでしょうが、この続きは、あえて書きませ
ん。

どう決着が着いたのかは読者の想像におまかせしようと思います。

決着の着き方は決して1つではない。

それを僕が決めれないので、読者の方々の想像におまかせしようと思
います。

なんたつて、勝敗は読者の“魂”にありますから。

次回は本編を更新します。

番外編2 《魔帝》と《霸王》そして《魔神》（前書き）

kyoさんのリクエストしてくださった。番外編です。

題名だけじゃ分からないと思いますが《魔帝ムンドウス》と《ザ・デイスペア・エンボディード》の戦闘です。

上手く書けた自信はありませんが、楽しんでくれたら嬉しいです。それでは、始まります。

番外編2 〈魔帝〉と〈霸王〉そして〈魔神〉

大宇宙。

今此処に《魔界》を統べる為の最終決戦が始まるうとしていた。

魔帝軍と霸王軍の戦争は1000年以上は続いていた。元々霸王軍は魔帝軍の配下にあつたが、その霸王軍の長が魔帝軍を裏切つた。その行為は魔帝軍の長の怒りを買うことになり、魔帝軍と霸王軍の戦争が始まつた。その戦争もついに決着が着こうとしていた。

さまざまな物を創造する力を持つことから世界または宇宙と称されていた、その姿は神々しく天使の姿をしているが、正体は触手だらけの化け物である。それが《無限の創造主》である《魔帝ムンドウス》

雌雄同体の神々しい人型の肉体を持つ為信仰対象とされていた事もあるらしいが、その本質は「絶望」の具現。それが《究極・絶望の具現者》である《霸王ザ・デイスペア・エンボディード》

様々な魔具を自由自在に操り只己の力のみで全てを圧倒するその姿は魔神。誰もが畏怖し崇高するその存在には魔剣の頂点に立つ三つの魔剣を己の体のように自由自在に操り全てを無に帰す。それが《破壊の魔神》である《魔界最強の魔剣士・魔神スパイダ》

《魔帝ムンドウス》と《霸王ザ・ディスペア・エンボディード》
またの名を《無限の創造主》と《究極・絶望の具現者》の戦いであった。

「まさか、お主が我を裏切る事になろうとはな!!」
ムンドウスには怒りが滲み出ていた。その怒りの矛先は、対立しているザ・ディスペア・エンボディードに向けられていた。

「そんな事は当たり前だろう。誰もが魔界の王になりたいのは？
必然。」

ザ・ディスペア・エンボディードは坦々と答える。今更になって「なぜ？」そんな事を聞くのか全く理解が出来ない。

《悪魔》として生を受け、《霸王》と呼ばれている我がなぜ王の座を狙ってはいけないのか？ 《悪魔》として生を受けたのであれば、《魔界の王》の座を狙うのは当たり前であろう。

それでも例外が居る。

《魔界最強の魔剣士・魔神スパイダ》またの名を《破壊の魔神》と呼ばれる彼は、全く《魔界の王の座》に興味が無いらしい。

興味があつたら、最初からこの場に《魔帝》《霸王》《魔神》が揃っていて三つの軍勢による戦争が行われていたハズだ。

この《魔界》それぞれ三つの派閥がある。

《魔帝ムンドウス》を崇高する《魔帝軍》と、《霸王ザ・デイスペア・エンボデイド》を崇高する《霸王軍》。そして《魔界最強の魔剣士・魔神スパイダ》を崇高する《魔神軍》の三つの派閥が存在していた。

『覚悟は出来ているんじゃないやろうな。』

『それは、とつくの前から出来ている。当然!!』
先制攻撃とばかりに、エンボデイドは右腕を突出した。その腕からムチみたいのが出てきて、突き刺すようにしてムンドウスを狙う。その一撃は高速を超え全てを貫く一撃、たとえムンドウスでも喰らえば一溜まりもない。

『小賢しいわ!!』
左腕を振り払い、はじき飛ばした。

仕返しとばかりに両手を左右に広げて、その両手から光線を一度にいくつも放った。

その数万単位。

エンボデイドは翼を広げて空に上がる。迫りくる光線を避ける。

避けきれない光線は、全てムチみたいなものを手から出して叩き落とす。そうしながらもエンボデイドは隙を突いてはムチを突き出す。

しかし、それはムンドウスに届くことは無い。ムンドウスには絶対防御という壁が存在する。それはムンドウスの周りを回転しながら旋回している六つの白く赤い線が入った物体が作り出している。直接ムンドウスにダメージを与えようものなら、それを破壊しなければならぬ。相手はあの《魔帝ムンドウス》。攻撃を避けながら、それを破壊するのは至難の技だ。その事は戦う前からエンボデイドも分かっていることである。

『面倒。故に破壊する。』

エンボデイドは翼を力強く広げた。瞬間、無数の光弾が一斉に発射された。

光弾は天高く舞い上がり、そして、

『ぐおおおおおおおおお！！ 貴様！』

嵐のように降り注ぐ。

それはあの巨大なムンドウスを覆いつくすほどの数であり、絶対防御を展開している物体をすべて破壊された。ムンドウスは光弾を全身に浴びた。

『容赦無用。』

同じように翼を力強く広げたが、先程放った光弾とは大きさが比べものにならないほどの光弾を数十放つ。それは吸いこまれるようにしてムンドウスの胸にある巨大で、血のように真っ赤なコアに直撃した。

ムンドウスは『ぐおおおおおおお！！！！！！』と苦痛の声を上げる。

『下手な芝居をするな。不要。本気で来い。』

『なんだ。つまらんの。』

ケロツとしているムンドウス。エンボディードの攻撃は殆どノーダメージだった。

蚊に刺されたぐらいとしか思っていない。

『次は我から行くぞ。』

ムンドウスの前眼に半径10m以上の魔法陣が展開された。

『危険察知。』

瞬間移動を使いその場から1?以上離れた瞬間に、エンボディードが居た場所が巨大な白銀の光線で薙ぎ払われた。

あんな物を喰らっては一溜まりもない。エンボディードは小さく舌打ちをした。

『面倒な。』

ムンドウスがまた絶対防御を展開したのを見て、呟く。エンボディードは思う。

彼のような一撃で全てを無に返すような一撃があればと、その絶対防御ですら力でねじ伏せる事の出来る力があればこんな苦勞はしないのに、今はそんな事を思っても仕方がなかった。

『来ぬのならやらせてもらっぞ。』

落雷が発生する。それらは、すべてエンボディードに向かって落ちる。

エンボディードはそれらを瞬間移動を使い避ける。すると目の前から隕石の大群が迫ってくる。

隕石はこの大宇宙全てを覆いつくすほどの数で、瞬間移動ですら避けることは不可能に近いと思えるほどだった。面倒だ。エンボディードは動きを止めた。

『諦めたか、死ね。』

隕石の大群と共に雷が落ちる。その時ムンドウスは見た、エンボディードがこの危機的状況で笑みを浮かべたのを、そしてそれと同時に悪寒を感じた。

気づいた時には既に遅かった。

すべてエンボディードに直撃した。

さあ、始まる。

なぜ《霸王ザ・デイスピア・エンボディード》が《究極・絶望の具現者》とよばれているのか。

今始まる《究極の絶望》が!!!!!!

其処には無傷のエンボディードが居た。

そして、その隣にもう一つの人影が合った。その存在が今の攻撃をすべてをたつたの一太刀で消し去ってしまった。

ムンドウスはその人影を見ただけでその存在が誰なのか瞬時に理解し、その存在に絶望し、そして心の其処から怒りを現わにする。

その存在は唯一ムンドウスを力だけで圧倒できる存在であり、天敵とも言える存在であり魔帝ムンドウス。そして霸王ザ・デイスピア・エンボディードの唯一無二の親友であった。

『き・さ・ま!!!!!!』

右腕を突き出して極太の光線を放つ。その一撃は全てを灰塵に返す

一撃、直撃。死に繋がる。

それは光速と同等の速さで、放った瞬間にはエンボディアの目の前に広がっていた。

『俺を守れ。』

しかし、それはエンボディアに届くことは無かった。なぜなら、もう一つの人影がエンボディアの前に立ちふさがり片刃の大剣で薙ぎ払う。それは振るう瞬間にムンドウスを超える大きさに変わった。

光線は消え去り、更にムンドウスの絶対防御を力でねじ伏せて一太刀浴びせた。

その一撃により大ダメージを受けたムンドウス。更に追撃が迫る。

その大剣が振り上げられ、振り下ろされる。

ムンドウスはそれを腕をクロスさせて防ごうとするが、

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』
『!!!!!!!』

刃が腕に食い込みアツサリ切り落とされる。その勢いのままムンドウスを縦に切り裂く。

両腕を無くしたムンドウスに追撃を加える人影。

『ガアアアアあああああああ!!!』

神々しい巨大な翼はバラバラに切り落とされ、化けの仮面が剥がされていく。少しづつ身体を破壊されて行きムンドウスの正体の触手が現わになっていく。

『ぐおおおおおのおおおお!!!』

触手の先端が鋭い槍になり、エンボデイドと人影に四方八方から襲いかかる。

無情にも人影が大剣を薙ぎ払い、四方八方から襲いかかってきた触手が消し飛ぶ。だが、その消し飛んだ部分が再生していきまた同じように襲いかかる。

また、その人影が大剣を振るい触手を消し去る。その一連の行動が何度も何度も繰り返される。

それでも、エンボデイドの方が優勢だという事に変わりはない。エンボデイドはこの一連の行動を只その人影の後ろで見ているだけだった。

『ムンドウス。貴様の力はその程度か……つまらん。』
エンボデイドは、翼を閉じて力を溜める。

『フンツー!!』
それを解き放つ。翼から星の数の光弾が上に打ち上げられた。光弾はこの大宇宙に溶け込み、そして全てが隕石となりムンドウスに降り注ぐ。

『貴様ごときに、我が負けるかああああああああ!!!!』
『!!』

目の前に無数の魔法陣を展開させて、砲撃を放ち我に襲ってくる隕石を薙ぎ払う。全てを破壊するのは不可能だった為、無数の数の隕石を全身で受けた。

絶対防御を展開していたが、展開している物体を隕石が即座に破壊し絶対防御を消し去る。

それはムンドウスに絶大のダメージを与えた。

『殺れ』

その一声で人影は動いた。彼は大剣を逆手持ちに切り替え、腰を落とす。

刀身に魔力が蓄積されていき、とうとうムンドウスが作り出したこの大宇宙に歪みが入り始めた。最初は極性の歪みであったが、それが徐々に大きくなっていく。

刀身は真紅に染まり紅い雷を放電し始めた。その放電の範囲も魔力が蓄積する度に、大宇宙が歪む度に大きく凶悪な物になっていく。それは傍で見て感じているエンボデイドが、良く分かっている。その一撃の恐ろしさが、凶悪さが、こんなのをまともに喰らえば《霸王ザ・デイスピア・エンボデイド》という存在が完全に消滅するといっても過言では無い。

故に《魔帝ムンドウス》と《霸王ザ・デイスピア・エンボデイド》は彼に恐怖する。

故に、絶対に彼とは戦闘を行わないと決めている。

故に、誰も彼が《魔界》最強だと知っている。

故に、《魔界》において絶対に戦ってはいけない存在である。

故に、彼が《魔界最強の魔剣士・魔神》と言われている。

大剣を振り上げる。

込められた最強の最悪が解放される。

赤黒い斬撃がムンドウスに向かって飛来する。それは大宇宙の理を

た。
ムンドウスの砲撃は一瞬にして切り裂かれて、下半身を喰らい尽くした。
だが、そんな事よりもムンドウスは完全にキレていた。それは起こしてはいけない、内に眠る《魔帝》を叩き起こしてしまった。

いきなりムンドウスの目の前にザ・デイスピア・エンボディードが瞬間移動で姿を現すと、両腕を突き出す。それは一つになり高速の速さで伸び先端は槍のように変化し、額にある三つ目の目を貫く。

『ふん。』

引き抜くと、後まで貫通していた。すると、突然腕の動きが止まった。

腕が掴まれていた。

『捕まえたぞ！！！！！！！！』

ガラスが砕け散るような音が響いた。

『ぐがああああああああああ！！！！！！』

ザ・デイスピア・エンボディードの両腕が砕け散った。だけど、その傷口から新たな腕が生えてきた。

ドンツ！！！！！！ という何かが衝突した音が《魔界》全体に鳴り響いき、大気を揺らす。

エンボディードの体が吹っ飛ぶ。その勢いは山を崩し谷を崩し絶壁を崩して、やっとの事で止まった。元の位置から100?以上も吹き飛ばされていた。

エンボディードの両腕と翼は千切れていて、下半身が有り得ない方向に曲がっていた。

『ぐが！！！！』

紅蓮に燃えさかる隕石エンボデイドの身体を捉えた。次の瞬間、大爆発を起こした。

その爆発の中から両腕と翼が再生したエンボデイドが出てきた。

すると突然、エンボデイドの体が“く”の字に曲がり上空に打ち上げられた。

そこにはとある《悪魔》の姿があった。

『ベオウルフ！ 貴様』

《スパイダ》と同じ《破壊を統べる悪魔・ベオウルフ》彼の純粹の一撃は、岩盤を砕く一撃。

それをボデューに喰らった。いくら《霸王》といえど一溜まりもない。

『ぐはッ！！』

背中に強烈な衝撃が走った瞬間には、地面に叩きつけられていた。

何が起きたのか全く分らない。困惑を隠せないエンボデイド。

起き上がるうとしたときに、目の前から岩石が迫っていた。ベオウルフが投げ飛ばした物であった。

『邪魔だ！』

腕をムチに変化させて、それで岩石を絡めとる。

『ふんっ！！』

力を入れると岩石は細切れになり、地に帰る。

後頭部に物凄い衝撃が走る。エンボデイドは吹き飛ばされる。エンボデイドは何度も地面に身体を打ち付けてバウンドする。

ベオウルフのラリアットが直撃した。

なんとか起き上がり空に視線を向けると、そこには体全身からマグ

マのように燃えたぎる炎を噴出し、二本の捻れた大きな角が頭から生えていて、その全長は5mを超えていた。そして筋肉隆々であった。その存在の名は、

『イフリイイイトオオオオオオ!!!』

《炎帝・イフリート》が両手足に獄炎を纏い、背中には黒炎で作られし翼、空を飛んでいた。

エンボデイドは、怒りを現わにし彼の名前を叫びながら空に上がり一瞬にしてイフリートの目の前に出現した。右腕を剣に変化させた。それをイフリートに向けて突出した。全く反応出来なかったイフリートはそれを喰らう。

『はッ!!!』

掛け声一発で、イフリートの体の中から針が飛び出してグチャグチャにした。エンボデイドは返り血を全身に浴びた。その血は炎である。

その血は最後の悪足掻きで、エンボデイドを燃やしつくそうとする。

『小賢しい!』

振り払う。炎は消え去る。

そして、地上に居るベオウルフに視線を移した。その瞳には憤怒が映し出されていた。

『ベオウルフウウウウウ!!!』

翼を広げ、力を収束し解き放つ。無数に発射された光弾はベオウルフに襲いかかる。

それに対抗するように二対四枚の天使のような翼を広げて、光弾を放つ。それは一瞬にして砕け散った。数が違いすぎるエンボディードは《魔界》の空を覆うほどの光弾、ベオウルフはたったの数百しかない。結果は言わなくとも分かるだろう。

ベオウルフは全身を貫かれ、原型を留めていなかった。用は只の肉塊に成り果てたのだ。

肉塊から生臭い臭いと、鉄の臭いが辺りに充満した。

そして《霸王ザ・デイスペア・エンボディード》は思い出していた。《魔帝ムンドウス》の真の力である《無限の創造主》の力を。

《魔帝ムンドウス》は何でも頭に浮かべた存在を作り出すことができる。それは《悪魔》に関することと《自分》に関することだけである。

だから、創りだしたいと思った《悪魔》を作り出すことができる。

しかし創り出された《悪魔》には知能も無く言葉を発する事ができない。それは《腹心・重臣》クラスも例外ではない。

今此処に居るはずの無い二体の《腹心・重臣》クラスの《悪魔》がいた。それが《破壊を統べる悪魔・ベオウルフ》と《炎帝・イフリート》だった。

そして、もう一つが自分の完全再生。

《無限の想像》それは自分に対しての創造が出来る。死ぬ一歩手前まで弱つていてもそれを発動すれば傷はすべて再生され、更に体力・魔力までもが完全に回復する。

故に、彼は《無限の創造主》と称されている。

『エンボディード。貴様は我を愚弄した。』

目の前からムンドウスが現れた。しかも、《上級悪魔》と《腹心・重臣》クラスの《悪魔》を連れていた。だが、その中には彼の存在

はなかった……エンボディードにとってそんな事はどうでもよくなっていた。

そして理解した。あの《悪魔》達はムンドウスの力に寄って創り出された存在、我が葬った《悪魔》も沢山いた。エンボディードは自嘲気味に笑った。

その笑いは全てを悟ったような笑いに見えた。

『此処までか……』

『だが、ムンドウス!!!!!! 我が魂はただではやらんぞ!!!!!!』

同時に全身から光弾を放出する。その数は《魔界》全体を覆い尽くした。

その瞬間だけ《魔界》のどの位置に居ても、《魔界》特有の暗黒の空色ではなく、光り輝いていた空色が広がった。

それらは円運動をしながら一箇所に集まって行く。

その光景はまるで、全てを吸いつくすブラックホールに見えた。

光弾はすべて一つになり巨大な光弾を作り出した。

その半径は優に100?を超えていた。まるでそれは小さな灼熱の太陽だった。

『The absolute ultimate despair!!!!!!』
!!!!!! (究極の絶対絶望!!!!!!)』

《魔帝》達に向かって振り下ろされた。それは触れる存在を全てを消滅させて突き進む。

空を消し、大気を消し、色を消し、何もかも消滅させて消し進む。

《魔帝》はそれを自らが作り出した《悪魔》達を操り自分の目の前

に突出した。ムンドウスは無情にも作り出した《悪魔》達を盾にした。
更にムンドウスは自分だけに絶対防御を何重にも展開した。絶対防御を展開してるアレは全て、ムンドウスを中心にして半径1000?の地点に配置した。

《The absolute ultimate despair》は盾にされた《悪魔》達を消滅させムンドウスに接近していく。ムンドウスは一切の負の感情を見せない。只笑っている……不気味に笑っている。

とうとう《The absolute ultimate despair》は絶対防御に触れ、それを飲み込んでそのままムンドウスも飲み込む。
地面に激突して大爆発を起こす。

《魔界》全土が揺れ、《魔界》全体に真っ赤な空が差した。その爆発により地形は変形したと同時に幾つもの領土を飲み込んで消し飛ばす。それは、この戦争に参加していない《悪魔》も例外なく消滅させた。

大爆発が収まると、其処には何も無い。半径1000?圏内に存在していた全ての存在が消滅した。その中心部は底が全く見えない。深さは最低でも1000?近くあるであろうという予測がつく。

そういう無茶苦茶過ぎる一撃をおみまいしてやったエンボディードの表情は優れない。

『ムンドウス。』

《魔帝ムンドウス》の姿があった。その体には傷という傷は一切無い綺麗な身体をしていた。

そして誰もが彼を初めて見たらこう思うだろう……神……そう思っても仕方がなかった。それほど“今”の《魔帝ムンドウス》の姿は神々しかった。

気がついたら無意識に体が動いていた。《霸王ザ・デイスペア・エンボデイド》は膝まついていた。それはなんでか分らない。しかし、体が勝手に反応して膝まついていたと同時に《魔帝ムンドウス》がどれほどの存在であるか改めて知らしめられた。

『《霸王ザ・デイスペア・エンボデイド》よ。我に忠誠を誓うか？』

《魔帝ムンドウス》は一步一步と《霸王ザ・デイスペア・エンボデイド》に近づいていく。その足取りは何者にも阻まれない力強さを感じられた。

それは《魔界最強の魔剣士・魔神スパード》ですら難しいことであるろう。

『ハイッ！』

という一つ返事で答えた。これも自分の意識に関係無しに答えていた。

そしてこの瞬間、1000年以上続いていた《魔帝軍》と《霸王軍》の戦争に終止符が打たれた。

《魔帝軍》の勝利と言う名で。

それから《霸王ザ・デイスペア・エンボデイド》は《魔帝ムンドウス》の右腕として未来永劫に受け継がれるであろう武勇伝、歴史を残した。

《魔帝軍》と《霸王軍》の戦争が集結してから約1000年後《魔帝ムンドウス》が《魔界の王の座》に君臨していた《魔王サタン》を圧倒的な力の差を見せつけて呆気なく勝敗は決した。

《魔王サタン》の“死”という名で。

その日《魔界》全土に知れ渡った《魔帝ムンドウス》が《魔界の王の座》に着いたという情報が、それは《魔界》全土を震撼させることであった。

誰もが《魔王サタン》の勝利で終わると確信していた。それが一瞬にして崩れさり、裏切られた。

《魔王サタン》。彼の名を知らない者は《魔界》には存在しない。彼は《魔界》の《神》であり、《無敵》の存在であった。

《魔界最強の魔剣士・魔神スパード》とは強さの《次元》が違いすぎる。《魔神スパード》は《最強》と呼ばれていたが、《魔王サタン》は《無敵》絶対に負けるハズの無い存在であった。

その《無敵》がたかが《無限の創造主》如きに、圧倒的な力の差を見せつけられて《魔王サタン》の“死”で決着が着いた。

この時《魔帝ムンドウス》の力は《魔神スパード》を遥かに超えていた。それは同時に《魔神軍》が《魔帝軍》の配下に下ったと意味を成した。

《魔界》では力あるものが上に立つ、力の弱いものは力の強い者の下につく。それは《悪魔》としての本能だった。

この瞬間《魔帝ムンドウス》と呼ばれていた《悪魔》は《魔帝王ム

ンドウス』と呼ばれるようになる。

そしてこの《魔界》に置いて《魔帝王ムンドウス》の名前を知らぬ《悪魔》は存在しなくなつた。

《魔帝王ムンドウス》彼が《魔界の王の座》に君臨していたのは10000年以上も続いた。

だが、そんな彼の時代も終わつた。

紀伝の通り《魔神スパイダ》の《人間側》に着くという反逆により、《魔帝王ムンドウス》は彼に地獄のなかの地獄タルタロスに封印された。

番外編2 《魔帝》と《霸王》そして《魔神》（後書き）

kyoさんこんな感じでよろしかったでしょうか。

少し自分で色々試行錯誤しながら書きました。満足していただいたでしょうか？ それとも物足りない感じでしたでしょうか？

満足していただいたら嬉しい限りです。

次回は本編をこうしんしようと思います。

act 1 頭文字「D」（前書き）

メインが進まないのにやっつけてしまうバカ事、vergieeです。

なんか最近スランプと言うか忙しいというか・・・なんて言えばいいのか判りませんが大変です。

家で色々な事が立て続けに起こっていてとても大変です。

メインの方は話の構成は大分できているのですが（一応STS編ま
で出来ています。）上手く文章に出来ずになかなか進まないので困
っています。

話はいきなり変わりますが、この小説はお口直しみたいな感じで読
んでくれて構いません。

それでは始まります。

act 1 頭文字「D」

「此処が、おっさんの事務所か。」
青年はある便利屋の扉を開けて、中に入り辺りを見回すがおっさんが居ない。

だが、それよりも目立ったのがデスクの後ろにこの世の生き物とは思えない生物の頭が吊るしてあったり、剣で突き刺してあったり、鎌で突き刺していた。

青年は趣味が良いとは全く思えなかった。悪趣味だと思えた。

こんな遠くのスラム街の奥地にある“便利屋”に自分から人を呼んでおいて、時間内に居ないとはどういう了見だオッサン。青年のこめかみに青筋が走る。

此処まで来るのに、十日以上も掛かったんだぞ。

扉を開けた青年の後ろからついて行くようにして一人の女性が入ってきた。

しかも、ホコリが充満しているし、クモの巣も部屋の隅や角にたくさん張つてある。

全く、何時から掃除をしてないんだ…幾ら何でも汚すぎるぞ、体に悪すぎるぞ。

「……………はあ……………」
青年は手でこめかみを押さえて、深く大きなため息を吐いた。
これじゃあ、掃除が大変だな。そう思えて仕方がなかった。

「ネロ、私も手伝うから。」
青年の肩に、ポンツ！と手を置いて青年の事をネロと呼んだ女性は、キリエと呼ばれる女性だ。

ネロとキリエの関係は一般的に言う、恋人同士である。

今の関係になる前までは、ネロにとってキリエは姉のような存在で、キリエにとってネロは弟のような存在だったが、1年前にあった事件をキツカケに二人は付き合いだした。

喧嘩もたまにしてしまうが、いつも中睦まじく、二人つきりのときだけ幸せオーラを全開し、半径100m以内に桃色の空間を作り出すときがある。

まず此処で、ネロという人物とキリエという人物について紹介しよう。

ネロ

自覚はないが……の血族である。

‘元’魔剣教団に所属する騎士。

実力だけは周囲から一目置かれていたものの、厭世的で皮肉屋、協調性に欠ける性格故任務はいつも単独行動。とある事件の際、右腕が《悪魔の腕》に変貌してしまった。

教団騎士の若き戦士だが性格に難アリらしく汚れ仕事を命ぜられることが多い。

悪魔の力を右腕に宿す。その実力から周囲に一目置かれている「教団騎士」の若き戦士。厭世的で皮肉屋、周囲との協調性に欠け、単独行動を何よりも好む説がある。

天涯孤独の孤児で、黒い布に包まれて捨てられていた事からイタリア語で「黒」を意味する「Neio」と名付けられた。

クレドやキリエと家族同然に育ったものの、二人の両親が悪魔に殺されたことから信仰を失い、弱い者を護るための力を欲するようになった。

や

ー

と違い武器を持ち変えることはなく、

悪魔の右腕

デビルプリンガー

以外の武器は機械式レッドクインの大型剣と二連銃身の回転式拳銃ブルーローズ、教団の研究

室から手に入れた

ーの愛刀《閻魔刀》のみ。

悪魔の力を解放するデビルトリガーは、 やー のような
魔人への変身ではなく、自身の背後に騎士の姿をした魔力を具現化
させるもの。

キリエ

教団騎士の団長を兄に持ち、「魔剣祭」と呼ばれる大祭において歌
姫を務める。

天涯孤独のネロと家族同然に過ごしてきたという経緯がある。
途轍もないほどのお人好しでもある。

ネロにとっては姉のような人物で、兄弟のような恋人のような母親
のような曖昧な関係を保っていたが、現在ではやっとお互いの気持
ちを伝え合い、お互い念願の恋人同士になれた。

それはともかく、

「あのおっさん、戻ってきたら、バスター3回の極刑にしてやる。」

ネロはとにかくブチキレていた。

悪魔の右腕 デビルプリンガー を握り締めプルプル震わせながら。

それからネロとキリエは、“DEVIL MAY CRY”の大掃
除を始めた。

ネロはゴミ袋をゴミステーションに持っていた。

何十往復も繰り返した。

キリエはバケツと雑巾を探し出して、床、窓のホコリを取った後に
雑巾がけをした。

ネロはごみを出し終わった後、力仕事をしていた。

主にテーブルを運んだり、ビリヤード台を運んだりしていた。

それが終わったとは、脚立を取り出してきて高い位置の掃除も始めた。

掃除中ネロは何度も愚痴を言っていた。

「おっさん、掃除ぐらいしろよ。ホコリが溜まり過ぎだ。」

「dammit!!」

虫の死骸を踏んだときに、

「shit!!」

お気に入りの服が汚れた時に、

「dante you die!!」

ゴキブリがネロの服に侵入した時に、

ネロの怒りパラメーターは急激に溜まっていった。

今のネロの背後には、青白い色の怒りのオーラがハッキリと映し出されていた。

ネロに対して生き物としての本能の危険回避能力が働いたのか、ネロの周りに居た虫全てが一斉に逃げ出した。

逃げ出した虫は、ゴキブリにムカデにゲジゲジに巨大なクモなど様々な虫が逃げていった。

「hu crazy」

ネロは虫たちが一斉に逃げていく様を見て、そう呟いた。
ホラー映画の中でも吐き気が起きそうなシーンだ。

こうなったのも、あのおっさんが俺の所に来たのが原因だな。
マジで、おっさんと関わったら碌な事にならないな。

何でネロとキリエが“DEVIR MAY CRY”に居るのかと
いうと、それは今から約一ヶ月前まで遡る。

（約一ヶ月前）

とある公道をネロはとある目的地に向かってバイクを走らせていた。
勿論ノーヘルでバイクを走らせているネロ。

何時ものように、《悪魔を狩る》為に動いている。

今回の依頼者は珍しく、自らが経営している“DEVIR NEV
ER CRY”に出向いてきた。

こういう《悪魔関係》の事は電話が大半を占めていて、自らが出向
くってという依頼者は多くない、どちらかと言うと、とても少ない方
だ。

だが、自らで向いてくる依頼者の仕事は大抵《強力な悪魔》を狩る
事が多い。

（ ）

故にネロは上機嫌に口笛を吹いていた。

基本的に此処、フォルトウナに住む悪魔は大抵弱い。強い悪魔なんて月に一回でも出現すれば良い方だ。

だけど、あのおっさんは偶に俺の事務所に来て、依頼を頼んでくる。もちろん協力する感じで一緒にやっている。

おっさんが持ちかけてくる依頼は、悪魔が手強く遣り甲斐があるんだが……おっさんに関わると、碌な事にならない。

しかし、それでも得する事がある。

出来れば毎日のように強い悪魔が出てきて欲しい。

此処の悪魔は弱い、ずっと弱い悪魔しか戦っていないから、自分の腕が鈍っていきそうなんだ。

次に上級悪魔が出たときに俺は、渡り合う事が出来るのか？ キリ工を守ることは出来るのか……あの時のような事にならないのか？

色々な思いがネロの中を駆け巡っていた。

ネロはそんな邪念を振り払うようにして、顔を左右に振って頭の中を切り替えた。

“狩り”モードに切り替えた。

今回の依頼の悪魔は相当な奴らしいと、依頼者から聞いている。

何処まで凄いのかわからないが、相当な強さらしい。

だが、あの時の事件のような強力な悪魔なわけ無いが……俺は一体何を考えているんだ。

まあいい、先に仕事が優先だ。

ネロは更にバイクの速度を上げて公道を駆け抜けた。

その際にサツに追いかけられたが、ネロが乗っているこのバイクは

魔改造されていて、軽く300キロ以上はでるバイクに改造されている。

最高速度が500キロ近くで1秒もあれば100キロは出すことが可能である。

尋常じゃない加速力だ。

故にサツに追いかけても逃げ切る事が出来る。

サツに追いかけられたネロは、サツを軽く突き放してやった。

たとえネロを取り押さえても、意味が無かったであろう。

ネロを取り押さえるのであれば、キリエまたは頭文字に「D」がつく男《史上最強の悪魔狩人》、ネロが常にオッサン又は髭と呼んでいる男を連れてこないが無理であろう。

ほどなくして目的地に着いたネロはバイクを降りてフォルトウナ城に入った。

この城はあの事件以来完全封鎖されていて、今では魔界と唯一繋がりのある場所と化してしていた。

今のネロにはそんな事を知るよしも無く、只このフォルトウナ城が封鎖されたことしか知らなかったネロは、大きな扉を開けて中に入り、大聖堂を見回している。

「ボロボロのままだな。それで、こんな所に悪魔が居るのか？」

ネロがそう思うのは無理も無い。

ネロの右腕《悪魔の腕》は、悪魔の気配を感じ、蒼い光を手の甲から発する。

しかし、光を発するおろか、悪魔特有の殺気とあのネっとりした嫌な空気をまったく感じさせない。

悪魔の階級が高ければ高いほどに、殺気とネットリした嫌な空気の密度が高くなる。

その変わり、嫌な静けさだけがこのフォルトゥナ城を支配していた。何の物音もなく、自分が空気をはく息と吸う息、外の風の音しか聴こえない。

ネロは大聖堂の中央の道を歩き、丁度、大聖堂の真ん中の位置まで来て……。その瞬間、横っ跳びで後ろから迫ってきた赤い光の線を避けた。

赤い光の線はそのまま進み壁に穴を開けて飛散した。

ネロは横っ飛びしたあと、素速いうごきでブルーローズを抜き銃口を赤い光の線を放った方向に向けながら、視線も同時に向けた。

ネロの視線がとらえた者が、

「……robot……」

丸い卵型のrobotが居た。

ネロの思考は一瞬にして停止した後、

（ロボットが居る？　なんでロボット居る。その前にフォルトゥナにロボットなんて物を作る技術力は無いし、何より作るとは思えない。ロボットと言えば、人形かネコ型のどちらかと、相場は決まっているはずだ。）

此処までの考えまでに行き着くまで、0.1秒だった。

ネロはロボットとある程度の距離を保ちながら、ロボットを観察した。ロボットには赤いレンズが付いていて、浮いている。腕らしき物は無い。
なら攻撃方法は、

ダンッ！ ネロは地面を蹴って放たれた赤い閃光を避けた。
この赤い閃光だけだ！！

ネロは突進するように体制を低くして、駆けた。

「h a a a a a a a a a a a a a a ! ! 」

左手でレッドクイーンを握りしめて、ロボットのレンズに向けて剣先を突き出して貫いた。

ロボットはその場で動かなくなり、

ズゴーン！！ と爆発音をだして爆発を起こした。
爆発はネロを巻き込んだ。

爆風が晴れると、ネロは無傷で立っていた。しかし、お気に入りの服が爆発で破け、焦げ目が付き、黒く変色していた。

「最後に爆発とは、やってくれるじゃねえか。」
ネロの額には怒りマークが何個も浮かんでいた。
いつも着るほどのお気に入りだったのだ、ネロは相当頭にきた。

「！！！！！！」

ダンッ！！ ネロは力強く地面を蹴って真上に跳んだ。
視線を落とすと赤い光線が何発も交差していた。

何処に隠れていたか知らないが、沢山の卵型ロボットが姿を現した。
見渡す限りざつと30体は軽く居る。

「チッ！」

ネロは軽く舌打ちをした。

ネロにとって雑魚は興味の無い相手、先程の一体の卵型ロボットを破壊して分かったのだ、このロボットは脆く雑魚だと。

俺を鍛え上げるのに役者不足だということを、感覚的に本能的に理解をした。

幾ら雑魚が集まろうと雑魚は雑魚、ネロの眼中にない。

レッドクイーンを左手でつかみ、アクセルを回した。

大型バイクがアクセルを蒸しているようなエンジン音が響いた。

アクセルを回す度に刀身は真っ赤に染まっていき、刀身は周辺には熱を帯びているのがハッキリわかるほどの変化が現れていた。

「dive！！」

刀身を真下に向けて急速に落下を始めた。

刀身が床に突き刺さると……途轍もない爆音が鳴り響き、床は砕け散り、床が砕けた破片が辺りを舞い砂煙と同じような状況になっている。

辺りの視界は悪く、ハッキリと物が見えなくなっていた。

その中で、ブルンッ！！ ブルンッ！！ とレッドクイーンのエン

気なく全機徹底的に破壊された。
言葉通り“破壊”された、跡形も無くネロは破壊し尽くした。
戦闘時間は5分も満たなかった。

辺りには丸型ロボットの残骸と、ボロボロになった大聖堂が目立つ。

「帰るか。」

ネロは、大破した大聖堂を気にも止めず帰るために扉に手を置いて開けた。

「いや、まだ終わってねえよな!!」

振り返り、弾丸を御見舞いしてやった。

何かが弾けるような音がした後爆発音が聞こえた。

やけに爆発音がハッキリと聞こえた。

ネロは帰っていった。

つまらなさそうな顔をしていた。

(肩慣らしにも成らなかったな)

時間も場所も過ぎ、報酬を貰ってすぐに帰り扉に手をかけたが、すぐに開けようとはしなかった。

《悪魔の右腕》が疼く……何時もの《疼き》とは全く違う。

まるでロープでグルグル巻にされて締め付けるような、そんな痛みだ。

ネロは決してMではない。

(この疼きは・・・アイツが来ているのか？ 「冗談だろう!？」)
不安になりつつも扉に手をかけてユツクリと扉を開いた。

バタンツ!! 勢い良く直ぐに扉を閉めた。

それも《悪魔の右腕》で渾身の力を込めて閉めた。

(なぜだ! なぜアイツが居る。いやイヤイヤそんなはずはない。アイツが俺の所に来るわけがない。そうだ、幻覚だ! 幻覚に決まっている。頭文字に「D」が付く男なんて居る分けがない、きつと疲れているんだ。そうだ、そうだよな。)

ネロはもう一度扉を開けて中を再度確認した。

ネロの表情は一瞬にして凍りついた後、歪ませていた。

「Hey! Kid 遅い帰りじゃないか。夜遊びでもしてたのか。夜遊びを程々にしないとキリエの嬢ちゃんが泣くぞ。」

その瞬間にネロの平和は音を立てて一瞬にして崩れ去っていった。

この瞬間からDEVIR HUNTER、Sのリリカルな世界の始まりの鐘の音が告げた。

a c t 1 頭文字「D」(後書き)

この小説は一ヶ月に1話、2話ぐらいのペースで進むと
考えてください。

次回「次元移動」

act 2 meet again へ再開

(前書き)

こちらの方も更新しました。

後、2話後ぐらいでなのは達とで会う予定です。

追記、今日中に3兄弟更新予定です。
好かったら読んでみてください！！

act 2 meet again〈再開〉

「hey kid! 遅い帰りじゃないか。夜遊びは程々にな、キリエの嬢ちゃんが悲しむぜ。」

頭文字「D」こと、ダンテが帰ってきたネロにそう言った。

ダンテはネロの椅子に腰掛け、ネロ専用の机に両足を「ドカツ」と置いている。

更にダンテは、勝手に頼んだデリバリーピザ（オリーブオイル抜き）とジントニックを飲んでいる。

その隣に、ダンテの愛銃、42口径の漆黑と白銀のエポニー&amp; p・アイボリーが置かれていた。

ネロは頭痛がする頭を抑えて「はあ〜〜」と深いため息をついた。

「オッサン、一体何の用だ。」

突き放すようなキツイ口調で、ダンテの目の前に来て言った。

そう言うネロだが、ダンテが此処に来るのは依頼を手伝ってくれということだと、すぐに理解をした。

ダンテが突然此処に来るのは10割がた依頼を手伝ってくれということだ。

「おいおい、そんな言い方は無いだろう?」

ダンテはピザを食べながらわざとらしく、胸に手を当て心が傷ついたような口調で言う。

これはネロをイラつかせた。

一々気にしていたら身が持たないことを、今までの経験上知っている為あえてスルーをした。

「オッサン、いいから早く用件を言え。」

「What? 用件? 一体何の事だ。」

「チッ」

わざとらしく白を切るダンテに、ネロのイラつきメーターが急上昇する。

「早く用件を言え!」

ネロはダンテの食べていたピザ(オリーブオイル抜き)を奪い取った。

「坊や、まだ食事中だったんだが。」

「食べたいんだったら、用件を言え。」

ダンテは両手を上に上げて、降参のポーズをした。

「分かったよ。まあ、坊やは分かってるだろう。」

ニヒルな笑みを浮かべた。

なんでもかんでもお見通しだと言わなければかりの言い方にムツとくるけど、我慢我慢・・・此処で切れていたら昔の俺と変わらねえ。落ち着け落ち着け、俺はもう昔の俺じゃねえんだ。

「何を手伝えば良い・・・何の悪魔を狩るのを手伝えば良いんだ?」

「ああ、今回許りは相当面倒な悪魔だ。俺一人でも問題ないが、此処は若い坊やにやってもらおうと思ったままでさ。」

「・・・もし、俺が断ったらどうするつもりだ。」

「そっとなったら、俺ひとりでやるだけだ。」

「それに坊や。」

「なんだよ。」

「此処の悪魔は弱いな。俺だと腕が鈍るぜ。」
この男。

ダンテの言葉一つ一つがネロの心理の核心を見事に付いていた。
ネロは何でもかんでもダンテに見透かされている事に対して、心の中
で舌打ちをした。

「ああ、分かったよ手伝ってやるよ。その前に、そこをドケおっさん。その椅子は俺のだぞ。それにコレ！」
ネロはデスクの上にある物を指差した。

「人のデスクを汚してんじゃねえ！！ 今すぐに捨ててこい！」
ネロの額には怒りマークが沢山出ていた。

「ちょっと待ってくれよ。後で、ストロベリーサンデーも来るんだぜ。それにさっき言っていた事とまったく話が違つぞ。」

「い・い・か・ら・捨ててこい！！」

全くコイツの相手をするのは悪魔よりも質が悪い。

「ハイハイ。」

ダンテは残りのピザを一気に平らげ、ジントニックも一気飲みをしてピザの容器をゴミ箱に捨てに行った。

ジントニックの入っていたジョッキは台所に持って行き水に付けた。

「はあ〜」

胃がキリキリする。

最近おっさんが来る度に胃がキリキリする。
ネロは手で腹を押さえながら、棚から胃薬を取り出して胃薬を飲んだ。

ネロが胃薬を買った原因がダンテだ。

元々は、胃薬なんてものは此処にはなかったが、ダンテがたまに来るようになって胃薬を買うようになった。

先月はダンテのせいでストレスが溜まりすぎて、胃潰瘍になってしまった。

その前は胃炎にもなった。

ネロは最近思うようになった「俺は神経質なのか？」と、思い悩み始めている。

ネロは先程までダンテが座っていた椅子に座った（手元にあったハンカチで拭いた）。

ネロは膝を机につけて、手のひらの上にアゴを乗せた。

「おい坊や、俺は害虫か何かなのか？」

「害虫。疫病神。髭。オッサン」
即答した。

「hu キツイな。ハハハハッ」

ダンテは全く意に介さず、笑い飛ばす。

「もういい。それで内容は。」

「それは、一ヶ月後俺の所に来な。その時に詳しい内容を話す。」

「お、おい！ ちょっと待て。今此处で話せ。」

「何言っているんだ坊や。それじゃあ全然面白くないだろう。」
当然とばかりに言う。

オッサン、アンタ全ての物事面白いか面白くないかで判断してるだろう。

「坊や、当然の事だろう。」

オッサン、何時読心術を習得したんだ。

「つい最近習得した。」

「だから、俺の心を読むな！！」

「ハッハッハッハッハー！ 無理だな。（坊や感情がすぐに顔に出るから、分かり安いんだよ。読心術なんて使えるわけ無いじゃないか。）」

その事をネロが知る事は生涯無かった。

「坊やそれでどうするんだ。」

「ちッ！ わーったよ。行ってやるよ。だがな、オッサンの出番は無いからな。」

ダンテに指を指しながら言う。

クソ！ 人をバカにしゃがって目にももの見せてやるからな。

「言うね。頼りにしてるぞ。k i d。」

ダンテはDEVIL MAY CRYまで行き方を書いた紙をネロの目の前に置いて、この場から立ち去った。これぞ、嵐のようによって来て嵐のように去って行く男……ダンテだ。

「やっと帰ったか……」

異様な程の静けさを感じる。

オッサンが来た後、いつもこんな感じだ。

「……はあー！！ こんな地図でどうやって行けっただ！！ あの野郎ふざけやがって、次あったらバスターの刑でぶっころしてやる。」

右手を握り締めてプルプル振るわせていた。

ダンテが描いた地図は、大雑把で幼稚園児が書いたような絵で、矢印で此処がDevil May Cryと書いてあるだけだった。当然と言えば当然だが、全く分らない。

後に届いたストロベリーサンデーの代金を払うことになったネロ。

「オッサン、覚悟しておけ！！」

こめかみには青筋が何本も立っていた。

今にも怒りを爆発して、周辺を破壊しそうだ。

「なあ、キリエ……俺はどうすれば良い？」

「ネロの好きなようにすれば良いのよ。」

キリエはその一言だけを言った。
オッサンが帰って1時間後位にキリエが帰ってきた。
もう夜だったので、すぐに夕食の準備に取り掛かった。
俺も一緒に手伝い、一緒に作った。
リビングのテーブルに料理を並べて、向かいあうように椅子に座った。

そして、ダンテが来た事と何の為に来たのかをキリエに言った。

「でも……」

「大丈夫。私も一緒に行くから心配しないで。」

「……えッ!?!」

ネロは耳を疑った。

今なんて言ったんだキリエは「一緒に行く」……はあぁー!!!

「キリエ! 一体どういうことだ!?!」

ネロは身を乗り出した。

「ネロ、そのままの意味よ。」

天使のような笑顔で答えた。

「ネロ、私は前にも言ったわよね。私は常にネロの傍にいて支えるって、ネロの傍に居るって言ったわよね。」

「キリエ……」

「でもね、やっぱり一番は……ネロ貴方と一緒にいたいからよ。」
キリエはあれ以来変わった。

俺と恋人となり、お人好し、自分の身を顧みず人を守ろうとするの

は変わっていないが・・・俺と二人だけの時は、こつこつ事を言うようになったし、甘えるようになった。

スゴク嬉しいんだが、イキナリこつこついうセリフを笑顔で真顔言ってくるから、キリエの顔を直視できない。

絶対に今の俺の顔は真っ赤だ。

「ふふふふふふ」

「わ、笑うな！」

「可愛い。」

「可愛い言うな！」

声を荒らげて言う。

それでも、キリエは手を口に当てて笑っている。

ああ、隠れるところがあったら隠りたい。

それから、夕食も終わり寝室に入り就寝した。

ネロとキリエは流石に一緒に寝ているというわけでは無いが・・・稀に、キリエが「一緒に寝よ」と誘ってくる。

その度にネロは顔を真っ赤にさせていた。

翌日からダンテの所に行く準備を始めた。

実際ダンテの所に行くのは初めてだ・・・その為、俺はダンテが住んでる所を調べ上げた。

クソ！ 何で俺がこんな事をしなくちゃいけないんだ。

髭がわっかりにくい地図を書くからこつこつなるんだ。

ネロはいつもより一段とイライラしていた

それから、日にちが経ちネロとキリエはキャリーバックを持ってフ
ォルトウナを出た。

出て行くまでに沢山の人に見送られた。

中には殺気籠もった視線があつたが、気にしていられないな。

ネロはキリエが一体どれ程の人達から慕われているのかを目の当た
りにした日でもあつた。

act 2 meet again へ再開

(後書き)

コレが、ネロ達がダンテの所に来るまでの話ですね。
後、キリエの性格が大分変わっています。

ぶっちゃけまくるんで、出すキャラ全キャラ崩壊させる予定です。

次回も楽しみにしてください！

act3 Let's party now(前書き)

どうも久しぶりの更新です。

こちらの小説は基本的に月1更新なので、遅いです。

この話を書いているときにダンテの口調が・・・バサラの伊達政宗っぽい感じになってしまいました。

なんか被ってしまうんですよねダンテと伊達政宗が、何か似ているような感じがするんですよ。

それでそう感じてしまっています。

なのは達の登場はact4かact5に出てきます。

それでは楽しんでください。

act 3 Let's party now

ネロ達がダンテの事務所を掃除している間、ダンテは久し振りの依頼に出ていた。

ネロに手伝って貰う依頼とは全くでつの依頼だ“合言葉”ありの依頼でだ。

「ハッハ!! it's イカセ crazy!!」

ダンテは目の前に居る“敵”をリベリオンで刺し壊した。

「マジで、ロボットなんて物が存在してんだな!」
髭を蓄えたオッサンが無邪気な顔で笑っている。

ロボットの容姿はネロが戦った卵型ロボットと全く同じ容姿をしていた。

ロボット達は大勢でダンテを囲んでダンテに向かってビームを放つ。それを華麗なステップで、まるでダンスを踊るように避ける。

「hahaha hahaha!! モテル男は辛いな。こんな大勢のロボットからダンスの申し込みをされるなんてな。」

ダンテは上空に舞い上がり、ロボット達にエボニー&アイボリーの銃口を向けた。

「熱いキスを受け取りな!!」
引き金を引いた。

スコールのように降る弾丸は唸りを上げて、ロボット達を貫く。

「レインストーム」という技で、上空に上がりエボニー&アイボリーを真下に居る的に標準を定めて、回転しながら鉛玉をぶっぱなす

！ そんな業である。

スタツとダンテは地面に着地した。

「partyはまだ始まったばかりだぜ！ そんな簡単に終わるなよ。」

「Com、n winp!!（かかってこいよ！ ノロマ野郎!!）」
「楽しんでダンテは言う。」

ダンテは双銃を手の平で回転させた後、いつもの決めポーズで構えた。

「さあ、派手に行くぜ!!」

構えた双銃をホルスターに仕舞い、背負っていたギターケースから「反逆の剣リベリオン」を取り出し、掴み駆け出した。

「イイイイイイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
地面を滑るようにして駆け、スピードと体重、そして力任せの三拍子が揃った強烈すぎる突きをした。

「スティングー」という技で、ダンテが最もよく使うであろう技の一つだ。

ロボットは何も出来ず貫けれ大破した。

引き抜く時、ダンテは無駄に力を入れて、その勢いを殺さずに真後ろに居るロボットに向けてリベリオンをぶん投げた。

リベリオンは真っ直ぐ突き進み、ロボット達を貫き続ける。

ズゴーン!! 壁に直撃してやっと止まったが、直撃した分厚い壁には、ガラガラガラガラガラガラガラガラと音を立てて崩れさった。

「ソード・スピア」と言う技でリベリオンを的に向けて投擲する。投擲されたリベリオンは一筋の矢になり敵を貫く。その間ダンテの手元にはリベリオンは無いわけで、取りにいかないといけない。

「hu 誰が俺と一緒にdanceしたいんだ？」

困んで来たロボットにそう一言。

ダンテのその一言を聞いた後直ぐに、攻撃をし始めた。踊るようにして避ける。

当たるところか、掠りもしない。

「came back!! (戻って来い!!)」

壁に突き刺さっていたリベリオンが、突然中に浮き高速回転をしながらダンテの手元に帰ってきた。

その時、ロボットを何体は破壊してして戻ってきた。

「ha-ha!!」

目の前に居るロボットを叩き切る。

叩き切られたロボットの断面は、切れるという表現より捻り切られたという表現が一番近い。

「partyを終わらせるのは、まだ早いぜ!!」

「イヤッハー!!」

ダンテの猛攻は止まらない。

ロボットの残骸がドンドン積み立てられていく。

それでもロボットの数は一向に減る気配を見せない。

ロボットの数は減りもしないが、増えもし無いという均衡状態を保っていた。

「too easy (楽勝すぎる)」
最初はロボットと戦えるという事でテンションが異常なまでにhighになって居たダンテだったが、時間が経つにつれて飽きてきたというか、あまりにも雑魚すぎる。
ダンテにとって役者不足だった。

「get tired (もう飽きたぜ)」
一番最初の時は大違いのテンションで呟いた。
その雰囲気から分かる通り、明らかにダンテは失念していた。

「……!!? ha-ha! いねえ、そんな大玉も居たのかよ。」
飽きてきたその時に、もっとデカイロボットが10体位現れた。
機嫌がよくなった。

「イヤッハー……!!」
ダンテは雑魚に目もくれず、その大玉に向かって駆けた。

大型ロボットはアームで反撃を始めた。

「そんな鈍重な攻撃は、無いな。」
駆けながら、全ての攻撃を避ける。

「昇天しな!」

斬! 真つ二つに切り裂いた。
その後直ぐにエボニー&アイボリーを構え、

「good luck!!」
立ち塞がる3体の大型ロボットに向かって、弾丸が放たれた。

弾丸はロボットの装甲を貫通させて風穴を開けた。
貫通場所からバチバチと電気が放電し、ダンテは其処に向けて魔力を帯びた弾丸を一発、

「bang!」

御見舞いしてやった。ズガンー!! 強烈な爆発が起きた。

爆発の破片が辺りには居るロボットに襲いかかる。
勿論ダンテにも襲いかかってくるが、全く避けようとしなない。

土煙が舞い上がりハッキリと物は見えない。
しかし、一つの人影だけは目視出来る。

その人影は手で煙を払いながら歩いていた。

「hu good fireworks!! (良い花火だ!!)」

「まあ、ちよいと煙いな。」

ダンテは双銃をホルスターに仕舞い、帰路に立った。

「最後のメインディッシュは、まだ召上がってなかったな!!」
ダンテは後ろを振り向いて銃を構えた。

「bingo!」

引き金を引いた。

ダンテの真後ろに迫っていた大型ロボットは一発の鉛玉に貫かれた。

「楽しいpartyだったぜ。」

ズガンー!! ダンテの後ろで爆発が起こり真紅のコートが爆風で

いつの間にか囲んでいた悪魔に向けて鋭い視線を放ちそう言った。

悪魔達はダンテの言葉を聞いて身体をビクツ！と震わせた。悪魔達はダンテに対して“恐怖”という概念を抱いてしまった。本当なら悪魔が人間に“恐怖”を植え付ける存在である悪魔が、逆に“恐怖”という感情を抱いてしまった。

ダンテを囲んでいる悪魔は一言で言えば、超大型の人の姿をしたトカゲだ。

只一つ異様に目立つものがあつた・・・それは、象の用に巨大で日本刀のように鋭い二本の牙があり、足は馬の樋爪で、腕はゴリラ以上に太く指は三本しかない。

「いつまで待たせるきだ。com、n baby」
挑発気味に言うが全くかかって来ない。

「おいおい！俺の言っている事わかるか？do you understand?（理解したか悪魔共？）」

『ガ・・・ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』
数体の悪魔が叫びながらダンテに突撃をする。

端から見ると、ダンテに恐怖した悪魔が狂って我武者羅にダンテに向かっているようにしか見えない。

悪魔のやっている行為は自殺行為でしかない。

「やっと来たか・・・さあ、2回目のparty time!!」

「Let's Rock!!」

悪魔の凶刃の牙がダンテの腹部を狙う。

双銃を構えたダンテは牙の先端目掛けて弾丸を放つ。

弾丸は牙を砕き、顔ごと貫通した。

『ガ……アガ……』
顔の上半分が爆ぜた。

「おうおう！　すげえな。顔面が消し飛んだのに生きてやがる。
更にダンテを驚愕させる事が起きた。」

『ガ……ガアアアアアアア！！』
爆ぜた顔の上半分が再生を始めた。

「ヒュ〜　crazy」
手を叩きながら口笛を吹いた。

ダンテの顔には今日最高の笑みが浮かんでいた。
良いねえ！　再生能力を持つ悪魔を狩るのは何時振りだ？　まあそ
んな事はどうでもいい。

瞬間！　双銃から怒涛の鉛玉が発射された。
鉛玉は悪魔の唇と強烈なキスを繰り広げた。

「どうだい俺のキスは？　最高だろう？」
返事は帰ってくることは無く、そのまま塵に還った。

「俺のキスの相手には務まらないな。」
お手上げのようなポーズを取った。

「ほら他の奴等も来いよ。俺のキスの相手になってくれよ？」
完全に遊び口調のダンテに悪魔達は先程の恐怖は消え去り、怒り心
頭していた。

『……』

「ゴ・・・何が言いたいんだ？」

『ゴバアアアアアアアアアア！！』

口から火炎玉を吐き出した。

ドカーン！！ 避ける動作を見せなかったダンテは火炎玉が直撃した。

その悪魔に続くように他の悪魔達も火炎玉を吐き出した。全てが直撃した。

『オワツタナ・・・サアスパイダノ、チヲノムゾ』

辺りには焦げ臭い臭いが充満していたし、煙立ち込めていた為、ダンテの安否は確認できないが、確実に殺つただろうという確信は悪魔達にはあった。

『オオオオオオオオオオ！！』

腕を振り上げる悪魔達。

悪魔達の間では、スパイダの血族の血を飲んで体内に摂取すればスパイダを同じ力、魔力を得られる言われている。

その為、人間を捕食するためではなく、只スパイダの血を得るためにダンテを狙う事が多々ある。

それも月に一回から二回程度だが、たまに月に二十回つていう時もあった。

悪魔達はダンテに向かって一歩ずつ近づいて行く。

ビュンツ！！ 瞬間、銀色の何かが一体の悪魔を貫いた。

銀色の何かが、地面に突き刺さった。

ダンテの愛剣リベリオンだった。

「いい熱加減だが、俺を熱くさせるには足りないな。」
ニヒルな顔を浮かべているダンテが其処に立っていた。

「こっから先は、完全なR指定だ！」

ダンテが「come back!」と叫んでリベリオンが高速回転をしながら手元に戻ってきた。

その際身体を貫いた悪魔の首を切り落とした。

掴んだりリベリオンを真上に放り投げたダンテはエボニー&アイボリーを構え、一発の弾丸を上空に放った。

それが合図となり悪魔達は飛び掛るようにしてダンテを狙う。

しかし、ダンテは演舞をするか如く鉛玉を発射させる。

鉛玉は眉間のご真ん中をぶち抜き悪魔一体一体の頭がザクロみたいに爆ぜる。

全弾眉間のご真ん中に命中していく。

それだけでは止まらないのがダンテだ。

更に身体を蜂の巣に変えてしまっていた。

血の海と化していた。

辺りは異臭と血の臭いしか無く、他にあるといえば悪魔の死体だけだった。

一体もダンテの身体に触れることなくザクロになり、蜂の巣状態になっていた。

流石の悪魔も再生能力が追いつかず塵となって還っていった。

『ア・・・アアアアアアア』

だが、一体の悪魔だけ逃していた。

その悪魔は丁度ダンテの真後ろにある大木の陰に隠れていた。

『ニ・・・ニゲルゾ!』

斬！

『ア・・・アガ・・・』

上空に放り投げたハズのリベリオンが悪魔の脳天から貫いて串刺し状態になっていた。

「com、n」

斬！ その場で高速回転を始めたリベリオンは串刺しにした悪魔を真つ二つに切り裂いて、ダンテの下に帰っていった。

「今日は何かが起こるな。」

空を見ながら確信めいたように呟いた。

ダンテの目の先には夜でもないのに、赤く血のような真つ赤な月が出ていた。

ニヒルな笑みを浮かべて、

「こりゃあ・・・坊やにバスターの刑でもされるかな。」

「あれ結構痛いんだよな」そう呟いて、Devil May Cryに帰って行った。

しかしダンテはある事に気づかなかった。

ダンテの後ろを追う様にして、赤い宝石が追っている事に。

act 3 Let's party now (後書き)

やっぱり戦闘シーンは苦手です。

特にダンテの戦い方を表現するのは難しいです。

スタイリッシュに出来ません。

今の僕の技量では出来ませんでした。

今回の戦闘でダンテの悪い癖が発生しましたね。

ワザと敵の攻撃をくらうという悪い癖が。

ダンテは刺激を求めすぎてしまい、稀に敵の攻撃をくらうという行為に出るのです。

その理由が「刺激の無い人生なんてつまらないだろう」という事です。

次話を楽しみにしてください。

何か、キャラが崩壊して来ています……特にネ口辺りが……
・
ドンドンキャラが崩壊していきます……話が進むにつれて……
・確実にぶっこわれます。

この先、こんなネ口じゃない！ ダンテじゃない！ て言う人も
出てくると思います。
ご了承ください。

当然りりなの組もぶっこわします(笑)

今回の話で、ダンテクオリティが発動します。

それでは、始まりです。

「坊や、今帰った。死にさせ、腐れ髭!!」
ダンテは“ Devil May Cry ”の扉を開けて、一声目にそんな事を言った瞬間、ネロのデビルブリンガーにスナッチされて・
・その場でバスターで床に叩き伏せられた。
当然床は粉碎した。掃除した意味が全くない。

キリエは掃除が終わり夕食の買出しに出ていた為にこの場面にはいなかった。

ネロ「ふんツ！」と鼻を鳴らして、テレビの前にあるソファーに座り、そのソファーの前にあるテーブルに飲み物をとって一気に飲み干した。
テーブルに置いてあったリモコンを手にとって、チャンネルを廻した。

「坊や、バスターだけじゃ芸がないぞ？」
いつの間にか復活したダンテがネロの後ろにたって、肩に手を置いた。

「ああん！ ならデビルトリガーを発動した時のバスターが良かったか。オツサン。」
怒りの形相のネロに対してダンテは、

「 h u ~ 怖い怖い、そればかりは遠慮させてもらおうか。」

「 チツ！」

舌打ちをした後、直ぐに視線をテレビに移してニュースでも見始めた。

オッサンは無言で俺の隣に座った。

勝手に俺の隣に座るな！ と言いた気な視線をダンテに送った。ダンテはその視線に気づいていたが、スルーした。

「オッサン。今回手伝って欲しい依頼って何だ？」

「ああ、その事は・・・後で話すわ。」

「はッ！？」

身体を乗り出した。

オッサン何言っただ？ 人に手伝ってくれって言うておいて・・・はあく仕方ねえか、コレがダンテだからな。

慣れてきているネロは中半諦めていた。

たまに慣れて始めている自分に怖いと感じる時も多々ある。

「後で絶対に説明しろよ、でないよ。」

右手の人差し指でダンテを刺し、迫力のある声色だった。

「分かってる。あれは老体にはキツイからな。」

次はデビルトリガーを発動したときのバスターの刑になるからな、あれはあれで結構痛いからな。

ネロのデビルトリガー発動状態のバスターを喰らっても、痛いだけですむダンテの方は異常だと思っけどな、と思っけたりしているネロだった。

「はッ！ 何が老体だ！ 俺が本気で殺っても軽くあしらう程の実

力があるくせに。」

「これは事実だ！ ダンテとは今まで何回も戦った事がある。あの事件以来も何回かマジの戦闘をやった。

なのにオッサンには全く歯が立たなかった。

こっちはデビルトリガーまで発動しているのに、あっちはデビルトリガーを一度も発動させずに勝ってしまう。」

何時になったらこのオッサンをマジで、ブッコロできるか分からない。さり気なくダンテに対して殺害をしようと考えているネロだった。

それから時間が経ち、ダンテは読んでいたアダルト雑誌を後ろに投げた。

此処でダンテの無駄な能力、いわゆるダンテクオリティが発動した。アダルト雑誌は放物線を描きながら、ダンテのデスクに置いてある電話のすぐ隣に着地した。しかも、先程ダンテが読んでいたページを開いたままだ。

これぞダンテクオリティ、全く以て無駄な能力の使い道。

ダンテクオリティはまだまだ沢山ある。

ダンテは立ち上がり、デスクの椅子に座りデスクの上に足を置いた。そして、ダンテクオリティが発動した。ドンッ！ 足の踵でデスクの上を叩いた衝撃で、アダルト雑誌が空に舞い、ダンテの手元に落ちた。

見事キャッチし、先程読んでいたページのまま手元に来たのでそのまま続きを見始めた。

ダンテクオリティ……まさに最強の無駄な能力。

これを見ていたネロは、

（なんていう無駄な力の使い道なんだ。）

ダンテクオリティを見る度にいつもそう感じているネロは、その能力をもっと他の事で有効に活用してほしいとも思っていた。例えば、掃除やら掃除やら掃除やら掃除やら……って！掃除しかないじゃないか！！

「坊や、コーヒー入れてくれないか？」

ダンテはアダルト雑誌を読みながら言ってきた。

いきなり何を言い出すんだこのオッサンは！？ 普通逆だろう。

「はッ！ 何言っただオッサン。コッチが客なんだから、普通は俺に出すもんだろう。」

「じゃあ、頼むぞ。」

「お、おい！ 髭！ 人の話を聞け。」

返事は全く帰って来ない。

そんなネロの言葉に菊耳持たずで、ずっと視線をアダルト雑誌の方に行っている。

「チッ！」と舌打ちをしながらソファから立ち上がり、キッチンまで行った。

「ミルクは？」

「多めで。」

「砂糖は？」

「多めで。」

「分かった。」

ネロは律儀にもダンテに聞いた。

自分用とダンテ用二つのコーヒーを入れてきた。

「ほらよ。」

「Thank you」

ダンテはコーヒーを飲みながらアダルト雑誌を読む。

「坊や。」

「何だオツサン。」

「良い甘さだ。」

「そうかい。」

ネロは何も無かった用な表情をしているが、内心では驚愕していた。おいおい、あんなに砂糖とミルクを入れたんだぞ！ それを良い甘みって……どんな舌をしてんだ。俺なら絶対に飲めねえ。ネロはコーヒーを入れるとき相当な量の砂糖とミルクを入れた。比率で表すと、角砂糖が7、ミルクが3、と相当な甘く作った。有り得ねえ。

ポーカーフェイスのネロだが、内心はこんな感じになっていた。

「坊や……まだ甘くしてくれても良かったぞ。」

ダンテの爆弾発言にネロは目を丸くした。

「What?」

な・に・を言っているんだこのオツサンは？ まだ甘くても良いだと！！ マジで冗談じゃねえ。

「hahaha hahaha!」
俺が素頓狂な声を上げたら爆笑こきやがった。顔をぶん殴ってやる
うか！ 次第にネロの怒りパラメータが上昇してきた。現時点では
50%ぐらいまで上昇した。

ネロはまた舌打ちをして、視線をテレビに向けた。
ズズズズズズズつとコーヒーを飲みながら、単価・輸入・輸出・
経済状況のニュースを見ていた。

突然画面が変わった。ニュースを報道する所と変わらないが、キャ
スターの顔が青い。

「?」
二人して、頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。

緊急速報です。只今、市にある 港で惨殺事件が
起こりました。

ネロとダンテはキャスターの言葉を聞いて、ニュースに食らいつい
た。
ダンテはアダルト雑誌を放り投げ、コーヒーを一気に飲み干し、ネ
ロも同じようにコーヒーを飲み干し食い入るようにテレビに視線を
向けている。

現場の映像が流れた。
もうそれは映していい映像ではなかった。
何十人者の人間の男女の死骸があった。どれもこれも惨殺されてい
る。

こんな映像流していいのか？ ヤバイだろこんな映像を流すなんて。
ネロはそんな風に思っていた。

全ての死骸は五体満足なものは一人もいない。

一人は片腕が無く、首は皮一枚で繋がって居る死体、一人は腹がパツクリと裂けていてまるで食い荒らされたような様子が見て取れる。一人は、身体を真つ二つに切断されているもの、一人は顔を食いちぎられたのであるう、顔面というものが存在していなく砕けた骨と豆腐のようにグチャグチャになっている脳があるだけの死体だったり、何よりも一番酷いのが……女性の死体だった。その中でも特にヤバイのがこの死体だった。

四肢すべてあるのだが、全体的に食い荒らされていた。

用は骨に少し肉の破片が付いているだけで、顔面は頭の皮膚と髪の毛が少し残っているぐらいだった。

内蔵も脳も目も舌も耳も乳房も無い、そんな残酷な死体だった。

悪魔は男よりも女を好む、その理由が体が男よりも柔らかく食べやすいことと、良い悲鳴で泣いてくれるそうだからだって、古文に書いてあった。後者の方はあまり関係ないと思うが、前者は殆ど当たっているらしい、実際悪魔に殺された人間の中で一番殺されているのが女性だ。

「おい、オツサン。これ。」

「ああ、悪魔だ。しかもこんな真昼間から活動をする悪魔は珍しいな。」

ダンテは腕を組んで考え事を始めた。

昼間に活動をする悪魔はいない事は無いが、此処まで真昼間で派手に活動する悪魔は……あの事件以来だな。

こりゃあ、何かあるな。

ダンテはそう確信した。

「坊や、手伝って貰う依頼の前に新しい依頼が出来たな。」

「ああ、ちゃんと依頼金も増やせよ。」

「それは、坊やの働き次第だな。hahaha hahaha」
ソファーから立ち上がったダンテは、笑いながら何時もの指定席に座って、読みかけだったアダルト雑誌の続きを読み始めた。
足をデスクに乗せてだ。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリ！　電話が鳴り響いた。

ドンッ！　デスクに載せている足で、デスクを叩いた。

受話器は宙に上がり、放物線を描きながら、ダンテの手元に落ちてきた。それを見事キャッチした。

「もしもし、こちらDevil May Cry。」
ダンテはそう言って

相手側の話を聞いている。

「OK！」

それだけを言って、受話器を切った。

「オッサン・・・“合言葉”有りの依頼なのか？」

「そうだ。坊やも来るだろう？」

何当たり前前の事を聞く、当然。

「行くに決まっているだろ。」

ネ口は気合を入れて立ち上がった。

「坊や気合を入れるのはいいけど、空回りするなよ。」

「言ってる！ 言っておくがアンタには負けねからな！」

「俺と勝負か？ なら、どっちが多く倒すかで勝負だな。」
ダンテとネロの間に火花が飛び散る。

「Let's Rock!!!」
ダンテを先頭に、扉を蹴り開けた。その威力のあまり扉は物故割れた。

「修理費は、坊やの口座か「Die!!!」r!!!」
その場でバスターを喰らうダンテ。
すぐにムクつと、何事も無かったように立ち上がる。

「坊や、バスターだけじゃあ、芸が無いだろう？ 新しいツッコミ方法を覚えたらどうだ？」

「これでも喰らうか？ ああん」
ブルーローズをダンテの眉間に押し付けた。

「坊や・・・」

「なんだ、髭。」

「カルシウム取った方「誰のせいでこんなに切れていると思ってんだ!!」hahahaha」

「はあ」

深いため息をついたネロに、疲れが見える。
ダンテはそんなネロを無視して、車に乗り込んだ。

「坊や、置いていくぞ。それとも走っていくか？」

「ま、待てよ。オッサン。」

発進させた車に、見事飛び乗ることに成功したネロ。アクションスター顔負けのアクションだった。

「オッサン、どういうつもりだ？」

「坊や、今此処で何かすると事故るぞ。」

「チツ！」

舌打ちをしたネロは、腕を組んで目的地に着くまでそうしていた。

「そっぴや、オッサン。どんな依頼なんだ？」

「ああ、さっきニュースでの港で働く従業員の生き残りからだった。」

「そっか。」

なんとなく検討はついたネロは、それ以上は聞かなかった。

「だが、一体何処に出るかわかっているのか？」

「全く。」

「分からのんかい！！」

「コンマ一秒でツッコミをするネロ。」

「drive感覚で行こうや。」

「…………泣けてくるぜ。」
事の事実には頭を抱えるネロは、テンションが落ち気味になっていた。
怒る気力も失せて、怒りパラメータも0になった。

drive感覚で走る事10分が経った。
車内でネロはグッタリしていた。10分間ずっとダンテの相手をしていて、精神的に限界が来てしまった。

「……………!? おい、オツサン！」
グッタリしていたネロの目付きが変わった。

「やっと、お出ましか。」
ダンテはドリフトを決めて、車を止めた。クルマから降りた。

場所は何もない荒野に来ていた。

ダンテたちを囲むようにしてドンドン悪魔が現れてくる。

中には上級悪魔の存在も居た。ダンテのテンションはウナギ登り…

ダンテとネロは背中を合わせるようにして立っている。

「坊や。セリフ覚えているか？」

「覚えているが……」

「ふッ!」「」

不敵に笑う二人。

「「「Com'n Winp!!」(かかってい、い、ノロム野郎!!)」

引き金を引いた。

前回の話でもあったんですが、オリジナル悪魔を結構出す予定です。現段階では一体ほど出てきましたが、最低でも10体位は行くと思います。

オリジナル業も当然出す予定であります。

後、ネロはダンテに対して基本、オッサンか髭で呼びます。まれにダンテって呼びます。

ダンテの方は、ネロの事を坊やって呼びます。稀にネロと名前で呼びます。

それでは、次会を楽しみにしててください!!

そうとう更新が遅れてすいません。

もしかしたら題名でわかる人は分かるかもしれませんが、あの人物が出てきます。

あの騎士が出てきます。

今回は戦闘が中心なんですけど、上手く書けた自信が全くありません！
戦闘シーンは大好きなんですけど、難しいです。

なのは組のキャラは一応出てきます。

一部ですが。

それでは、始まりです。

act 5 darkness a knight 《暗黒騎士》

「ha-ha!」

弾丸が悪魔の眉間をぶち抜き、ぶち抜いた弾丸はそのまま突き進み悪魔の後頭部の骨を粉碎し脳漿をそこら辺にはらまく。お気に入りのコトがダメになっちまったな・・・クリーニング代は坊やにたかるか。そんな事をネロが知ったらダンテは、バスターの刑は確実であるろう。

他の悪魔は仲間が殺られるのに気づいた時には、もう自分の眉間に弾丸がぶち抜かれ絶命していた。

全てが一瞬の出来事として終わっていく。

悪魔達は抵抗をみせるが、

「そんなんじゃ、ダンスの相手にも務まらないぜ。」

そのセリフをすべて聞く前に、首と胴体が永遠の別れを告げていた。ダンテとネロの猛攻は、悪魔達に瞬きの隙も与えない。もし、瞬きをした瞬間にはもう自分は絶命してしまう映像がハッキリと見えていた。

それどころか、自分たちの死ぬ映像しか流れなかった。

殺されていく仲間に悲しみの咆哮を上げるは出来ず、上げたとしても咆哮した瞬間にはもう狩られている。

悪魔にとって目の前の光景は“悪夢”としか言いようがない。

人間を“恐怖”に陥れる存在が、“恐怖”の淵に叩きこまれていた。

「Too easy (楽勝すぎる)」

ネロは首を左右に振りながら、一刀両断する。ブルンッ！バイクのエンジン音を響かせてイクシードを発生させる。もっとタフガイはいないのか！

デビルブリンガーで悪魔の頭をを掴み、引き寄せる。

「Go down! (落ちろ!)」
地面に叩きつける。顔は潰れ、血が服に飛び散るが全く気にも止めない。

ダンテとネロの服には返り血を浴びすぎて、全身真っ赤で血の匂いしかない。
更にネロは地面を滑るようにして突き進み、イクシードを解放させてレッドクイーンで薙ぎ払った。刀身からは熱が発せられて熱を生み出した。それにより威力・破壊力と共に攻撃範囲も増し、周りに居た悪魔達も巻き込んだ。

「Blast off! (吹っ飛べ!)」
ダンテは《リベリオン》で悪魔を切り上げて中に浮かす。

悪魔は宙に浮いた時点で事切れていたが、ダンテはお構い無しに……

「chew on this!! (こいつを喰らいな!!)」
切り上げた悪魔に向けて、エボニー&アイボリーの銃口を向けて、引き金を引いた。

悪魔は一瞬にして蜂の巣状態になった。ダンテの正確無比の弾丸は目、鼻の穴、口、眉間、喉、など細かい部分を見事ぶち抜いていた。地面に着く時には、原型をなくしていた。1秒間に軽く10発以上放ち、しかも正確無比なコントロールは悪魔のような銃の腕前だ。

「Bingo!!」
ネロはチャージショット3を悪魔の胴体に向けて放つ。
悪魔は防御しようとして両腕をクロスさせたが、ブルーローズは2発の弾丸を殆ど同時に発射される。1発目の弾丸は相手の装甲を破壊するための弾丸、徹甲弾が使用されており更に、魔力を込めたチャージ

ジシヨットでもある。
その為防御した両腕は、

『ぐがああああああああああああ！』

跡形も無く消し飛んだ。其処に追い打ちをかけるように2発目の弾丸が、目前に来ていた。

避けることもできず直撃を貰い、放物線を描くようにして真後ろに吹っ飛んだ。

丁度良く悪魔が群がっている所に落ちた。

「Break!!」

セリフと共に吹き飛んだ悪魔は、大爆発を起こした。

それにより、周りに居た悪魔も巻き込み、一気に10体以上の悪魔が大爆発により消し飛んだ。

中には運良く助かった悪魔もいるが、下半身が消し飛んでいる者、半身が消し飛んでいる者様々だった。

「今ので死ななかつたのは運が無かつたな。」

ネロはブルーローズを額に押し付け、引き金を引いた。悪魔の頭は、トマトの中に爆弾を入れてそれが爆発して飛び散ったような感じで、頭が飛び散った。

ネロの頭上に悪魔の血の雨が降る。

「汚ねえ、雨だな。」

吐き捨てるように言う。

「H u i t、s c r a z y」

拍手をしながら自賛を送るダンテ。端からみたら、ふざけて送っているようにしか見えない。

そんな隙だらけダントを狙って、ヘル・バンガードの凶刃の鎌が振り下ろされる。

「ふあゝ」

欠伸をしながら、鎌の刃の部分を掴んだ。

「温いな。」

刃がパキンッ！ と音を立てて折れた。それを掴み、ヘル・バンガードの顔面に突き立てた。

それでも死なない。

「意外と、タフだな。」

ニヒルな笑顔を浮かべた次の瞬間には、ヘル・バンガードは真つ二つに一刀両断されていた。ヘル・バンガードは太刀筋が全く見えなく、何時リベリオンを抜いたのかも知らずに殺られた……痛みもなく、

砂となって跡形も無く消え去った。

「Break down!! (砕ける!!)」

スナッチで一体の悪魔を掴み引き寄せ、地面に叩き潰した。まるでヒキガエルのように潰れる。

「Still!! (まだまだ!!)」

他の悪魔もスナッチで引き寄せて、

「Cut off!! (斬る!!)」

レッドクインで斬り上げた。

「Bye - Bye」

ブルーローズの二つの銃口から弾丸が発射された。二つの弾丸は悪魔の顔面を捉え、悪魔は無残に散った。手の中でブルーローズを回転させて、ホルスターに収めた。

「オッサン、悪いがこの勝負は俺がもらうぜ！」

ネロは悪魔をなぎ倒しながら、悪魔の絶叫が響く中ダンテに聞こえる声量で発した。

「坊や、勝負を決めるのはまだ速いぞ。」

「トリック!!！」

スタイルチェンジをした。その隙を狙って悪魔はダンテを一瞬にして囲み、鎌を振り下ろした。

「ふっ」

不敵な笑みを魅せた。

鎌は空を切った。悪魔はダンテを完全に見失い辺りを見回す。

ダンテは悪魔たちの後方に現れた。

「ソード!!！」

ダンテはリベリオンを逆手に持ち替え、腰を落とした。リベリオンの刀身が紅く染まっていき、刀身周辺に赤い雷をバチツバチツ!!と発生させている。

「Ha - Ha!! Drive!! (ハッハ!! 突っ走れ!!)」
振り抜いた。真紅に染まった斬撃が悪魔を切り裂く。

「One! Two! (もう一発! いや二発だ!)」
更にもう二つの斬撃が悪魔達を切り裂く。軽く20体は一気にくたばった。

その内の一発が……

「うおッ!! 危ねえ!!」

ネロの横スレスレを通過した。

一步でも横に移動していたら、真っ二つになっていた。

「ゴラ!! 髭! 危ねえだろ。俺を殺す気か!!」

ネロは怒り心頭。

あの髭! 何『ケタケタ』腹を抱えて笑ってやがる!! 怒り心頭のネロは無意識にダンテに向かってブルーローズをぶっ放していた。

「おっと、坊や過激なキスは嫌いじゃないぜ。」

ウインクを決めるダンテ。弾丸はダンテの前髪に何本か触れたただけだった。

その際ダンテは微動だにしなかった。

坊やもやるようになったな。

それにしても……無駄に多いな、こんなに悪魔が多く出現するなんて、しかも雑魚ばかりだ。どういう了見だ。魔帝さんよお

ダウンッ! と誰もいない空に向かって一発の弾丸を発射した。

弾丸は空を突き抜けて行き、何かと衝突した。

パラパラと何かの破片が落ちてきた。

「奇襲をするんだったら、もっと上手くやりな。ベイビーちゃん。」
仮面が粉碎された悪魔が落下して、ダンテのすぐ傍に落下した。

れだけなのに、悪魔達に絶対的な恐怖を植えつけていく。絶対に勝つ事ができない。あんな化け物に敵う筈が無い。怖い。怖い。勝てない。死ぬ。戦えば死ぬ。恐怖。という感情が悪魔達の中で何度も何度も駆け巡っていく。

それでも悪魔達はダンテとネロに襲いかかる……負けることを分かっけていても。

自分自身に鼓舞をするように咆哮を上げて襲いかかる。そんな事をして、ダンテとネロに傷一つ着ける事も出来ない。

「一体また一体と悪魔は無残に死んでいく。」

敵う筈が無いと分かっけていても、戦う……只、魔帝の為に……そして、伝説の魔剣士スパーダの力を得るために挑み散ってゆく。

また一体また一体と積み重なる悪魔の屍を悪魔達は越えて行き、また屍と化す。

悪魔達は死んでいった悪魔達の無念を晴らす事は不可能に近い。

「挑んでくるのは良いが、そろそろ終わりに近づいてきたぜ。坊や。」

「まあ、フィニッシュを決めるのは俺だがな。」

「今回の主役は坊やには譲らない、主役は俺だ。」
ダンテとネロは目の前に広がる悪魔達を撃って撃って撃ちまくり、斬って斬って斬りまくった。

二人合わせて軽く100体以上の悪魔を狩っているが、未だに目の前を覆うほどの悪魔の軍勢がいる。

「——おいおい、魔界の門が開いたのか。そんなはずはない。地獄門と人口の地獄門はあの時に全部破壊し尽くした。」

まだ、ムンドウスの力は復活してないはずだ……楽しくなりそう
うだ。

そんな事を考えていたダンテは自然に無邪気な笑みを浮かべていた。髭面のオッサンが無邪気な笑みを浮かべているのだ、それを見たネロは気分を悪くした。

「オッサン！ キモイ笑みをするな！！」

「酷いな。オジサン傷つくな。」

ダンテはワザとらしく、心が傷んだように両手を胸に当てた。

ビキビキ！ ネロの額には青筋が浮かびあがっている。

あゝもうクソ！ オッサンの行動は日々感に触る。

「坊やそろそろ、飽きてきたな。」

つまらなそうに呟く。

「ああ」

頷くネロ。

流石に嫌になってきていた二人だった。

かかって来る悪魔が弱過ぎて全く話にならない。

子の二人を止めたいのであれば、ベオウルフやベリアルやファントムといった上級悪魔の中でも飛び抜けた強さを持つ上級悪魔じゃないと相手にならないだろうが、それでもダンテとネロの二人の猛攻を止める頃は出来ないだろう。

一人は魔帝ムンドウスを封印した史上最強のデビルハンターと、自称神（偽神）と名乗った皇帝を倒した若きデビルハンターの二人がこの場に揃っているのだ。

幾ら飛び抜けて強い上級悪魔が来ようが、敵うはずもない。

突然ダンテはリベリオンを納刀し、エボニー&アイボリーをガンホルスターに収めた。

「坊や、後は頼むわ。オジサン疲れた。勝負は坊やの勝ちで良いぞ。」

ダンテは、その場で寝っ転がった。
血だらけの地面の上に。

「は!?! 何言ってるんだ。オッサン!」

「坊や、オジサンは疲れたんだ。後は若い者に任すわ。」

ふ・ざ・け・ん・な!! クソ髭!! 幾らコイツ等が雑魚でも悪魔であることは変わりないんだぞ!

ネロは血が頭にのぼり、怒りマークを何個も出現させていた……主に、額らへんに。

だがネロは気づいていなかった、普段のダンテならこんな行動をとる事は無い、出現する悪魔をすべて狩り尽くすまで、狩りを止める事は絶対にしないダンテがこういう行動をとった事には意味が合った。

悪魔達はチャンスとばかりにダンテに襲い掛かるが、

「おまえら如きじゃ役者不足だ!」

颯爽と立ち上がり、襲ってくる悪魔をリベリオンで横薙ぎで一閃。

悪魔の首が空を舞う。

ネロにはもうダンテの姿が見えないほどの悪魔の大群の中で孤軍奮闘していた。

「出てこいよ、其処に居るのは分かっている。」
大群の悪魔の後ろから姿を現した一体・・・いや一人の暗黒騎士。
その姿は、

「ha-ha!! こりゃあ、坊やには荷が重いな。」
流石のダンテですら苦笑いを浮かべた。

「なあ、バージル!」
ネロ・アンジェロそのまんまの姿だった。

「一体誰かしらんが、全くやってくれるぜ。身内のクローンを創り出すなんてな!!」

ダンテの瞳には、怒り・激情・憤怒の感情が渦巻いていた。
ドンツ!! ネロ・アンジェロの足元の地面が爆発した瞬間!

「うおっ!!」
ガキンツ! という金属音が鳴り響くりベリオンとヤマトがぶつかりあった。

「こりゃあ、あんとき以上の戦闘能力だな。」
ダンテとネロ・アンジェロの力の均衡は一定を保ち、どちらも全く引けを取らない。

鏖競り合いの末、リベリオンとヤマトの刀身が赤みを帯始めてきた。
――まるで、あのときと同じような展開だな。

ガキンツ! リベリオンが放物線を描き空を舞い、地面に突き刺さる瞬間と同じ瞬間、ネロ・アンジェロはダンテの腹部目掛けて強烈な突きを繰り出した。

「ーだがな、俺もあのときの俣じゃないぜ
ニヒルな笑みを浮かべたダンテは、仰け反って居る状態のまま右フツクをヤマトの刀身に一発ぶちかまし、軌道完全にずらした。
それにより、体制が完全に崩されたネロ・アンジエロの土手腹に中国拳法の一つ、寸野を決めた。

「!」

ネロ・アンジエロは無言で、軽く10mは吹っ飛ばされた。

「まだ終わりじゃないだろう。」

ガシャン！ ガシャン！ と鎧が擦れる音と足音が同時に近づいてきているのが分かる。

「ノーダメージか・・・骨が折れるな。」

甲冑をしていて表情は見取れないが、ダメージ無いのは直ぐに分かった。

悠然と歩いてくるネロ・アンジエロが、突然目の前から姿を消した。

「ロイヤル！」

ズガン！！ ダンテの頭上に姿を現したネロ・アンジエロが兜割りをした。

だが、ダメージを受けたのは・・・

「あつぷ」

土煙が舞っている中からダンテが無傷で出てきた。

その後ろにはネロ・アンジエロが居たが、腹部の鎧部分が碎け散っていた。

ダンテの使うロイヤルガードの特性は、相手の力を利用して更に其処に自分の力を上乗せしてカウンターを狙うスタイルだ。

言わば、合気道みたいなものだ。

ネロ・アンジェロの兜割りの力にダンテの力を上乘せしたカウンタ
ー攻撃には、流石の鎧も強度が足りなかった。
だが、この鎧は只の鎧であるはずが無い。

「ちっ」

舌打ちをするだんて。

破壊された腹部の部分が再生を始めた。

魔界の特殊な金属を使って作っている魔具の一つである。

「鎧までレベルアップしてやがる。」

あの時の鎧にはそんな効果は無かった。

「一体誰なんだ？　こんなややこしい事をしやがる奴は！」

ダンテとネロ・アンジェロは同時に駆け出した。

二人は何度もぶつかりあう。

ダンテは全く気づいて無かった。

この戦闘を見ている者の存在に……

??? side

「フハハハハハハハハハハ！　素晴らしい。やはり素晴らしい！

早く私の者にならないかな。史上最強の悪魔狩人……ダンテ君

┌
紫色の髪に細身であり、背もある程度高く白い白衣を着ている男が
見ていた。

その白衣の居る部屋は薄暗く周りが見にくいだが、周りには色々な器
具が散乱しているのが見て取れる。……しかも、何世紀も先にあ

りそんな器具が沢山だ。

「それに、実験は成功の用だ・・・暗黒騎士ネロ・アンジェロ君・いや・・・バージル君・・・フハハハハハハハハハハ！」
馬鹿笑いをしている変人の真後ろには巨大な円型の筒があり、その中に悪魔の死骸が浮いていた。
筒の数は1つじゃなく何個もあり、その中に一体一体全く違う種族の悪魔の死骸が浮いている。
良く目を凝らして見てみると、この部屋の大きさは軽く半径100mはありそんな巨大すぎる部屋であるのが見える。
悪魔の数は軽く100体以上居る・・・全部死骸である事には変わりはない。

「ドクター。その映像は？」

白衣の男の後ろから一人の女性が歩いてやってきた。
ドクターと呼ばれているその男は、振り向いた。

「やあ、ウーノ。どうだい？　とうとう完成したよ。最高の悪魔と最高の鎧が・・・それだけじゃない。少しの傷なら再生できるように計算して作った鎧が、粉碎されても完全に再生をしているのだ！」

もう最高過ぎるじゃないか！　フハハハハハハハハハハ！！

ゲホッ！　ゲホッ！

馬鹿笑いしすぎたドクターは、むせた。

「・・・はあ」

ウーノは、大きなため息を着いた。

「さあ、ウーノも一緒にこれを見よう。」

まるで子供が、面白いおもちゃを見つけたような笑みを見せた。

「クソ髭！ 一体何を考えているんだ。いきなり戦闘を放り投げて、傍観者になりやがって・・・後でD・Tバスターで、性根を叩き直してやる。」

この時ネロは、怒りのあまりに今まで以上の戦闘能力を見せた。

ダンテや、サンクトウスと戦ったときよりもだ。

それ程、ネロの怒りは無駄に凄まじかった。

一方ダンテとネロ・アンジェロの方は・・・

一進一退の攻防を繰り返していた。

ダンテが攻撃すれば、ネロ・アンジェロは避け。ネロ・アンジェロが反撃すればダンテはカウンターを狙うが、同じような攻撃は二度も通用するような相手じゃなかった為、回避に回ったりしていた。

ダンテとネロ・アンジェロを囲んでいた悪魔は、二人の戦闘の余波だけで空を舞い消え去っていった。

上級悪魔の位に値するヘルⅡバンガードですら余波だけで、消し飛ばされている。

この二人の戦いに何人たりとも踏み込むことはできない、たとえネロでさえ無理な事であろう。

砂塵が舞い。地面は陥没し抉れる。ましてや、雲でも形を変わってきている。

二人の戦闘は次元を超えていた。

「イイイイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ダンテのステインガーがネロ・アンジェロの胴体を狙う。

「—————!!」

ネロ・アンジェロはダンテ同じ攻撃、スティングァーで反撃した。リベリオンとヤマトの剣先が激突した。

全く互角の力を持つ二人の強烈な技が激突した為に、周囲に秒速30m以上の突風が吹き荒れた。完全に台風を超えている。

その中心である二人は、衝突したと同時に後方10m以上は吹き飛ばされたが、二人とも空中で体制を立て直し上手く着地した。

ドンツ!! 二人が着地した瞬間、着地した地面が爆発を起こしていて二人はもう攻防を繰り返した。この一瞬で十手以上の攻撃、反撃、防御を繰り返していた。

近づく事の出来ない悪魔たちは何が起きているのかが、全く分らない。斬撃の軌道が全く見えず、風を切る音しか聴こえない。知能能力の低い馬鹿の悪魔は二人の間合いに入った瞬間には一瞬にしてミンチにされた。ミンチになるまで0.1秒もかからない。

「h a - h a ! ! !」

自分と互角に戦える敵と戦えて嬉しいダンテは、テンションゲージがhighをこえてmaxになった。

それに比例して、ダンテの潜在能力が発揮されてきて戦闘能力も上がりはじめて来ている。

「!!!!」

ダンテの力が強くなったことに本能的に危機感を覚えたネロ・アンジェロは、ダンテと距離を取った。

「おいおい、折角の激しいビートを止めるなよ。さあクライマックスを迎えたライブだぜ。楽しいこうや!!!!」

「—————!!!」
攻撃・重さ・リズム・タイミング・速さの全ての攻撃が格段に上がり、はんのうが遅れ始めている。

「show time!!」

「!!!!!!!」
銃弾が、兜の真ん中に全て命中し兜が砕け散り、素顔が露わになった。

「Break down!!(砕ける!!)」
バキヤツ！ ダンテの拳がネロアンジェロの顔面を捉えた。鼻が横に曲がり、前歯の四本全てが折れた。
ネロ・アンジェロの体は後ろに仰け反った。

「まだ、くたばんなよ。」

「!!!!」
ネギちゃりが決まり、ネロ・アンジェロは地面と熱いキスをする事になった。
ダンテの猛攻は終わらない。直ぐに立ち上がったネロ・アンジェロのアゴをアッパーカットが捉え、中に浮いた。

「Catch this! Rising Dragon!!」(これでも喰らいな！ 昇竜拳！)

飛び上がるように強烈なアッパーカットを繰り出した。ダンテの使う肉弾戦の中で最高の力を誇る技、リアルインパクトが見事にアゴを捉えた。

ネロ・アンジェロは更に空高くを舞い、放物線を描くようにして地

面に落ちた。

全く立ことが出来ない。

軽い脳震盪を起こしていた。

それも1秒程経った後、フラフラしながらも立ち上がった。

「……………!!!」

言葉にならない咆哮を上げて、青い炎に包まれた。

「おい、逃げるのかよ。」

つまらなそうに呟いた後、ネロアンジェロは消え去っていった。それと同時にあんなに沢山居た悪魔の軍勢も一緒に青い炎に包まれて消えていった。

一方全く現場の掴めていないネロはというと、

「一体、何が起きたんだ？」

ポカーンとしていた。

「どこの誰が知らねえが、見てるんだろっ。」

ダンテの言葉に何も帰って来ない。

「まあいい。覚悟は決めておけよ、悪魔に手を染めた事、そしてバールジルのクローンを作り出した事を後悔させてやるからよ。」
ダンテはネロの方に歩いて向かった。

ダンテ「あいつが出てくるなんて聞いてないぜ。」

作者「うん、言ってないから。」

ダンテ「まあ、その方がスリルがあって最高だけだな。」

作者「そうですね。だから、登場させたんだよ。ネロ・アンジェロを。」

ダンテ「まあ、あいつの相手は坊やには当分キツイだろう。あの爺よりも数倍も強いからな。」

作者「あの爺は、弱いしダンテの相手にはならないだろう。」

ダンテ「まあな。弾一発使う価値もねえ。」

作者「ハハハハハ。言われてみたらそうだな。」

ダンテ「まあ、坊やがどうしてもネロ・アンジェロと戦いたいって言うんだったら譲るけど、今の坊やじゃ。絶対に勝てないだろう。」

作者「そうですね。今のネロの戦闘能力はどの位なんだ？」

ダンテ「まあ、バージルよりも下だな。」

作者「そうなんだ。まあ、なんとなく予想はしていたけど。」

ダンテ「坊やは、まだまだ伸びる。」

作者「何時か、ダンテよりも強くなったりして。」

ダンテ「ふっ！ そうかもな。」

次話「未だ未定」

次の更新は3兄弟の予定です。

act 6 Red jewel〈赤い宝石〉（前書き）

これは今から始まる戦いの布石…

《黒》の名を持つ若い悪魔狩人。それを愛する聖女歌姫。

史上最強の悪魔狩人の人生最高の刺激を与えてくれる布石の始まり
でもあった…

act 6 Red jewel《赤い宝石》

あれから数日が経った。

あれ以来大量の悪魔^{ネロ・アンジェロ}が出てくることは無く、ましてや悪魔も出現しなくなった。

その分、合言葉有りの依頼がプツンツと途絶えた。冷蔵庫の中には、買っておいた食材がまだ残っている。

それよりも、オッサンが手伝ってくれと言った依頼はまだやっていないし、何の説明も受けていない……何時になったら教えてくれるんだ。

そういえば勝手に人の金を使ってピザのケツを返していたな……このオッサンはダメだ、後でバスターの刑だな。

結局ダンテは何時ものパターンでネロのバスターを喰らい、床にめり込んだ。

その後、一二秒もかからずむくりと起き上がる。

これも何時もの光景だ。

更に数日が経った。

マジで悪魔が出てこねえよ。腕が鈍りそうだからオッサンに相手をしてくれと頼んだら、案の定「今は面倒」の一言で終わらせやがった。オッサンは腕は鈍らないのか？ 一瞬脳裏を過ぎった疑問だった。

その巫山戯た性根を叩き直してやろうと思ったが、絶対に無理だと思ったので断念した。絶対に叩き直せるわけが無い……あの破天荒なオッサンを……orz

冷蔵庫にはまだ食材は残っているが……残金が底を尽きそ
うだ。

更に数日が経った。

俺って一体何の為にオッサンの事務所まで来ただけ？ オッサンの依頼を手伝う為に来たハズだ。なのに、一向にその依頼をやる気が全く見られない。オッサン金の方は大丈夫なのか？ 俺らが用意してきた金の残金が殆ど底を付いてしまったぞ。

冷蔵庫の食材も大分なくなっただし、四人で後二日しか持たないぞ。特にオッサンは馬鹿みたいに食うから、一日と半日と計算しておいた方が良いな。

「キリエ、食材をかうお金は残っているのか？」

再度キリエに確認してみた。

「ううん。」

首を横に振った。

そうか、残金はゼロか・・・結構余分に持ってきたはずなんだけどな。50000\$（日本円にすると約500000万円）程持ってきたんだけど、もう無くなったか。

今度卸に行くか。

ネロとキリエはもの凄く稼いでいた（主にネロが。）

まだネロが“騎士”だった頃、汚れ仕事をする事が沢山有りその報酬が莫大な金額だった。

当時ネロは金の使い道もなくずっと貯めていた。それは、今の“DEVIL NEVER CRY”を立ち上げてからもずっと貯めていた。（合言葉有りの仕事の報酬金は、基本的に莫大な金額です。平均100000\$を超えています。）

その結果、金額は100000000\$（日本円にすると約10億円です。）を超えていた。

なので生活費には全く支障が無い。一生暮らしていけるほどの金を貯蓄している。

まあ、それよりもあれ以来オッサンの様子が少しおかしい。正確には悪魔が消えて帰る時には様子がおかしかった。最初はなんかの気の迷いなんだと自分に言いきかせたんだが、それは違った。絶対におかしい、何時もの巫山戯た悪戯を全くしなくなった。

調子が狂う。

「ネロ。ダンテさんに何が有ったのかしら。」

キリエもダンテのおかしい様子に気がついている。そりゃあそうだ、ここに来てもう一ヶ月近くになるんだ。毎日のように巫山戯たダンテが途端に巫山戯るのを止めたんだ、誰だって変化に気がつく。

「さあな。前に一度聞いたが、適当にあしらわれた。」

ネロはお手上げのポーズをする。

「そつ。」

俯いて返事を返すキリエ。

今日という一日は終わりを告げた翌日の朝。

現時刻は早朝の5:00

「ふわあゝ・・・もう朝か。」

ネロとキリエは一応部屋は別々だ。個室は沢山あるが、一部屋一部屋が小さい。

「今日は俺の当番だったな。」

ネロはジーンズと黒のタンクトップを着て外に出た。まだ太陽は上がっておらず少し薄暗い。

太陽の上がついていないスラム街は何かと不気味だ。雰囲気から、何時でも悪魔が出てきそうな……そんな雰囲気があった。

「少し寒いな。」

いくら初夏でも、早朝にタンクトップは寒い。

ネロは何処からか取り出した箒で、外回りの掃除を始めた。ダンテの方に来てから一応居候させてもらっている身でもあるから、何かをしようとキリエに言われた。

それで始めたのが、俺とキリエで朝食の準備と外回りの掃除を交替でする事になった。

最初はダンテにもやらせようと思ったんだが、速攻で諦めた。

早朝に悪魔でも出現しない限りダンテ早朝に起きることなんて、絶対にアリエナイ。天地がひっくり返っても絶対にアリエナイ事だ。

もう一つの方法があるんだが、それは俺も早朝に起きないといけない。

まあ分かると思うが、バスターを決める事だ。これをすればあのオッサンでも起きるが、そんな事をするんだったら俺とキリエの二人で交代制でやったほうが効率が良いという結論に至った。

それで、今日は俺の当番である。

ネロは几帳面な性格故に隅々まで掃除をしている。

裏の方まで回って掃除をしている。

「ふう〜このぐらいで良いか。」

箒を担いで玄関前に行くと、

「何だコレは、誰宛なんだ。」

玄関前に宅急便で運ばれたであろう、ダンボール箱があった。

「なんでこんな時間帯に、それよりも車が来た気配も感じなかったぞ。」

不思議に思ったネロだったが、宛人を見てある意味納得してしまった。

差出人は見なかった。其処にはドクターと書いてあった。

「オッサンに？ なら何があっても不思議じゃないな。」

荷物を右手で抱え、中に持ち入った。コレが後にネロを大いに後悔させることになってしまふとは、まだこの時は気づいて無かった。

「さて、今日は何を作ろうか。」

冷蔵庫を見ながら、卵とベーコンを取り出してキッチンに材料を並べた。

「おっと、忘れていた。」

何かを思い出したように、キッチンから退出した。

カチツ という音がした後、

『今日の 地区の天気は晴れで、午後から雨になりますので、午後から出かける方は傘を忘れないようにしてくださいね。他の地区では……です。以上天気予報でした。』

ラジオをかけたネロはキッチンに戻ってきて、料理を再開した。材料で分かる通り今日の朝食は、ベーコンエッグとサラダにフランスパンだ。

『Ya - -!! 今週の曲はこれだ! の だ!!』

イエ イ!!』

「いつも無駄にテンション高いな。まるで、戦闘中のオッサンだ。」

「ちっ! 何か無性にイライラしてきた。」

カチツ! とチャンネルを変えた。

『—————』

ノイズが流れた。

「おいおい、壊れたわけじゃないだろう。」
「ネロは左手でラジオを叩いていくと、」

「BINGO!!」
声が聞こえ始めた。

『ダ……ん……がき……い』

「うん？　なんて言ってんだ。」
耳を済ませてもう一度聞いてみた。

『ダンテくん』

「!!!」
バキヤ！　ダンテの名前を聞いた瞬間、虫酸が走りそのままラジオを破壊してしまった。

「!!!　しまった。」
頭を抑えた。その場の感情に身を任せた結果だ。
後で買いに行くか、せめて良いラジオ。

「はあ」
朝一で憂鬱な気分な陥るねろ。

時刻 6 : 3 4

その頃とある一室では、

「胸糞悪い朝だな。」

不機嫌なダンテだった。

「何時まで観察してやがる。コレが美女だったら最高だが、男なんだろう。俺の美女or美少女レーダーに何の反応がねえからな。むさ苦しい男なんだろう。」

「……………無視か……………」

『ふふふふふ、流石に何度も無視をするのはよくないかな。』
ダンテの目の前にスクリーンが現れて、其処にはドクターと呼ばれていた男の姿が映し出された。

「マジで、むさ苦しいオッサンだな。」

『髭面の君には言われたくないがね。』

「hahahaha!」

『フハハハハハハハハハハ!!』

馬鹿笑いをする二人。

『ダンテ君、私の送ったプレゼントは見てくれたかね。最高のプレゼントだよ。』

「野郎のプレゼントを貰って喜ぶ野郎は、ゲイ位のもんだろう。違うか。」

『そうだね。でも、このプレゼントは最高の刺激を君に与えてくれ

るよ。楽しみにしてくれたまえ。』
ダンテの目の前からスクリーンは消えた。

「最高の刺激ね。」

自然に笑みを浮かべていたダンテだった。

「俺もとうとうヤキがまわったな。」

「オッサン、宅急便が届いてるぞ。」

「h a - h a ! マジで来やがった。」

颯爽とネロの元に向かった。

案の定キリエの嬢ちゃんと一緒に居た。

「これか？」

荷物に指を差して、ネロに聞いた。

「ああ、それとオッサン。」

「なんだ、坊や？」

「ドクターって誰だ？」

h a - h a ! ! 最高にhighだ。

ダンテは箱を乱暴に千切って開けた。

「綺麗。」

“それ”を見てポツリとキリエが呟いた。
ダンテは“それ”を手を取った。

掌サイズの赤い宝石。

その中でキリエ以外の二人の男は、キリエと全く違う反応だった。ネロは、右手を押さえた。激しい疼きが止まらない。

ダンテの方は笑みを浮かべていた。

（最高の刺激を味わえそうだな。）
突如、光出した。

誰もリアクションを取れず次の瞬間には、“DEVIL MAY CRY”ごとダンテ、ネロ、キリエの姿が…消えた。

同時に、ダンテの後ろを着いてきていた《赤い宝石》も一緒に消えた。

act 6 Red jewel へ赤い宝石 へ (後書き)

先にこつちを更新してしまった。

3兄弟の方も進んでいるのですが、亀更新になりそうです。

コッチの話のネタばかり浮かんで来ていますので、コッチの更新にある程度の区切りをつけてから、3兄弟を更新爆発させる予定で
ございます。

調子が良ければ今週中にこつちを2回程更新するかもしれません。

a c t 7 異界の地〈魔法世界〉（前書き）

《黒》の名を持つ若い悪魔狩人は異世界の地に来た。

同時に別次元でも異変は起きていた。

《黒》の名を持つ悪魔狩人は、今日も厄日であった。

act7 異界の地〈魔法世界〉

「う……、うう……」

目を覚ますと、辺りは全く見覚えのない土地だった…

たしか……

オッサンが箱を開けて、赤い宝石……赤い宝石！！ 何があったのか全てを思い出した。

「はあ……」

頭を押さえ盛大なため息を着いた。

オッサンに関わると絶対に面倒な事に巻き込まれるな…

俺に何かしらの《不幸》体質でもあるのか。

もうそう想わざるを得ない。

そんな事よりも、もう一度周囲を見回した。

森の中。全く見たことの無い土地。

そして、もう一度…

「はあ……」

盛大なため息を着いた。

オッサンが居ねえ事はどうでも良いが、キリエが居ない。ネ口の脳内でS級の緊急事態が発生したであろう並の警報が鳴った。

「オッサンと一緒になら良いが……」

破天荒で傍若無人で天邪鬼なオッサンでも、キリエを一人にするよりはマシだろう。

頼むからキリエ、オッサンと一緒に居てくれよ。

まあ、オッサンは一人でもいいが、キリエが一人の状況はマジで無しにしてくれよ。

「!？」

右手の甲が、淡く光だした次の瞬間、ダンテが握っていたハズの赤い宝石がネロの右手の手中に出現した。

この赤い宝石から嫌な臭いがした。

(こりゃあ、また厄介ごとに巻き込まれるパターンだな。)
いつの間にかネロの周りに、あの時ぶっこわした卵型ロボットが10体現れていた。

ネロは《赤の女王》を抜き、地面に突き刺した。
グリップを捻り、大型バイクのエンジンを吹かすような音が森のなかに響いた。

「C·m·o·n!! w·i·n·p! (来いよ!! ノロマ共!)」

「h·a·h·a!」

迫りくるロボットに、一撃一刀両断。一撃で大破する。

「オモチャなら、もつと頑丈だろ。ガッツ見せろや。」
ネロの一撃がロボットを大破させる。

「Cut off! (斬る!)」

地面を滑るように滑走し、前方の敵を薙ぎ払う《ストリーク》でロボットを横一闪。

10秒足らずで残り3機。

「ほらほら、仲間がやられたんだぜ。魅せてみる。」
ネロに向かって赤い光線を発射する。

飛び上がるようにして攻撃を避ける。

ロボットは上空にいるネロに狙いを定めて、光線を発射。

「ふっ」

不敵に笑うネロ。

足元に青い色の魔法陣が出現し、それを足場にして跳躍した。

光線は何もない空に突き進んだ。

「Crash！（壊れる！）」

《青の薔薇》をホルスターから抜き、弾丸を発射。
発射された2発の弾丸は、いとも簡単にロボットを貫き地面に突き刺さる。

ネロはブルーローズをホルスターに仕舞い着地。

「Good luck」

首をカッ切ってサムダウンと同時に、着弾地点が爆発を起こした。
2機のロボットは爆発に飲み込まれ、塵に変わった。

「……………」

無言でこの場を立ち去った。

(キリエ。無事で居てくれ。)
そう切に願う。

とある別次元。
港に着いたときには、夜になっていた。

此処はスラム街近くにある廃墟とかした港。
停泊している船なんて無い、有ると言ったらボートぐらいな物だ。

飛行不能になったプロペラヘリを海上運転で此処までやってきた。
プロペラヘリの先端が勢いよく港に直撃した。

激突した鈍い音が夜の港に響いた。

後の方に乗っていたトリツシュが息を吐く。

「……乱暴な止め方ね。」

「悪かったな……」

エンジンを切ると操縦席から降りて、背筋を伸ばした。「バキバキ
バキ！」と気持ちいい具合に骨が鳴った。

軽い息を吐いたあと、夜空を見上げた。月の光が降り注いでいた。
やっと長い長い戦いも一息を着いた。

母の仇も討つたし、兄貴とのケリも付けてきた。クソ野郎の封印も
した。

本当に長い闘いだった。

明日から仕事に戻るが、週休6日制の俺の元には“合言葉”の仕事が来る何時もの退屈な日常に戻るだけだ。

今回からは違うだろう。

トリツシュという新しい相棒を得た。退屈でつまらない日々にはならないだろう。

「ダンテ。早く行きましょう。」

「そうだな。」

トリツシュは事務所にむかって歩きだす。その後ろをダンテがついて行く。

普通ならダンテが先頭を歩くのが、普通だ。

ダンテは一度後ろを振り返った。

ボロボロになったプロペラヘリの方を見ながら「お疲れさん」と、労いの言葉をかけてトリツシュの後ろをついて行った。

「うん？」

右足が何か硬い物を踏んだ感触が伝わった。

右足をあげてみると《それ》があった。

ダンテは手に取った。

「何でこんな物が……」

掌サイズの赤い宝石だ。

ダンテは赤い宝石から嫌な魔力が漂っているのを肌に感じ取った。気付かぬ内にダンテは、笑みを浮かべていた。

「初っ端から、退屈しそうにないな。」
赤い宝石を乱暴に真上に放り投げて、手に取った瞬間に光に包まれ
其処には誰も居なかった。

異変に気づいたトリッシュがダンテが居た方に振り返ると、当然誰
も居なかった。

只、月の光が辺りを照らしていた。
ダンテの姿も見られなかった。

「ダンテ……」

トリッシュの呟きは夜の闇に消えた。

さてはてダンテは何処に消えたのか？

act7 異界の地へ魔法世界へ（後書き）

分かる人にはわかると思いますが、最後に出てきたダンテはその時のダンテです。

最後に出てきたダンテは当然出てこないと思います……多分。

act10以降にだそうかなって考えております。

それでは、次会を待て！

act 8 迷子へ迷子の黒猫（前書き）

《黒》の名を持つ男はさまよう……

大切な人を見つけ出すために。

その裏では、ドクターと呼ばれる男が着々と計画を進めていた。

《魔剣士》 《悪魔》 《魔帝》 《霸王》 という存在に魅入れし者は、
狂気に変わる。

いつしか、自らも悪魔になろうとする者まで過去に見られ、残酷で
無残な最後を送った。

この男はどうなる？

act 8 迷子へ迷子の黒猫

小鳥のさえずりが聞こえ、目を覚ますと日は昇り、朝になっていた。大木に背中を寄せて寝ていたネ口は、立ち上がった。

大きな欠伸をした後行く宛も無く歩き出した。

ネ口の現在の状況は……迷子。つまり全く未知の森で絶賛遭難中のKID。

(今の状況をオッサンに知られたら……)

「たくめんどくせえ」と、小さく呟く。

視線を右腕に移した。右腕には黄色のボロ布が巻かれていた。

昨日戦闘が終わった後、ネ口は先に右腕に巻く物を探していた。時刻は過ぎて行き日が沈みかけていた時に、たまたま木の枝に引っ掛かっていたボロ布を発見し、今に至る。

「にしてもこのボロ布。」
「ローブなのか？ 彼奴等（フォルトウナの住民）の着ていた物と肌触りが似ている。」

近くに教会でも有るのか…まあいい、適当に歩き回って教会でも探すか。

当然此処等の土地勘が全くと言っていいほど無いネ口は歩き回るし

か無かった。

近くに川でもあれば、下流を降っていけば何とかなるんだが…水の音なんて一切聴こえないから無いんだろう。

「はあ〜」

気がついたらため息が漏れていた。

ダンテと関わる以上絶対に厄介事に巻き込まれる事を覚悟していたネロだが、こんな厄介な事になるとは全く思ってもみなかった。

「覚悟しておけよ。オツサン。」

彼の瞳には怒りの炎が燃え盛っていた。

空を見上げると太陽の光が眩しい。太陽の位置から昼前後辺りか…
…キリエとオツサンの手掛かりも情報も無しか。
人自体いないから当然と言えば当然か。

更に数時間も適当に歩き回っていたネロに、風と鳥の声以外の音が聞こえた。

人の声ではない。何かの乗り物の音。

「これは…まさか」

音が聞こえた方向に走っていくと、

「BINGO!!」

リニアールの線路がネロの目の前にあった。目の前と言っても、ネロの立ち位置はリニアールの線路がある後の絶壁のてっぺんに居る。

高さはザット10m位。

音がドンドン近づいてくる。

「Ha-Ha!」

テンションが上がっていく時のダンテの口癖を漏らした。眼下を通過するリニアレールに飛び込んだ。

リニアレールと接触するまで約2秒。

その間にネロはレッドクイーンを抜き、

「邪魔だああああああ!!」

リニアレールにへばりついていた先程のロボットを破壊。その勢いのまま屋根を破壊し、車内に乗り込んだ。

車内に居たロボットが一斉にネロの方を見た。

「昨日。今日とてめえらには何かと縁があるようだな。」
ロボットに問いかけた。

返事が無い代わりに、ビームを発射。

飛び上がり回避するが、アームが一気に迫る。

だが、レッドクイーンで迫るアームを破壊。

着地と同時に武器をブルーローズに切替、2発分計4発の弾丸を発射。

4発の弾丸はロボットに命中し、ショートした後に爆発した。

「Too easy! (チヨロいな!)」
不敵に笑ってみせるネロ。だが、更にロボットが湧いて出てくる。

「ワンパターンだな。」

呟いと同時に脳裏には、オッサンことダンテのセリフが蘇ってきた。

「ダアアアアンテエエエエエエイ!!!」

二階から眠そうに降りてきた髭を容赦なくスナッチし床に三回叩きつけた。ダンテは突っ伏して動かなくなるが、しかし三秒もするとむくりと顔を上げ、

「ワンパターンだな坊や。今度から趣向をひねってだな。」

「んな事はどうでもいい!!! オッサンまた風呂からあがってそのままだろ!!! 床がびしょびしょじゃねーか!!!」
ビシッと力強く指差した。

ダンテは指を差した方向を視線で追うと、バスルーム前のリビングの床板が水を吸収して色が変色していた。

「あーあ」とダンテは人事みたいに呟いた。

「何、人事みたいなセリフを言ってるんだ!!!」
デビルプリンガーで容赦なくボディーブロー。

ダンテに言われたとおりに趣向を変えた。

この後も、巫山戯た事を抜かしたダンテは、ネロにバックドロップ

からのジャーマンスープレックスを喰らい床を突き破り、上半身がめり込んだ。

この時ダンテは朝シャワーを浴びて、まともに身体をふかず部屋に戻ったのだ。

その時の事が思い出された。

「オッサンが言いたい事が分かったぜ。」
レッドクイーンに武器を切り替えたネロは、ロボットに向かって疾走した。

「ワンパターンは飽きるな!!」
薙ぎ払う。

「かかってきな。遠慮はいらねえ。」

「C`mon winp!! (来いよ。ノロマ共!!)」
レッドクイーンを持ったままグリップを捻る。《イクシード》を發動する。

「オラアアア!!」
レッドクイーンをロボットに突き刺す。刀身に帯びた熱がロボットのボディを熱し柔らかくする。

身体を捻りながら切り上げる。

まだ破壊されていないロボットが反撃とばかりにビームとアームが混合した攻撃を繰り返す。

一定の距離を保ちながら、ブルーローズの空薬莖を投げ捨て、すぐに懐からクイツクローダーにはまった弾丸を装填する。

そんな事を繰り返していると、

「親玉の登場か。俺を楽しませてくれるんだろう。なあ」
笑みを浮かべるネロ。

ネロの目の前には先程のロボットより更に大きく、アームの数も増えているロボットが一体居た。

大きなアームがネロに迫りくる。

先程と同じように飛び上がり避ける。残りのアームがネロを捕らえようと迫りくる。

「少しは学習しな。」

レッドクイーンで迫りくるアームを切り裂く。

「脆い。見掛け倒しだな。」

つまらなそうに言う。

「なあ、もっと俺を楽しませてくれよ。根性をみせろやガッツを。」
ネロがセリフを言っている途中でブンツという風斬り音が聞こえた。
ロボットがアームを振るったのだ。

「せっかちだな。まるで、ダンテだー!!」

黄色のボロ布で隠したままの《悪魔の右腕》でアームを掴んだ。

「ふんっ！」

ジャイアントスイングの要領で振り回し、

「ウラアアアアアアアアア！」

投げ飛ばした。車両の壁を貫き、外に放り投げられた。

そのまま壁に激突して木っ端微塵に破壊された。

《悪魔の右腕》の手中に千切れたアームの先端があった。

それをポイっとそこら辺に投げ捨てた。

「終わったな……」

其処には木っ端微塵に破壊された鉄屑が山の用になっていた。

言葉通りに“木っ端微塵”に“破壊”しただけ……

「Too easy」チヨロいな

ネロにしてみれば「Too easy」の一言で終わる程度の雑魚でしかなかった。

「……寝るか……」

ネロは破壊され尽くした車両を一通り見回した後、前の車両の方に移動した。

適当にボックス席に座った。

不意に視線を《悪魔の右腕》に移した。

「そつえば、この赤い宝石を持っているから狙われているのか。」
右腕に神経を集中させて、右腕から強烈な光を放った後、掌にはあ

の赤い宝石があった。

「まあいい、何時か分かるだろう。」

赤い宝石は、光に包まれて右腕の中に吸収されていった。

「そんな事よりも。」

腹の虫がなった。

「腹減った。」

昨日から何も食べていないネロは、腹が減ってたまらなかった。

ネロは、キリエが作った料理が恋しくてたまらなくなった。

早くキリエと会いたい、オッサンなんてどうでもいいからキリエと会いたい。

やっと幸せを掴んだネロにとってキリエが全て、キリエはネロの生きる理由、存在理由なのだ。

ネロは、キリエの無事を願いながら……

腕を組んだ後に両足を向い側の椅子に乗せて眠りについた。

時折、冷や汗を流して身体を震わせた。

終点に着いたらなんとかなるだろうという、安易な考えでこの用な行動をとった。コレが後に面倒クサイ事に巻き込まれる事になるうとは、思っても見なかった。

ドクター side

「やはり素晴らしい。欲しい、《黒騎士》の力も欲しい。」
ドクターの視線の先には、モニターに映っているネロの姿が映し出
されていた。

事情を知らない奴が聞いたら、只の変人、又はゲイかホモに思われ
る発言を高笑いと一緒にしていた。
いや、変人は的を得ている。

「あああ、素晴らしい素晴らしい。」
息使いが荒々しくなっていく、自分の身体を抱く……ドクターの後
ろに居たウーノが、困った表情を浮かべていた。

（ああーまた始まった。こうなったドクターは止められない……最
近、胃が痛いわね。）
ため息を吐いたあと、ポケットからカプセルの薬を取り出して飲ん
だ。

今飲んだ薬は、いわゆる胃腸薬と言うものだ。
戦闘機人でも、ストレスはたまり胃が痛くなるようだ。

彼女もネロと同じように、苦勞人のようだ。

「ドクター」

彼女の呼びかけに、一切の反応を見せない。
ただ聞こえてくるのは「欲しい。」とか「素晴らしい。」とか「早
く私の者に」など、完全に危ない人発言連発。

ドクターがこんな危ない人発言をする度に、寝ているネロは冷や汗をかき身体を震わせた。
全くもって迷惑な上ないことだ。

「それと。」

モニターが変わって、其処には暗黒騎士ネロ・アンジェロの姿があった。

ネロ・アンジェロはカプセルの中に入って眠っている用だ。

ダンテから受けた傷は完治しているようだ。

「まだまだ、あれは君の全力じゃないだろう。」

「もつと魅せてたまえ。君の実力を！ スパーダの血の力を！！」
ドクターの瞳には、狂気が満ちていた。
そう悪魔に魅了された。アーカム、魔剣教団の教皇と同じ瞳をしていた。

「えッ！」

ウーノは一瞬、目を疑った。ドクターの影が一瞬だけ“異形”の姿に変わったからだ。

ウーノは一度目を擦った後、もう一度見た。

（あれは、見間違いだったの？）

影は“異形”の姿はしていなかったな。

ウーノは困惑した。

「ネロ君。君には、この《暗黒騎士》が倒せるかね？ 楽しみだよ。」

これ程までに悪魔に魅入られた者はいないだろう。

「君も、《魔剣士スパード》の力に惚れて弟子入りした。君の実力も見てみたいよ。使えるんだらう、《スパード》の剣術が！ ああ、欲しい。欲しい欲しい欲しい！！ 《スパード》の血が力が！ 欲しい！！！！」

「ああ、楽しみだ！ フハハハハハハハハハハ！ アーハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」
馬鹿みたいに高笑いをするドクター。
何時もの用にむせて、喉を傷める…何時ものワンパターンだ。

更にモニターが移り変わり、其処には……

「……………」

モニターを見たウーノは息を飲んだ。

体は震え、顔は真っ青になり冷や汗を流す。

ウーノは意識が遠くなっていくのを感じた。

ハッキリと鮮明に残っているのが、白く輝き、神々しい翼を持つ巨大な“悪魔”だった。

他にも“最強”と言える程の悪魔が並んで居たが、ウーノはそれぞれ瞳に写っていなかった。

そう“史上最悪最強の悪魔”の姿が、

ウーノはとうとう意識を失った。

意識を失う直前聞こえた言葉が「魔帝」「霸王」「魔剣士」……
この三つの単語が脳裏で反響し、記憶に唯一残った言葉だった。

act 8 迷子へ迷子の黒猫 (後書き)

作者「なんか、ヒントを出し過ぎた。」

ダンテ「いいじゃねえか。俺は楽しみでたまらねえ。今まで以上の刺激を味わえそうだ。」

作者「まあ、そうなるよ。今まで以上の刺激と仰天満載だから。」

ダンテ「HUY 楽しみだ。」

act9 黒と暗黒へ激突 (前書き)

《黒》の名を持つ狩人と、《暗黒》の名を持つ騎士が合間見える。

《黒》は何を感じ、何を知る。

《暗黒》は圧倒的な力で、《黒》の前に立ちはだかる。

act9 始まります。

act 9 黒と暗黒へ激突

「うう……うう……キリエ……」

ネロは顔色を悪くして魔されていた。

ネロは夢を見ていた。

あの忌まわしき記憶の断片を。ネロにとって人生で一番の黒歴史を。悲しみの記憶の断片。

「キリエエエエエエイ！」

上空でアルトアンジェロに抱えられているキリエを助けようと、ネロは飛ぶ。

「邪魔をするなああああああー！」

目の前には、二体のビアンコアンジェロが行く手を阻む。

それを《悪魔の右腕》である《デビルプリンガー》を突き出すだけで、吹き飛ばした。吹き飛ばされたビアンコアンジェロは壁に叩きつけられる。

キリエに届く。そう確信したとき、

ネロの見えないところで待機していたビアンコアンジェロが、背中にあるブーストを起動させネロに突進していった。

空中で回避行動がとれないネロは、

「ぐはっ」

見事までに喰らい、地面に叩きつけられた。地面は罅割れ陥没した。叩きつけられたと同時に、肋骨が何本か逝った。

ネロは口ずさんだ。

「power（力を）」

力無く立ち上がる

護るために。

「power！（力を！）」

瞳は真紅に染まる。

大切な人を護るために！！

「Give more power！！（もつと俺に力を！！）」

悪魔の引き金を……“デビルトリガー”を引く。

ネロが寝ていたリニアールの車両が消し飛ぶ。

其処には一人の男が立っていた。

《悪魔の右手》を持ち、その悪魔の右手には《閻魔刀》を握っていた。

ネロの身体を青白いオーラが包む。

「キリエを……」

声は二重に重なり、エコーがかかっているようなものだ。

「護る為の力を！」

瞳は真紅に染まり、体からは絶えず青白いオーラを放つネロの姿…

「力を……」

彼の背後には青白い魔力で形成された《悪魔》の姿…

『キリエを守る力を！！』
内に眠る力が暴走。

それに共鳴して右腕から《赤い宝石》が出てきた。

《赤い宝石》は真つ赤な光を放出する。

真つ赤な光は輝きを増し、魔力が増幅する。

真つ赤な光はネ口を包む。更に光は力強く輝く。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

獣のような咆哮と共にネ口は一気に内に眠る魔力を解放した。瞬間、核弾頭でも落とされたような爆発音が鳴り響き、この地域を強烈な空気の振動が襲い、突風が吹き荒れた。

砂煙が舞い上がり辺り一面何も見えない。

まるで霧だ。

リニアレールは消え去り、近くにあった山々と森林が消滅した。

言葉通り“消滅”したのだ。

跡形も無く……

その中心にはネ口が居た。

「ハア……ハア……ハア……」

全身から汗を吹出し、肩で息をしている。

出現した赤い宝石は《悪魔の右腕》に吸収された。不思議な事に右腕に巻かれていたボロ布は、吹き飛ばずに、右腕に巻き付いたまま

だった。

「一体何が？」

辺りを見回しながら呟く。まるで信じられない光景を見るような目で見た。

「俺がやったのか……ハハハハハハ。」

頭を押さえたネロの口からは乾いた笑い声が出た。

「……キリエ。」

ネロは、遠くに聳え立つ教会らしき所を目指して歩き出した。今のネロは、肉体的にも精神的にもピークを迎えていた。

すると妙な感覚を感じ、頭の中を切り替えた。

先程のロボットや《悪魔》とは全く違う別の感じ……

“人間”の気配、確かに人間の気配を感じた。

“人間”の気配を感じ、辺りを見回すが人影なんて見当たらない。

だが、“人間”の気配を感じる。

（まさか！？ 冗談じゃねえよな。）

半信半疑で空を見上げると、“人間”が居た。

ネロは目を疑い呆気にとられ度肝を抜かれた。

（浮いてるだと？ 何かの見間違いだろ。）

今一度、見直した。

やはり“人間”が空を飛んでいる。
ネロは脳をフル回転させた。

（人間って飛べねえよな。跳べるけど飛べねえよな……俺でも空は飛べねえ。）

一瞬オッサンの姿が脳裏を過ぎった。

（オッサンなら……飛ぶな。）

結論、オッサンなら飛べる。確実に飛ぶ事ができる。
以上！！

「あ、あの〜」

空を飛んでいる人が声をかけてきた。
視線をその人に向けた。

そして、俺に近づくようにして地面に降り立った。

「時空管理局。機動六課ライトニング分隊長、フェイト・テスト
ロツサ・ハラオウンです。」

「同じく、時空管理局。機動六課スターズ分隊長、高町なのはで
す。」

金髪を二つに束ねたツインテールに黒い服装白いマントを羽織って、
手には斧らしき物を握っている女性が自己紹介をした後に、もう一
人の女性が降り立って自己紹介をした。

もう一人の女性は、栗色のを二つに束ねたツインテールに白い服装
に、左手には機械的な杖を握っている。

更に彼女達の丁度真上に軍用ヘリコプターがやってきて、停滞している。
待機しているのか…

「聞きたいことがあるので、すいませんが一緒に、ご同行お願いします。」

栗色の女性が近づいて喋った。

ネロは事態を全く読み込めていない状態で、脳をフル回転させた。

此処に来て、大体一日程度経った…

いきなり見たことも、行ったこともない土地で目覚めた。

豪華な教会も見えた…：ローマ中世に近い国と考えたが違った。近未来的なりニアレールが走っているわ、またロボットに襲われるわ。最後になんだ、“人間”が空から現れて、しかも初対面でいきなり“御同行”と来たもんだ。

協調性に欠け皮肉屋のネロにとって“はい分かりました。”と納得もできない。

しかも、聞きたいこと〓事情徴収。初対面でありながらお願い〓命令と来んだ。

命令、縛られる事を嫌うネロには無理な願いだ。

「嫌だと言ったら…：…どうする？」
不敵に笑う。

「どうしても無理かな。でないと、無理矢理連れて行くことになっちゃうの。」

「私たちは出来れば、そういうのは極力避けたいのです。」
なのはが言い終わった後、隣に立っていたフェイトが喋った。

極力避けたい……止むを得ない場合は無理矢理連行か。

まあ、俺も女性に……“人間”に武器を向けるのは極力避けたい。
オッサンは例外だな。

少し思考を巡らせた。

俺は此処が何処なのか全く知らないし、土地勘も無い。
何を言っても初めて聞く言葉が出てきた「時空管理局」何処かの組織なんだろう……名前からするとかなり大規模な組織のハズだ。

此処の事を全く知らない俺が適当に歩き回ってもキリエを見つけ出すのは、至難の業だ。着いて行った方が、色々と良いのかも知れん。
今の状況では、キリエを探し出すのに一番良いかもしれん……

それなら、着いて行った方が良いかもな……

ネロはボリボリと頭を掻いた。

「ちっ」

舌打ちを一回して、

「ついて行くよ。」

仏頂面でなのはとフェイトに聞こえるように言った。

なのはとフェイトは苦笑いをして、ネロに近づいた。

はあ〜何回面倒臭い事に巻き込まれないといけないんだ。オツサン！ 覚悟しろよ。

ダンテを処刑すると誓うネロだった。

それはそうと、なのはとフェイトの二人は、まあまあやれる用だな。そんな事を思案しながら、とある“気配”を捕らえていた。そう“人間”とは全く別の“気配”を右腕でしっかりと捕らえていた。

(そろそろ来る頃か！)

ネロは咄嗟に周囲を見渡して、ブルーローズを抜いた。

「え、な、何!?」

彼の突然の行動に驚くなのはとフェイト…息もピツタリ。

「来た。」

目の前の空間に穴が空いた。

それはさほど大きくない、大人が一人分通れるか通れないか位の穴。その穴が空間上にいくつも出現し、同時にそれぞれの穴から影が飛び出す。

「SHAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

「ZGAAAAAAAAAGAAAAAAAAA!!!」

咆哮を上げながら何体ものの“悪魔”が現れた。

「huhブリッツにアサルトにフロストか。」
フロストは、かつて魔界の帝王が作り出した
精鋭で、様々な局面に対応できる。
氷りを操る万能型の悪魔。
フロストは二三体で行動をする。

アサルトは、かつて魔界の帝王が作り出した
精鋭で、暴風を操る力を持つ
強襲型の悪魔。
鋭い爪で地中に潜るなど、様々な
攻撃方法を持つ
急襲型の悪魔。

アサルトは群をなして行動をする。

ブリッツは、かつて魔界の帝王が作り出した
精鋭で、電撃を操る力を持つ
急襲型の悪魔。
視力がなく、獲物の動きを察知して
行動する事が多い。
基本的に単体行動。

アサルトが5体、フロストが2体、ブリッツが1体出現した。

「アンノウン！」
“悪魔”の姿を見たのはが力強く言うと、同時になのはとフェイ
トは手に持っていた武器を構える。

「Ha！ 久し振りの顔触れだな。居るんだったら、もつと何かしらのアクションをくれよ。」
ネロはブルーローズの銃口をアサルト達に向けて、まるで友人と久しぶりに会ったかのような口調だ。

「貴方はこのアンノウンについて知っているのですか！？」
フェイトが、ネロに話しかけた。
その言葉を背に、ネロは傍に居たアサルトに急接近する。

「知ってるも何も……」
アサルトの鉤爪の攻撃を避けながら、

「コイツ等は……」
銃口をアサルトの額に当てた。

「俺の……」
ネロは「俺の専門分野だ。」と言いかけた言葉を途中で止めた。
脳裏には他のデビルハンターのレディ、トリッシュ、そしてダンテの姿が過ぎった。

「俺等の専門分野だ！」
引き金を引き、鉛玉を発射。
ブルーローズから吐き出された2発の弾丸はアサルトの額を貫いたと同時に、頭が爆ぜた。
鮮血が辺りに飛び散り、ネロの顔にもかかる。

「それはそうと、アンタ等邪魔だから。退いてな。」
彼女等に振り向いて言い放った。

「此処からは、R指定だ！！」

武器をレッドクイーンに切り替える。

「SHAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

2体のアサルトがネロに向かって鉤爪を振り上げながら飛びかかるが、

「ワオ！」

目の前を雷が通り抜けた。

雷は2体のアサルトの胴体を貫いた。

余りの激痛にのたうち回っていたアサルトだったが、直ぐに事切れた。

「ZGAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

ブリッツの両手から放たれた雷が、アサルトを貫いたのだった。

「おいおい、折角の獲物を減らすなよ。」

呆れたように言う。

「な、仲間を……殺した……」

目の前の光景が信じられないのか、なのはは両手で口を抑えていた。

「なんで、そんな事を!!!」

フェイトは怒りを現わにした。

ブリッツは視覚という感覚が無い為に、全てを聴覚で判断している。その音が聞こえた方に敵、ようは“獲物”が居ると判断する。

だから、ブリッツは、

「ZGAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

「Crazy!!!!!!!!!!!!!!」
薙ぎ払う。

ひび割れた盾を完膚無きまでに破壊し、アサルトの身体を真っ二つに切り裂く。

「SHAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AA!!!」

残り1体のアサルトが地面に潜る。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
フロストがネロに向かって、氷の槍を発射。

それをネロは、ブルーローズで撃って破壊。
その瞬間、

ネロの真下の地面が割れ、鉤爪を突き上げながらアサルトが飛び出した。

突き上げられた鉤爪はネロのアゴを狙っている。
引っ掛れた瞬間にも、顔の原型は無くなる程の鋭く巨大な鉤爪は今にもネロのアゴを捉えんとする。

瞬間、ネロは不敵に笑った。

ネロの笑みを見たアサルトには、悪寒が走った。

鉤爪はネロのアゴを捉える寸前で止まった…いや止められた。
ネロは“右腕”で鉤爪を掴んでいた。

「Ha-Ha! 狙いは悪くねえ。」
そのまま持ち上げて、

「相手を間違えたな!!」

「Go Down!!(落ちろ!!)」
地面に叩き伏せる。
腕は千切れ、地面にのたうちまわる。

その姿を見下ろしながら、脳天にレッドクイーンの剣先を突き立てた。
動かなくなり消え去る。

「Com、n wimp(かかってきな。ノロマ)」
手招きをする。

そんな挑発的行動を間に受けないフロストは、ネロを十二分に警戒をしていた。

「そんなんじゃ、客は醒めるぜ!」
走る、ただ単にフロストに向かって走る。

反撃として1体のフロストは氷の槍を発射し、もう1体は上空に飛び上がり、上空から氷の槍を発射する。
ネロはスピードを落とさず、逆に走るスピードを上げて…避ける。

全ての槍を避け切ったネロは、飛び上がっていないフロストを、

「Blast!!!」
目一杯切り上げた。
切り上げられたフロストは、10m位まで上空に上がった。

追撃をするためにネロは、跳び上がる。
直ぐにフロストを追い抜かし、真上に来た。

真つ赤に染まったレッドクイーンを下に突き出し、フロストを突き刺したまま急降下する。

「Double Down!!!」
事切れるフロスト。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
怒りを現わにする。
左腕の氷の鉤爪が光る。

「ヤベ！」
その場からすぐに退避をしたネロ。

上空に居たフロストが急降下し、地面に光っていた鉤爪を突き刺した瞬間！
フロストの周りは凍りつき、巨大な氷柱が咲き乱れた。

「なかなかcoolだぜ。お前。」
レッドクイーンのグリップを捻り、イクシードを発生させる。
ネロは何度も捻り、限界まで捻った。
レッドクイーンの刀身は真紅に染まった。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」
また鉤爪を輝かせて、上空に上がり、ネロに向かって急降下する。

「Let's rock!」
ネロの姿を見失った。

標的を見失った一撃は、何も手応えはなかった。

ネロは一瞬にして、真後ろに後退していた。

その距離約5m程。

「Blast!!!」

その距離を一瞬にして詰めて、突進ホームラン二段斬りのEXシャッフルという技を決めた。

上方に吹き飛ばされたフロストは、氷の細かい結晶をまき散らしながら、事切れた。

同時に、物凄い爆裂音が鳴り響いた。

直ぐ様爆裂音が鳴り響いた方向を向いた。

「It's crazy」

そう呟くしかなかった。

なぜなら、ブリッツが完膚無きまでにやられ、ブリッツが地面にめり込んだ姿だった。

その後直ぐに消え去った。

ネロは上空を見上げると、全くダメージを受けていない二人の姿があった。

少し時間は遡り、ネロがアサルト達を相手にしていた頃。

「フェイトちゃん、殺るよ。」

レイジングハートを構えたなのはが告げる。

「分かってるよ。なのは。」
頷いて、返事を返すフェイト。

《サイスフォーム。》

無機質な男性の声と共に斧の形をしていたデバイスが変形し、鎌の形になった。

鎌の刃の部分は魔力で出来ている。

上空に飛び上がる二人。

それに向けて、両腕を突き出すブリッツ。

なのはとフェイトは先程の映像が脳裏を過ぎった。

次の瞬間、雷は発射された。

勿論ブリッツの放つ雷は、雷と同じ速度。

発射した瞬間には、着弾していた。

着弾点は、煙でハッキリと見えないが、勝利を確信したブリッツは吠えた。

「勝手に勝利の咆哮を上げてもらっちゃ困るな。」
そんな言葉が聞こえた時には、

「ZYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!」
ブリッツの全身に何十以上もの魔力弾が襲いかかった。
纏っていた雷の鎧は消えた。

「今だよフェイトちゃん!」

怯んだブリッツに向けて、

「ハーケン・セイバー!!!」
刃を飛ばした。

ブリッツに向い飛翔しながら高速回転をしている。
三日月の形状をしていた刃が、高速回転により形状が変化し円形状になった。

ザン!! という音と共にブリッツの肩から左脇腹まで切り裂いた。

「なのは!!!」
なのはの方を振り向きながら、名前を呼ぶ。

「準備完了だよ。」
なのはの足元には巨大な魔力陣が出現しており、レイジングハートの先端には巨大な魔力の塊が合った。

《Divine Buster》
無機質な女性の声がフェイトとなのは、そしてブリッツの耳にハッキリと聞こえた。

「デイバイイイイインンンンン」
レイジングハートを振り上げ、

「バスタアアアアアアアア!!!」
魔力の塊を打った。

巨大すぎると言っているほどのピンク色の魔力の奔流がブリッツを飲み込んだ。

耐え切れるハズも無く、めり込んだ。

本来の力を最大限に引き出すまもなく事切れるブリッツだった。

地上に降りた二人にネロは、

「やるなアンタ等。普通の奴なら最初の一発で昇天しているところ

「なのはさー！ー！ー！ー！ん！ー！ち。」

へりから四人の“人間”が降りてきた。

「ー最近のスカイダイビングはパラシュート無しか……イカスぜってオッサンは言ってるだろっな。

腕を組みながら考えていた。

《《《セツトアップ》》》

四つの無機質な声が聞こえた後、

「「「セエエツトアアアアプ！！」「」「」

その後、四人分の声が聞こえた。

「！！？」

突如として、“悪魔の右腕”に強烈な疼きを感じた。

この疼きの感覚は、オッサンと似ている………だけど違う！　これはオッサンじゃ無い。

ネロは四人の更に後を見た。

「あれは……なんだ……」

なのはとフェイトもネロの視線を追った。

「「!?」」

二人して、息を飲んだ。

直ぐに、

「スバル!! ティアナ!!」

なのはが叫び、

「エリオ!! キャロ!!」

悲痛な声で叫ぶフェイト。

「逃げて!!」

二人の悲痛の叫び声。

二人の叫び声が聞こえた四人は振り返った。

「な、なに、アレ!？」

青髪のショートカットで、頭に鉢巻を巻き白い短パンで上は黒の服に白いダウンを着て居る。

両手にはグローブが付いていて、特に右手には機械的な物が付いているボーイツシュな女子が言う。

「何なのよ。アレは!？」

オレンジ色のツインテールで、先程の女子と同じような服装である。短パンじゃなくてミニスカートを履いていて、両手には銃が握られている。

「キュイイイイイイ!!」

という人間では出せないような、声が聞こえた。よく見ると、鳥に似た者が見えた。

正確には四人と一匹だった。

「エ、エリオくん。」

白いマントを羽織小柄な少女が、傍に居る少年に抱きつく。

「キャラ大丈夫だよ。」

力強く言う少年だが、体全身が恐怖のあまり震えていた。

得物を握るは、冷や汗でビツシヨリだった。

少年が握っている獲物は、槍でも特に突く事に特化した形をしている。

それは巨大な青い炎が浮いていた。まるで、鬼火みたいに…

なのはとフェイトは自分の得物を構え、俺は“アレ”を直視した。
二人もあの危険性を本能で感じ取ったのだ。

それは、上空に居る四人と一匹とネロも一緒だ。

ネロの額には一筋の汗が、ツーツと頬を伝って流れ、手には汗を握っている。

本能が叫ぶ「アレは、格上。オッサンと同格」だと本能が叫び散らす。

「ハッ！」

笑みを浮かべていた。

オッサンと同格？ 上等じゃねえか。

皆が直視している中、青い炎は消えた。
皆は安堵していた……只一人を覗いては、

「後か!!」

甲高い金属音が鳴り響いた。

ネロの持つレッドクイーンと相手の持つ大剣がぶつかり合っていた。

「何者だ。」

返事は全く帰って来ないどころか、

「く、ううううう!!」

押さえ込まれるネロ。

「カはオッサン並かそれ以上かよ。冗談じゃねえ!!」

「う、うおおおおおおお!!」

気合いと共に、押し返した。

いつの間にかなのはとフェイトの後ろには、ヘリから飛び降りた四人と一匹が居たが…

ネロとアイツ以外にまともに身体を動かせる人物はいなかった。

脳内で、危険警報がずっと鳴り響いていた。

二人の間にはある程度の距離が開いているが、一瞬にしてつめれる距離でもある。

ネロの全身に溜まった乳酸菌が一気に毛穴から汗とともに噴出した。

目の前に居る奴は、全身を鎧で固め大剣を持っている。
オッサンのリベリオンよりも大きい。

コチラに尋常じゃない殺気を放っている。
敵意を剥き出した。

なのに、奴を完全な敵思えない。
俺と同じ感じがする、不思議と親近感が湧いてくる。
こんな事は今まで生きてきて初めての経験のネロは戸惑っていた。

目の前にいる奴は敵だと認識しているが、それ以上に親近感がある。
同時に俺の中で眠る“悪魔”の魂が共鳴している。

奴と一回刃を交えた瞬間、俺の“悪魔の右腕”が震え、強烈に脈を打った。

俺の“悪魔の右腕”と関係があると確信した。

だが、それよりもネロは、

「Let's Rock!!」

魂から震えていた。

ダンテと同等の敵と戦える事に!!

いや〜なんとか更新できました。

ダンテ「坊やには、まだ早いな。」

作者「そうだろうな。」

ダンテ「まず、負ける。コレ決定。」

作者「ネロが勝てるわけないよな。」

ダンテ「勝てたら、ストロベリーサンデーを一年分送ってやるよ?」

作者「なぜに疑問系?」

ダンテ「今のまま”の坊やじゃ勝てないが、キレるとどうなるかわからない。キレた時の坊やは、相当厄介だからな。」

作者「経験者は、語るですか。」

ダンテ「そうだな。まあ、坊やの事だ。そう簡単には負けない。」

作者「どうなるかな?」

ダンテ「坊やには、いい刺激になるだろう。」

作者「いい刺激というか、強烈過ぎる刺激のようなきがします。」

ダンテ「hahaha! そうだな、最高のパーティーを
見せてくれよ。」

次回「圧倒」

タイトルは変わるかもしれませんが。

act10 Overwhelmed 〈圧倒〉 (前書き)

ネロは目の前に居る《黒き天使》に圧倒的な実力差を見せつけられる。

ネロは求める力を……キリエを“護る”為の力を……

今、ネロに眠る魂が目覚める。

act 10 Overwhelmed 〈圧倒〉

「こっから先は、R指定だ!!」

目に止まらない速度で何度もぶつかり合う《レッドクイーン》と《ヤマト》。

激しい攻防戦を繰り返していた。

ネロは攻撃の度に《イクシード》を発生させて威力を高める。そうでもしないと、まともに打ちあうことが出来ない。

ネロとネロ・アンジェロの実力の差は天と地。

幾らネロが《イクシード》を発生させたからといっても、差は其処まで縮まらない。

《イクシード》は只斬撃の威力と攻撃範囲を高めるものだ。

それだけでは、実力の差は縮まらないという悲しき現実。

ましてや、《ブルーローズ》の弾丸が殆ど効果がない。

鎧には傷という傷が付かず、簸るませる事も出来ない。

ネロは極力ネロ・アンジェロの一撃をまともに受けないようにしている。

最初の激突の時に、力の差を一瞬にして理解した。

その為、ネロはネロ・アンジェロの一撃を受け流すか、最低限の回避を行っている。

「な、何なのよ。あの二人は!!」
ティアナが叫ぶ。

だが、誰も返事は返せない。誰もがティアナの言いたい事を理解で

きた。
まさに規格外。

「グルルルルル!!」
フリードは警戒心を丸出しで、今にも飛び掛りそうな勢いだ。

「フ、フリード落ち着いて!! あんな所に行ったら、死んじゃう
!」
キャラロは目に涙を溜めて、フリードを落ち着かせていた。

「す、スゴイ!!」
スバルとエリオだけは、二人の戦いに魅入っていた。
二人の目はキラキラと星が見えるのは気のせいではない。

(フェイトちゃん。)

(なのは。あの銀髪の青年と黒い鎧の騎士。)
二人は念話で話をしていた。

(うん。私達じゃ手を出せない。)

(手を出しても、適わないし……介入なんてしたら)
フェイトは一度息を飲んで、

(死ぬ。)

目の前で繰り広げられている戦いは、全くの別次元。
自分達じゃレベルが違いすぎる。

コレを見ている者にはある共通点があった。

全身が震えている事だった。

「このバカ力が!!」

まともに打ちあつても、やはりネロ・アンジエロの方が力が上。
レッドクイーンを握っている左手が痺れる。
しかも、受け流す時も衝撃が半端じゃない。

「こ・の! 髭オヤジ2号!!」

ふと頭に浮かび上がった言葉をあげながら、気合で一撃を弾き返した。

「鉛玉の熱い二段キスは、欲しいだろう。くれやらあ!!」

ゼロ距離で顔面にブルーローズを一発、計2発をぶち込んだ。
兜には罅一つ無いが、流石ゼロ距離射撃、衝撃は半端じゃないよう
だ。

ネロ・アンジエロの身体が左右に揺らぐ。

「効いただろう。俺のゼロ距離二段キス!!」

ドルウン! という轟音が鳴り、《イクシード》を発生。

「コツチも受け取れえええええい!!」

殆どゼロ距離でホームラン二段斬り。綺麗な放物線を描きながら宙
を舞い、地面に落ちる。

それでも、ネロ・アンジエロは何事も無かったように起き上がる。

「Damn it……」
と呟いた。

手応えはしつかりと感じ取れた。なのに、アイツはマジで何事も無かったように立ち上がる。
まるでダンテと戦っているような錯覚を受ける。

『FO!』

ネロ・アンジエロの姿が消える。

ネロはその場から立ち退く。

丁度退いた瞬間に、ネロが居た場所には《ヤマト》を振り下ろしたネロ・アンジエロの姿が合った。

「なら、これでも喰らえ!!」

ダッシュからの顔面ドロップキックを決めた。

避けられると思われたドロップキックは見事に決まり、ネロ・アンジエロの体は吹き飛ばす。

「まだだ!!」

直ぐ様ダッシュして、追いつき左手で足を掴み引き寄せて。

「ラアアアアアア!!」

ボロ布で隠している“悪魔の右腕”で、顔面を殴りつけて地面にめり込ませる。

ネロはマウントポジションをとり、“悪魔の右腕”で顔面を殴りつける。

何回も何回も殴りつける。

地面には小さい亀裂が入り、殴る度に亀裂が増えていく。

もうネロは殴る殴る殴りつける。

「フン！ ハー！！」

拳を力一杯握り締め、渾身の一撃で殴る。

今まで一番大きな亀裂が入る。

「終わったか……」

動かなくなったネロ・アンジェロを見てそう言ったが、胸に引っ掛かるモヤモヤしたものが消えない。

「物事なんてそう簡単に進むわけないか……」

全身に電撃が流れるような悪寒が走った。

瞬間、体全身に物凄い衝撃来た。

吹き飛ばすネロだが、受け身を取ったお陰でダメージは最小限に止めることにできた。

「まるで、トリガーバーストTBだな。」

目の前には、全身から青い炎を放出しているネロ・アンジェロの姿があった。

更にネロ・アンジェロを中心に突風が吹き荒れている。

容易に近づく事ができない。

「面倒な……」

武器をブルーローズに切り替えて、一発試し打ちをした。

二発の弾丸は届くことは無く途中で失速し、地面に着弾した。

ネロはブルーローズの空薬莢を投げ捨て、すぐに懐からクイックローダーにはまった弾丸を装填する。

その後ブルーローズからレッドクイーンに武器を切り替えて、《イクシード》を発生させる。

《イクシード》を限界まで貯めて、レバーを弾いてストックする。ネロは反撃に備える。

突風は止み、二人の間に沈黙という名の静寂が流れる。

此処からがアイツの本気だと、ネロは直感で理解した。もう今までのようには行かない。

本当の戦闘が始まる。

「!?!? くお!?!」

ネロはネロ・アンジェロの姿を見失い、気づいたときには懐に入られていた。

《ヤマト》の凶刃が鼻と目の先に迫っていた。

ギリギリの所で避けれたが、剣先が頬を切った。

切り口から血が流れ唇に触れる。

ネロはそれを舐める。

「コレが、本気が……」

ネロの方も雰囲気ガラリと変わり、目の前の獲物を“狩る”目から“殺す”目になった。

地面を滑るようにネロ・アンジェロに向かって突進する。

「crazy!!!!!!!!!!!!!!」

切り払い、更に身体を回転させ三段回転切りに持って行く。

「頑丈過ぎんだろう。お前!!」

《ヤマト》の刀身で全てを受け切った。

『V O O O O O!!』

「くうう!!」

ネロ・アンジェロの切り上げをレッドクイーンの刀身で受けた。全身に衝撃が襲い、体が宙に浮く。

ネロは直ぐに体が浮いた瞬間に、レッドクイーンを盾にするように構えた瞬間。

「うお!!」

まだ、列車に轢かれた方がマシだと言いたくなるような衝撃が襲い、

「かはッ!!」

ネロの体は物凄い速さで地面に叩きつけられた。肺に溜まっていた酸素が、全て口から排出された。

一瞬の酸素不足に襲われ、思考回路も一瞬だけ停止する。

その一瞬が命取りになる。

ヤマトの凶刃が目前にあった。

凶刃は、ネロを斬る事は無く空と地面を斬った。

「死ぬかと思った。」

ネロは本当にギリギリの所で避けていた。
0.001秒でも遅かったら、今頃ネロの身体は真っ二つになって
いただろう。

「タイムアウトをくれよな!!」
顔を狙ったストレートパンチを避け、

「Ha-Ha!!」
ネロのカウンター気味の右ストレートが決まる。

「Yaaaaahooooowoooo!!」
まるでダンテが叫びそうな言葉を叫ぶネロ。
ワン・ツーからのボディブローが決まり、

「Go down!!」
捻りを加えた右ストレートがネロ・アンジェロの顔面に突き刺さる。
ネロ・アンジェロは身体を仰け反らした。

「これで終わりじゃねえ!!」
背後に周り、腰から手を回してジャーマンスープレックス。
綺麗なブリッジを魅せる。

「もう一丁!!」
ネロはブリッジの体制から地面を蹴り上げ、回転しまたジャーマン
スープレックスを決めた。
ホールドを解除したネロは、顔面に向かってドロップキック。

ネロ・アンジェロの体は派手に吹き飛んだ。

直ぐにムクつと立ち上がった。

「少しぐらいダメージがある素振りぐらい魅せてくれよ。気が滅入るぜ。」

あまりダメージが入ってない事に落胆する。

それでもネロは口元を吊り上げて笑っていた。

まるで、新しい玩具を目の前にした子供のような笑顔だ。

「最高だ。そのガッツ！」

何よりも嬉しかった。

自分よりも格上の奴と殺り会える喜びを感じていた。オッサンに戦いを申し込んででも軽くあしらわれるだけで、戦闘をしても俺を子供扱いしながら戦う。

それに比べて目の前の敵はどうだ？ 本気で俺を殺しに来る。

今まで以上に無い刺激だ。

ネロ自身気がついてないが、完全にダンテの影響を受けまくっていることに、

体中からアドレナリンが溢れ出ていた。

今のネロの状態は気が高まった興奮状態である。

ネロ・アンジエロは一瞬にしてネロの背後に周り、薙ぎ払う。

それを屈んで避ける。

頭上を《ヤマト》が通り過ぎる。ネロは身体を左方向に捻りながら、レッドクイーンで薙ぎ払う。

手応えをしっかりと噛み締め、更に連続して斬りまくる。

相手は怯みはするが、鎧が邪魔して決定的な一打を与えられない。

「なら！」

“悪魔の右腕”でボディブロー。

からのレッドクイーンの剣先で、ボディブローを当てた所を突く。その後は、また“悪魔の右腕”でボディブローまた次にレッドクイーンの剣先で突く行程を繰り返した。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

鎧の腹部に罅が入り、大きくなつていく。何回目かのボディブローで一部分が欠けた。

今だ！ ネロは身体全身を限界まで捻りあげて、

「ぶつ壊れる！！」

ボディブローが炸裂。

此処一番の怯み具合を魅せる。

ピキ！ という音が聞こえた後。

鎧の腹部が砕け散り、腹部が現わになる。

好機と見たネロは、腹部目掛けて突き刺す。

手応えはあるが聞こえた音がおかしい。

普通なら肉を裂くような音が聴こえるはずなのに、そんな音は全く聞こえない。

聞こえた音は、剣と剣がぶつかりあった金属音だった。

「んな！？」

《ヤマト》に防がれていた。

更にネロを驚愕させる事が起きた。

「そりゃあ、反則だろう。」

破壊された腹部が再生した。

さつきみたいなのは何回も狙えるものじゃない。

只運良く事が進んだだけ、その事を理解しているネロは苦虫を噛み潰した表情を見せていた。

だが、相手は待つてくれない。

避ける事に専念する。

クソが！ さつきよりも太刀筋が鋭い。絶対さつきより一撃が倍近く上がってるぞコレ！！

もうこんな斬撃をレッドクイーンで防御する分けにはいかない。

レッドクイーンの刀身は、何度もアイツの一撃を受け、あの異常過ぎる硬い鎧を斬りまくった。

レッドクイーンの刀身が悲鳴を上げているのは目に見えていた。

今の状況は圧倒的に不利。

こっちは生身の人間を更に頑丈にしたような感じで体力は無尽蔵にあるわけじゃない。

対してアッチは“悪魔”だ。

悪魔は疲れることを知らない、殆ど無尽蔵な体力を持つ。あのオッサンですら殆ど無尽蔵に近い体力を持っているんだから、完全な悪魔の体力がそう簡単に切れるわけがない。

故にネロの体力は相当消耗していた。

呼吸も大分荒くなってきて、よく見ないと分らない程度だが、呼吸をする度に肩が微妙に上下に動いている。

動きもさつきよりも鈍い。

体が思うように動かねえ。

絶対に体が鈍ってらあ〜こうなるんだっいたら意地でも毎日オッサンに勝負をしてもらえば良かったと後悔している。

だが、戻らない。

「Shit!!」

ネロ・アンジェロの一撃を避けようとしたが疲れた身体が反応を0.1秒鈍くしてしまった。回避は絶対に無理だと悟ったネロは、レッドクイーンを盾代わりにした。

瞬間、ネロの猛攻に終わりの鐘が鳴り、ネロ・アンジェロの猛攻の鐘の音になった。

『VOOOOOOOFOOOOOO!!』

ネロ・アンジェロの渾身の一撃をまともに、《レッドクイーン》の刀身で受けてしまった。

「がッ!!」

衝撃は物凄く、トラックに突進された方がまだマシだと言いたくなるような威力である。

ネロの身体は、そこら辺に落ちてあるような紙屑のように吹き飛んだ。

やっとの事で、勢いは止まったが全身に痛みが走る。

そんな一撃を刀身でまともに受けて、《レッドクイーン》の方が無事なわけがなく。

ピキッ！ という音がやけにハッキリとネロの耳に聞こえた。

刀身には罅が入ってないが、刃が欠けた。

口の端から血がタラ〜と流れる。

それを吐き出した、

「まだ、もってくれよ！」

ネロ・アンジエロが炎に包まれた瞬間、

来た！！

ネロの真後ろに居た。

身体を捻り一撃を避ける。

《ヤマト》の一撃はネロの頭上スレスレを通り過ぎる。

「ウラアアアアアアアアアアアア！！」

“悪魔の右腕”が、ネロ・アンジエロの顔面に突き刺さった。

ネロは腕をそのまま振り抜いた。

まるで何かが破裂したような音が響く、ネロ・アンジエロは錐搦み回転をしながら吹き飛び、何度もバウンドしてやっと勢いが止まった。

だが、ネロの方にもダメージがあった。

パンチをもらう寸前に、斬るのは間に合わないと理解したネロ・アンジエロは蹴りを繰り出して。

そして、ネロのパンチが辺り振り抜いた瞬間に、蹴りを鳩尾にぶち込んだ。

ダメージの度合いでいうとネロの方が格段に上だった。

「やりやがって。」

兜に罅が走るが、割れるというところまでは入っていない。

疲れが回ってきて、パンチにもキレが見えない。

ネロはその事実到此処の底で悪態をついた。

「この右腕の一撃でも、鎧には罅を入れるだけで限界か……」
右腕の部分を強く強調した。

「いや違う。俺の限界はこんなもんじゃない！」
自分を奮い立たせるネロ。

幾ら疲れていても俺の力はまだまだこんなものじゃないはずだ！！

コレならまだ“あの時”の俺の方が強い！
クソツタレが！ まだだ、あの感覚を、オッサンと殺し合いをした
時と同じ感覚を！！ 糞爺を殺った時の力を！！

「ウオオオオオオオオオオ！！」
咆哮をあげ、自らを鼓舞する。

だが、敵はそんな事をお構い無しに反撃を繰り返す。

奴が武器を左手に持ち替えて、右腕を引いている。

俺は悪寒が走り、すぐにその場から離れた。

「！？」

今さっきまで立っていた場所にクレータが出来上がっていた。
奴の方を見ると、後ろに引いていた右腕を突き出していた。

初めて見る一撃にネロは、

「そんな隠し玉を持っていたのかよ。そういうのは、もっと早くに
魅せてくれよな。」

気が高ぶっていた。

「Shit!」
ネロは走った。

奴が右腕を後ろに引いては突き出し、後ろに引いては突き出しを繰り返してきた。

突き出しをする度に放たれる魔力の一撃。放たれた魔力の一撃は、触れたモノ全てを破壊するような一撃であり、速度も尋常じゃない。コレならサブマシンガンを至近距離で避けると言われた方が未だマシだ。

それを連続して放つという、無茶苦茶な技。

今のネロに対抗しうる手段は無いわけじゃないが、この“腕”を使うことになってしまう……“悪魔の右腕”を。

ネロにとっては、目撃者、しかも女性も居て子供も居る中で“悪魔の右腕”を使いたくないし、開放したくない。その気持ちはネロの大半を占めていたために、先程の殴った時のような事にしか使えない。

“悪魔の右腕”をフルに活用することが出来ない。

『hun! hun! hun! vo!』
叫びながら、一撃一撃を放つ。

避ける事に神経を注ぐネロ。

幾ら普通の人間よりも体が頑丈なネロでさえ一撃でも貰えば、即致命傷。死に繋がる。

それなら、無様でも良いから避ける事に全力を注ぎ、一瞬の隙を突く。

「What?」
いきなり、魔力の一撃を放つのを止めた。

「どういう事だ?」
だが、チャンスとばかりにネロは疾走する。

「Blast!!」
《イクシード》を発生させ、切り上げをしたが手応えを全く感じなかった。
ネロの一撃は虚しく空を切った。

「マジか?! お前も宙に浮く事が出来るのかよ。」
全身から青い炎を発生させて、宙を浮いていた。
更に、

「幻影刀……いや、違うあれは……」
ネロは信じられないものを見るような目で見ている。
ネロにはあの技に見覚えがあった……1年前の“あの事件”で戦った……キリエの兄であり、自分の兄貴分である《天使化したクレド》が使っていたのと似ていた。
ネロ・アンジェロの周りに魔力で生成した大剣というべき大きさの剣が12個浮いて、彼の周りを旋回している。
これは、《幻影刀》とは少し違う。バールとネロ・アンジェロが得意とした唯一の遠距離攻撃《幻影剣》である。

旋回を止めて、一斉にネロに標準を向けた。

「Voooooooooo!!」

という咆哮と共に一斉に発射。
その速さも相当な速度である。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

目前に迫る《幻影剣》をサイドロールで避ける。

案外容易に避けることが出来た、その訳は一斉に発射していた為、
避けるの容易かった。

「Be gone!! (失せろ!!)」

飛び上がり、《イクシード》を発生させ斬りかかる。

ネロ・アンジェロはヤマトで防ぐ。

「クタバレエエエエエエエエエエエエエ!!」

力を込めるネロは、左手から“悪魔の右腕”に持ち替えた。

「GUUUUUUVOOOOO!!」

おされ始めるネロ・アンジェロ。

“悪魔の右腕”だけの力なら、ダンテやネロ・アンジェロを軽く超える力を秘めている。

「Haaaaaa aaaaa aaaaa aaaaa!!」

「!!!!!!」

押し切られ、地面に衝突。

「まだまだ!!」

レッドクイーンの剣先を地面に衝突したネロ・アンジェロに向ける。

「Double Down!!」

ネロ・アンジェロに向かって急降下する。

『VROSUSHGABGSUSYSHB!!!』
意味不明な言葉を叫び、アッパーカット。

レッドクイーンの剣先とネロ・アンジェロの拳が激突。
まるで、手榴弾が大爆発しような音が周辺に響いた。

二人の身体は、激突した瞬間、同時に吹き飛ぶ。

なのは達は誰も踏み込む事も口を開く事が出来なかった。

目の前では自分達とは全くの別次元の戦闘が繰り広げられている。

この戦闘に身を乗り出す事は死を意味する……その事は生きる者としての生物としての本能が告げていた。

それは生物として伝説上の生き物である龍、アルザスのドラゴンも介入なんて事は出来なかった。

只二人に向けて最大級の警戒を施している。

二人のどちらかが主の、キャロに近づけば暴走をしかねない。

「ちっ！ コレでも無理か。」

左腕で左脇腹を押さえながら、立ち上がるネロ。

先程激突して吹き飛ばす時、ネロ・アンジェロは蹴りのオプション攻撃を加えていた。

体勢を崩していたネロは、身体を捻ってダメージを軽減する事も受け身をとる事が出来なかった。

(完全に骨が逝ってるな。)
ズキズキと左脇腹に激痛が走る。

右手に持ったレッドクイーンを杖変わりにして、身体を支える。

ネロは相手の方に視線を向ける。

アイツは何事も無かったように立ち上がり、コチラに向けて歩いてくる。

「ハハハハハハ……マジかよ。」
乾いた笑い声。

「ふざけんじゃねえぞ!!」

「ぐはっ!!」

一瞬にしてネロの懐に入ったネロ・アンジェロは、抑えていた左脇腹に強烈な廻し蹴りを決めた。

バキヤ!! という最も嫌な音が聞こえ、ネロの体は吹き飛ばす。
なのは達はその音が聞こえた瞬間、耳を押さえた。

骨が完全に粉碎された音だ。

「く・そ・がああああああ!!」

立ち上がるが、顔を俯かせて血を吐き出す。
血は赤黒い色をしている。

この色は、内臓に大きな傷があることを意味していた。

顔を上げて視線をアイツに向けるが、焦点が全く合わない。それでも分かる事が一つだけあった。

アイツは《ヤマト》を振り上げている事だった。

《ヤマト》はネロに向かって振り下ろされた。

(俺は死ぬのか?)

ネロの体に変化が訪れていた。

デビルトリガー
DTを発動していないのに、瞳が血のように紅に染まっていく。

ふざけんな！ 俺はこんな所で終わるのか？ まだ俺はキリエを…
…キリエを見つけてもいない。

キリエを置いて先に死ぬのか。またキリエを悲しませるのか？ キリエをキリエを“護れる”と決めた俺が死ぬのか。

気がつけば真っ白な世界が広がっていた。

ネロは辺りを見回すが俺と目の前居る“人物”以外誰もいない。

ネロは目の前の“男”を知っていたというか、見覚えが合った。

目の前の“男”とは何度か合っている、この世界で。

今あって何となく確信をもてた事が合った。

オッサンに似ている

その事だった。あまりにも似過ぎていた。

只違うと言えば、髭を生やしておらず髪型をオールバックに決めていた。

それ以外は殆ど似ていた。

目の前の男は訪ねる。

『力が欲しいか。』

「ああ、欲しい。」

『なぜだ。なぜ力を求める。』
目の前の“男”は聞いてくる。

「そんなの、簡単だ。“護る”為だ!!」
俺の答えを聞いた後、目の前の男は笑ったように見えた。

世界は強い光を放った。

俺は目の前に迫る凶刃を弾き返した。
しかも案外楽に弾けた。

力が溢れてくる。

ネロの瞳は、血のように紅く輝いていた。
だが、DTを発動した形跡はまるでない。

どういうことだ？ ネロは自分自身の身体を見直した。
それでも全く分らない。

それでも、一つだけ分かった事がある。

ゆっくりだが傷も徐々に塞がってきているし、魔力の消費がDTよりも何倍も緩やかになっている。
これはDT発動してないときとDT発動後の間位の強さだろうという検討は着いた。

「まあいい、今は目の前の敵をぶったたくー!!」
ネロは右手に《閻魔刀》があった。しかも、DTを発動したとき同じで覚醒した《閻魔刀》を握っていた。

act10 Overwhelmed〈圧倒〉 (後書き)

〈次回予告〉

ネロは“護る”為の力を手に入れた。

それは、ネロの中に眠るもう一つの“魂”が目覚めでもあった。

力を手に入れたネロは余りにも強く、とある姿を連想させた。

昔目の前で母親を殺され、力だけを求めた人物の姿を……

ネロの戦い方はその人物を連想させるのに十分な戦いを魅せる。

次回「ダークスレイヤー」

楽しみに待ってください!!

act 11 魔剣へ閻魔刀とヤマト (前書き)

皮肉も姿・形が変わっても同じ魔剣《閻魔刀》と《ヤマト》……

二つの《閻魔刀^{ヤマト}》がぶつかると……

これは、運命なのか定なのか誰にも分らない……

act 11 始まります。

act 11 魔剣〈閻魔刀とヤマト〉

俺は自分の装備を確認した。

右手には、《閻魔刀》。

そして左手には《閻魔刀》の鞘を握っていた。

似ても似つかない、ダンテの双子の兄バールと同じ戦闘スタイルだ。

この時なのは達は気づいていなかったが、ネロから二つのロストロギア反応が検出されていた……

一つは“悪魔の右腕”が取り込んでしまった《赤い宝石》と、もう一つはネロが握っている《閻魔刀》からだった。

刀身に限界が来ているレッドクイーンは納刀している。

ネロは《閻魔刀》を鞘に納めて、柄に手を添える。体中に入っている無駄な力を息を吐きながら抜いて、しっかりと脱力する。

まだ脱力に慣れていないネロだが、一応様にはなっている。

相手が一歩進んだ時、ネロは目を見開いた。

「Die!!!」

ネロは高速で相手に向かい突進し、強烈な斬撃を繰り出す。

これはバールが最も得意とした技の一つ《疾走居合》。まだまだバールが使っていたよりもキレ、威力、速度の精度は落ちるが、

それでも十二分に使える技の完成度ではある。
あまりの速さに、只一人を除いては誰も反応出来なかった。

甲高い金属音が鳴り響く。

ネロ・アンジェロは全ての“斬撃”を受け切った。

《疾走居合》にもう一つの特徴があった……それは、高速で近づいた瞬間に神速ともいえる速さで抜刀した後、神速の速さで連続斬りをしながら走り抜ける。

ネロの場合は抜刀も合わせて、3回までが限界だった。DTを発動したら、4回〜5回位は行くだろう。

それに比べてバージルの場合は通常時で、5回〜6回位で、DT発動だと7回〜8回位は行く。

ちっ！ まだまだ脱力しきれてなかった。

ネロは反撃を受ける前に、バックステップで下がった瞬間。

「は!？」

想像以上の速さで、しかも軽く20m近く離れた。

ネロは今一度自分の身体を見直した。

瞳の色は真紅に染まり、体中から力が溢れ出るがDT発動に比べたら低い。

しかし、魔力の消費が何倍も緩やかで、DT発動よりも遅いが、徐々に傷口が回復していつているのは分かった事だ。

ネロの傷が徐々に回復している事に、なのは達は誰も気付かない。

後は《閻魔刀》の力が覚醒している事……多分これだけじゃない。

ネロには今自分が瞬間移動のように後ろに下がった移動を見たことがある。

いふなれば、似たようなのを見たことがある。

それは今相手にしている奴が使う瞬間移動みたいなものと、オッサンのスタイルの一つ……《トリックスター》の中にある技の一つ……

エア・トリックに似ていた。

エア・トリックは一瞬にして相手の頭上に移動する技。

エア・トリックの相手から距離を取るバージョンだと思えばいいと、ネロは頭で理解した。

更にネロはとある仮説を立てた。

相手から距離を取る事が出来るって事は、逆に一瞬にして相手との距離を詰めることが出来るハズだ。

やる価値は十分にあるな。

「うおー！」

サイドロールでネロ・アンジェロによる《ヤマト》の一撃を避ける。今までは片手で操っていた《ヤマト》を両手で操っていた。

剣、刀、日本刀は片手で振るうより両手で振るったほうが、何倍も強い。

更に両手で振るっている為に今までとは比べものにならないほどの余波が襲った。

体勢を少し崩したが、耐えた。

ネロは視線をネロ・アンジェロに向ける。

「じょうだん……だろ!!」

地面に亀裂が入り、雲が真つ二つに割れていた。

だが、構えは片手持ちに戻っていた。

ネロ・アンジェロは敵を斬る時だけ、両手持ちにするのだ。もう、型なんてあつたもんじゃない。

「な!」

ネロの方に顔を向けた瞬間、もう目の前にいて《ヤマト》を振り上げていた。

ネロは瞬時に身体をそらして、避ける。余波を受けて、少し体勢を崩す。

好機と見たネロ・アンジェロは《ヤマト》で横一闪。

「わお!!」

綺麗な曲線を描くブリッジで避ける。寸前の所を凶刃が通る。

ネロの額から汗が地面に落ちる。

「Haaaaaa!」

ネロは身体を起こす勢いを利用して、切りかかる。

ネロ・アンジェロは《ヤマト》で防ぐ。

甲高い金属音が鳴り響いた。ネロ・アンジェロは衝撃を殺しきる事が出来ず、後退する。

「Bang!!」

顔面に向けて、一回の引き金を引く。

計二発の弾丸が顔面に直撃と同時に、一つの湾曲した刃がネロ・アンジェロの鎧に突き刺さる。

「幻影刀……最高だ!!」
一瞬惚けたが、笑みに戻った。

「ヤツパリ効かねえか。」
ブルーローズの弾丸も、幻影刀も鎧には傷一つ付けられていなかった。
ブルーローズをガンホルスターに戻す。

「You are wrong (違うよな)」
ネロは《閻魔刀》を納刀し、それを地面に突き刺す。
そして、右腕を前に突き出し、左手で手首を抑える。
掌には渦巻くようにして魔力が集まりだす。

「My power is still such a thin
g Janee!! (俺の力はまだまだこんなものじゃねえ!!)」
掌には一つの湾曲した刃…幻影刀が生成され、高速回転を行っている。
る。

幻影刀の大きさが尋常じゃなく大きい……《閻魔刀》とそう変わらない大きさ。

「Get us much!! (くらいやがれ!!)」
ネロ・アンジエロに向けて投げた。投げられた幻影刀は高速回転により、大気を切り裂きながら突き進む。
ネロ・アンジエロは避けるような動作を全く見せないどころか、一歩一歩幻影刀に近づき……直撃。

「How about this guy (どうだこの野郎)」
鎧を切り裂いていたが、本体までは達していなかった。

「Damn it……」

傷つた部分は少しづつ再生していく。

ネロは地面に突き刺した《閻魔刀》を抜き取り、高速で近づく。

「You shall die!!」

抜刀十字一閃。鎧には十字の傷が出るが、本体には届かない。

ネロ・アンジエロはネロに向かって切り上げをする。ネロは、《閻魔刀》で受けるが、体が少し宙に浮く。

ネロ・アンジエロは《ヤマト》を左手に持ち替えており、右腕を後ろに引いていた。

コレが何を意味するのか瞬時に理解したネロは、《閻魔刀》を納刀し右手を柄にそえた。

「VO!!」

右腕が突き出され、青く巨大な魔力弾がネロに向かって発射。魔力弾がネロに当たる寸前で、

「シッ!!」

魔力弾は真つ二つに切り裂かれ、ネロを通過した。

ネロは体勢が悪いまま、一瞬にして抜刀し納刀した。その一瞬の内に魔力弾を真つ二つに切り裂いたのだ。

まるで、バージルの抜刀術を思わせる。

ネロは地面に着地し、《閻魔刀》の峰で肩をトントンと叩きながら、

「Com、n Stupid（来いよ。ウスノロ!!）」

左手で手招きをする。

「VO!!」

という言葉と共に、一瞬にしてネロの目の前に現れる。

【お前の中に眠る魂の一部を開放してやったのに、この様とは何だ！！ 何が“護る”力だ！】

(え!?)

ネロの頭は困惑した。

今、何て言った。【俺の力を引き継いだ。】【魂の一部の開放】

【“護る”力】それに、聞いたことのある声。

ネロの頭の中で全てのピースが当てはまる。

(もしかして、あんたは。)

【そう、俺はお前の中に眠る“悪魔”でありもう一つの“魂”だ。】
予想通りの返事が帰ってきた。

【坊や、一つだけ言うぞ。遠慮をするな思いつ切り殺れ。】

(は!?)

予想を斜め上に行く言葉だった。

【じゃあな。】

(お、おい！ 待てよ！)

返事は帰って来なかった。まるで、ダンテみたいに言いたい事は言
って消えた。

「一体何だったんだよ！ 今のはあああああああああ！！」

『!?!?』

怒り爆発のネロは、力任せに持ち直して押し返した。

「え!？」

その事に一番驚いたのはネロ自身だったりする。

ネロはまたまた再度自分の身体を確認する……先程と全く変わったところなんて何一つもない。

なら、なんで？

まあ、そんな事は今はどうでも良い!

「Slay!! (切り殺す!!)」

ネロは一步目でネロ・アンジェロに接近し、二歩目で懐に潜り込み、三歩目で踏み込み切り上げる。

ネロ・アンジェロの体は宙に浮く当時に、鎧が太刀筋の軌道通りに斬れた。

今まで全く斬る事が出来なかった鎧を斬った。

「Die!!」

ネロは一瞬にして、空中浮いたネロ・アンジェロの目の前に出現し薙ぎ払う。

鎧は縦に斬られ、吹き飛び地面に激突。

視線を空中に居るネロの方に向けると、

「何処を見ている。ウスノロ!!」

一瞬にして、ネロ・アンジェロの背後に移動して、

「Cut Off! (斬る!)」

疾走居合。

最初にやった疾走居合よりも手数が一回分多く、脱力を殆ど完璧に出来ていた為に……

パキーン! という音を立てて、鎧が切り落とされた。

残っていると言えば、顔と下半身部分だけだ。

ネロは現わになった胴に向けて、《閻魔刀》で切り払う。

「しぶとい！」

ネロは吐き捨てるように言う。

《閻魔刀》の一撃は《ヤマト》で防がれた。

「マジでそのパターンは飽きるぜ。」

鎧が徐々に再生を始めた。腰部分から少しづつ再生してきている。

ネロ・アンジエロは腰を低くして、身体を捻って……まるで、力を溜めているようだ。

ヤバー！

ネロは直感で危険だと理解した時には、もう目の前寸前に居り《ヤマト》の凶刃は左から切り払うようにしてすぐ其処まで来ていた。

間に合え！！

エア・トリックを使い背後に立つ。

《ヤマト》の一撃は空を切ったかに思えた。

しかし、ネロの左脇腹から大量の血が流れ出た。

ネロの左脇腹に《ヤマト》の凶刃は触れていた。

ネロは斬れた部分には余り痛みを感じないが、左脇腹事態には痛みを感じていた。

それは、《ヤマト》の凶刃の切れ味を物語っていた。

普通、大剣という物は、相手を“叩き斬る”武器であり相手を“斬る”武器では無い。

その為、大剣で“叩き斬った”物の断面は雑である。

故に之程綺麗な傷口は有り得ないのだ……“普通”の大剣ならの話だ。それでも、例外はある。

それが、ダンテの使う《反逆の名を持つ魔剣》《リベリオン》だ。

それと同じである魔剣マヤマトの元々の姿は《魔と人を分かつ魔剣》《閻魔刀》なのだ。

切れ味が物凄いのは当然である。

ネ口の傷は少しづつ回復を見せるが、回復デビルトリガーがD.T発動よりも何倍も緩やかな為、まだ砕かれた左側の肋骨が治りきっていない所に《ヤマト》の凶刃。

左脇腹の痛みは先ほどよりも増してくる。

ネ口は痛みで顔が歪むも、今は攻撃の絶好のチャンスでもある。

「H a a a a a a a a a a a a a a a a a ! ! !」

渾身の力で袈裟切り、バツサリと肩から腰にかけて切り裂いた。

背中から“真っ赤”な血が噴出する。

「え?!」

ネ口は信じられなかったというより、訳が分からなくなった。

何で悪魔から“真っ赤”な血が噴出するのか……悪魔には“真っ赤”な血は流れていない。

流れているとしたらダントカ人間の血を媒体にするブラッド・ゴイルしかない。

それなのに、目の前に居る《悪魔》は“真っ赤”な血を流している。

ネ口は明らかに動揺する。

敵はそんな事はお構い無しに、

「ぐふ!!」

回転廻し蹴りを切った左脇腹に叩き込む。

なのはとフェイトは両手を使って、ティアナとスバル・エリオとキヤロの目を隠した。

こんなを見せるわけにはいかない。そう思っただの咄嗟の行動でだった。

とは言っても、なのはとフェイトはモロに見てしまい、顔を青くした。

少しづつ再生していた所に、強烈過ぎる回転廻し蹴り。

ネロは口から血を吐き出しながら、錐揉み回転し吹き飛んだ。

その際、握っていた《閻魔刀》を手放してしまい、回転しながら地面に突き刺さる。傷口から白い破片が数個飛び散った。粉碎された左肋骨だ。

地面に落ち、転がりながらやっと勢いが止まった。

立ち上がるうとするとうと、

「ぐ！ おおおおお！！！」

ドババババ！！ という音を立てて傷口から大量の血が流れ、口からも血を吐き出した。

それでもネロは、気合で立ち上がった。体が左右に揺れる。

「血を……流し過ぎたか。」

息使いが荒く、顔色は悪い。

ネロはレッドクイーンを地面に突き刺し、杖代わりにし揺れる身体を支えた。

幾ら傷が回復しているとはいえ、流石に血だけは増やすことが出来ない。

ネロの体は“人間”と変わりない。

食事をしないと体内で、血を生成出来ない……もし、身体が“悪魔”だったら別かもしれないが、ネロは“人間”であり、右腕だけが“悪魔”なのだ。

(た、助けにいかなくちゃ！)

なのはは頭で理解しても体が震え、金縛りにあつたかのように動かない。

それは、他の皆も同様だった。

それは“恐怖”により、体が金縛りにあつていた……ネロ・アンジエロという存在に“恐怖”という概念を感じていた。

それはデバイス達も同じでもあつた。

機械だから感情は無いと思われたが、“恐怖”を感じていた。

ネロ・アンジエロはそこら辺に居る上級悪魔とは格が違いすぎる。

上級悪魔でも腹心・重臣でも格が違う……ネロ・アンジエロとはそんな存在。

“恐怖”を感じ無い方がおかしかった。

ネロは“悪魔の右腕”を前方に突き出すと、《閻魔刀》が回転しながらネロの元に飛んで行き、右手に納まった。

地面に突き刺したままのレッドクイーンのグリップを捻る。

ドルウン！！ 轟音がなり、刀身は悲鳴を上げる。レッドクイーンの刀身はもう限界を超えて、もう壊れてもおかしくない。まだ、壊れていないのが奇跡というものだった。

レッドクイーンを支えていたのは、相棒とまだまだ戦いたいという気持ちかも知れない……それはレッドクイーン以外には分らない。

act 11 魔剣へ閻魔刀とヤマト (後書き)

ふう〜やっと更新が出来ました。

もうコレで、コッチの怒涛の更新激は終わります。
精魂を使い果たしました。

少しの間コッチは落ち着きます。

もうストックがありませんし。

多分コッチの更新は今月末か4月の初め頃に来たらいいなっ
て感じです。

それでは、次会を待て!!

ダンテ「そろそろ、俺の出番もくれよ。Partyの参加に遅れち
まってるぜ。」

作者「まあ、そろそろダンテを出したいと思います。4のダンテだ
と良いけどな。」

ダンテ「おいおい、それはどっいう意味なんだ？」

作者「後々分かるよ。」

バイなら

act 12 Froce〈機動六課〉(前書き)

なんとか更新しました。

今回は戦闘シーンはありませんが、ちょっとシグナムとヴィータの扱いがひどいかもれません。

まあ、騎士にとってネロは得体のしれない人物ですからね(笑)

今回は戦闘シーンあります。

では、はじまりはじまり。

拍手。パチパチパチパチパチパチ！！

act 12 Froce 〈機動六課〉

俺は暗闇の中を浮いていた……

只浮いていた……

「キリエ！ 逃げる！！」

暗闇の中、俺が最も愛する女性の名前と聞き覚えのある声が聞こえた。

『あれは……』

目の前には見覚えのある光景が広がっていた。

二年前の出来ごと……

俺の右腕が普通じゃなくなった……

『悪魔の右腕』になるキツカケの出来事……

『悪魔の力』を手に入れる事になった出来事……

俺の人生を180°変えた出来事……

キリエは子供達の盾になるようにして覆いかぶさっている……

『SHAAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

アサルトが咆哮を上げ、爪を突き出してキリエ達に向かって放たれる。

「キリエエエエエ！！」

叫びながらキリエとアサルトの間に飛び込む、昔の俺……レッドクインで防御をするには、もう間に合わないと分かると否な俺は、まだ生身だった頃の右腕で防いだ。

「ネロ！」

悲痛な表情で叫ぶキリエ。そんなキリエの表情を見た。宙に浮いている俺は齒ぎしりをした。

「ぐううう！」

右腕にはアサルトの発射された爪が、刺さり貫通する。激痛で顔を歪ませながら、ブルーローズで攻撃。

アサルトは左腕に付けてある楯で防ぐ。その時アサルトは動きを止める。

その瞬間を狙っていた俺は、《ストリーク》で斬り飛ばす。アサルトは鮮血をまき散らしながら放物線を描き宙を舞い、地面に落下した。

それから、ピクリとも動かなくなった。

只、消えてはいなかった。

これで終わり武器を収めた……

俺はアサルトが死んでいるのを確認しなかったのがいけなかった。

ドスツ！　と言う音が俺の腹部から聞こえた。

視線を腹部に向けた……其処にはアサルトが発射した爪が飛び出していた。その事が頭で理解した瞬間、腹部が燃えるように熱くなった後に、腹部に強烈な激痛が走った。

俺はアサルトの方にブルーローズの銃口を向けると、アサルトはもう事切れていた。最後の悪足掻きか……

其処で昔の俺の意識は闇に沈んだ。

意識が無くとも俺は願った……

力が欲しい……

俺の魂が力を求める……

彼女を……キリエを護る為の力が欲しい……

絶対的な力が……

その為なら悪魔にでも何にでもなつてやる……

だから、キリエを“護る力”を……

そう願い続けた時、意識が闇の中で目の前に銀髪の男性が現れて、俺の右腕に触れた。

そんな事を願っていたから、『右腕が《悪魔の右腕》になつちまつたんだよな。』

暗闇の中、俺は右腕を見つめながら呟く……

いきなり強い光が暗闇を照らす。

俺は強烈な光に目を瞑り、腕を覆いかぶさつた。

光が止んだ……

暗闇だった世界が真っ白な世界に入れ替わつた……

目の前から一人の男性が歩いてきた。

『アンタは……』

あまりにも見覚えのある男性……

俺に《悪魔の腕》をくれた男性。名も分らない、だがオツサンに似ていた。

多分、ヒゲを生やしてオールバックにしてある髪を降したら、オツサンと瓜二つだろうな。

男性は沢山の小さな光の粒となり、ネロを包み込んだ。

真っ白な世界はガラスのように罅割れ、崩れた。

其処でネロは目を覚ましたが、まだ頭が目覚めていない。薬品の匂いが鼻を刺激する。

薬品の匂いにより完全に脳が目を覚ました。

ベッドから身体を起こして自分の身体を見ると、入院したときの病院服をきていた。身体全身の傷が治療されていたが……左脇腹の方は包帯が巻かれており血が少し滲んでいた。未だに治っていないのが分かる。

それにまだ相当な痛みが残っている。

更に左腕には点滴の針が刺されていた。

(まだ、巻きついていたのか……)

森の中で拾ったボロ布が《悪魔の右腕》を完全に見えなくするようにならされたままだった……まるで吸い付いているかのように、巻かれている。

そんな事は特に気に止めなかった。只、右腕を見られてないかが心配だった。

ネロは顔を彼方此方に向けてこの部屋を見渡す。棚には薬品や消毒

液など様々な薬品が並べられており、そのとなりの棚には包帯や絆創膏などあった。

（此処は医務室なのか……）

ベッドから降りて、窓を開けて外を眺めると、近くに海があるのが見え夕陽により少し海がオレンジ色になっていた。

更に、廃墟と化したビルが沢山並んでいるのが見え、其処から色々な色の光が飛び交っているのが見えた。まだ向こうには近未来的なビルがそびえ立っていた。

だが、そんな事よりも……

（俺は教会みたいなのを目指すために、森を抜けたはずだよな。まあ其処で色々あったが……何だ此処は？）

その森が見当たらないし、森らしい森も見当たらない。どちらかと言うと、近未来……その言葉が脳裏をかすめる。

考えても検討がつかないネロは、窓から離れてベッドに腰掛けた。

（身体が怠い。）

さっき起きた時から、非常に体が重く感じ怠い。こんな怠いのは初めての事だ。

（疲れているのか？ 寝るか。）

ベッドインしたネロは、目を閉じて睡眠に入った。

さっきまで寝ていたのに案外とすんなり意識は底に落ちて、睡魔に身を委ねた。

夢を見ていた時のネロの表情は子供みたいに警戒心を解いた無邪気な笑顔だった。

時折「キリエ」と寝言を言っていた。

「アンタ等誰だ？」

それが俺の第一声だった。

翌日、起きたら目の前になのはとフェイトという人物は居たが、他にも茶髪のショートヘアの女性に金髪ボブカットヘアの女性に後は、殺気を向けているピンク色の髪でポニーテールにしている女性と三つ編みのリトルガールが居た。

「そつやな、ほな自己紹介でもしようか。うちは、古代遺物管理部、機動六課部隊長の八神はやてです」

喋り方に少し訛りある。握手を求めるように右手を差してきた。ネロはそれに応えようとはしなかった。もし、差出してきた左手だったら違うかもしれない。

「What？」

（部隊長って冗談だろ？）
と露骨に顔に出ていた。

「よろしゅうな。」

無理矢理ネロの右腕を掴んで握手をした。ネロはあまり心地よくはなかった。

一々気にしていても仕方がないと思ったネロは、切り替えた。

「それはそうと、何で右腕に布なんて巻いとるん？ 怪我しとるんか？」

はやては、握手に応えなかった事を気にしてか聞いた。もし、怪我だったら無理矢理握手をしてしまったから悪い事をしたんじゃないかと感じたからだ。

「怪我みたいなものだな。」

「ごめんな。」

頭を下げるはやて。

「はやて、こんな正体不明の人物に謝ることなんてねえ！」
殺気剥き出しのリトルガールが言い放つ。おいおい、酷い言われようだな。

「ヴィータ、そんな事を言ったらあかんで。」

それを母親のように優しく言う。

「はやて……」

「ごめんな。うちのヴィータが。」

また頭を下げるはやて。

「いや、気にしてねえよ。」

そういったネロにはやては何かを言おうとしたとき、

「アンタ等、昨日と服が全く違うな。」

ネロがなのはとフェイトの二人に指を差して、率直な意見を言った。

「昨日のあれは、戦闘だったので防護服を着ていたの、今はそんな事はないから制服なの。」
「なののが答えた。」

「そうか」

(マジかよ。あんなのコスプレだろ。)
そう思わずにはおれなかった。思わず頭を押さえた。

「昨日は助けてもらってありがとうね。」
「なのはは、人懐っこい表情をしていた。」

「たまたまだ。」

外方を向くネロ。キリエからありがとうと言われるのは慣れているが、キリエ以外の人からお礼を言われえるのは慣れてはいなかった。

更に言えば、相手は女性である。尚更慣れていない。

「あの……お怪我の方は大丈夫ですか？」
「恐る恐るといった感じにフェイトが口を開いた。
なんとなく分かった。左脇腹の事だろう。」

「ああ、こんな傷とつくに治っている。」
「実際はまだ治り切っていない、骨が完全に再生されていない。」

「……そうですか。」
「納得しきれていない表情をする。それも当然、左肋骨は完全に粉碎されており、バツサリと斬られていたのだ。
ネロはそんなのは無視して、はやての方に視線を移した。」

「で、一体俺に何の用なんだ。こんなに人が集まっているんだ、俺に用があるんだろう。」

「貴様、主はやてに危害を加えたら許さんぞ。」

ピンクポニーシグナムがはやてを庇うようにして、声を上げる。

大事なんだろうなこの、はやてっていう人物が……俺で言うときり工みたいな存在か。

何となく分かるな、この二人が何で俺に殺気を放っているのかが、大切なんだな。このはやてっていう存在が……

だが、今はそんな事は関係無い。

「おいおい、こんな状態の俺に何ができるんだ？」

そう、今の俺には武器も無く怪我人でもある。それに、結構な腕を持つ人物も多々居る。

今の俺だと返り討ちにあう。

「そう言われたらそうだな。」

ネロの言葉に頷き、引き下がるピンクポニーシグナム。

「で、何の用なんだ？」

「ネロさんは、《アンノウン》に対して、「俺等の専門分野」って言ったよね。」

「まあ、言ったは言ったが、そのさん付けは止めてくれ、虫酸が走る。」

露骨に嫌そうな表情をする。

「でもなあ、うちらより歳上やろ。」

困ったような表情をするはやて。

「ううゝはやて
うなるヴィータ。」

「《アンノウン》は見境なしに人を殺戮をするんや。お願いや。」

「まあ、そうだろうな。アイツ等は“破壊”と“殺戮”を繰り返し、人間の“恐怖”に染まった姿を見るのが好物の最悪な奴らだ。今から言う事俺の話信じるか信じないかはアンタ次第だ。アンタラが言う《アンノウン》っていうのは《悪魔》だ。」

坦々と俺は告げた。

『あ、悪魔！！！！！』
全員が全員、声を張り上げた。

「貴様、ふざけているのか！！」
シグナムはネロの胸倉を掴み上げる。

「俺に言わせたら、人間が宙に浮いて駆け回る。アンタラ本当に人間か？俺に言わせたらアンタラの方がふざけているようにしか見えないな。」
お構い無しに言いたい事をドストレートに言うネロ。

「侮辱するか！！」
その言葉がシグナムの感に触ったようだ。一気にシグナムの血が頭に登った。

「ああん。殺るって言うのか。」
ネロは一瞬だが、本気に近い殺気を放出した。シグナムは歴戦の騎士としての本能が反応して、ネロとある程度の距離を保って、相棒

のデバイス《レヴァンティン》を起動させて構える。

ヴィータもシグナムの隣に並び、デバイスの《グラーファイゼン》を起動させて構えている。ヴィータもシグナムと同じく、ネロの殺気を感じ取り警戒心を更に強めた。歴戦の騎士としての本能が叫ぶ【目の前の敵を排除しろ。主に被害が及ぶ。】と何度も本能が叫び散らす。

ネロの殺気は、この医務室に来て居る全員がネロの殺気を感じ取ったが、只この中の数名は警戒心なんて物はなかった。

この場の空気が一気に氷点下まで落ちた。

シグナムの掌には汗が吹き出る。もう直感で感じてしまった……此処で戦闘を行えば、惨劇になる。

最低でもこの中に居る何人かは、命を落とすと理解をしてしまった。

「シグナム。ヴィータ。」

ゴツンッ！ と痛い音が医務室内に響いた。シグナムとヴィータが頭を抑えていた。

はやてが、シグナムとヴィータの頭にゲンコツを落としたのだ。これには、流石のネロも引いた。ネロの表情からは「うわ〜痛そうだな」ってというのが読み取れる。

「ネロ。ごめんな、うちの子が。」

「いいさ、なんとなくだが、コイツ等が俺に対してこんな態度をとるのは予想がつくさ。」

ネロは一瞬だけ寂しそうな表情をした。彼女らには自分よりも大切に護りたい人が傍にいる。だが、俺には自分の命をかけて護ると誓った自分よりも大切な人が傍に居ないどころか、所在も掴めない状況にある。

ネロは只羨ましかった。護るべき人が傍に居る事を……

ネロは只単に羨ましそうにシグナムとヴィータを見ていた。

と、その時……

『アラート』という文字がモニターに出現し、警報を鳴らし始めた。それと同時に《悪魔の右腕》に非常に微力だが、疼きを感じた。悪魔が出現した時と同じ疼きを……

ネロは立ち上がり、入院服のまま部屋を出ようと駆け出した。
ガシッ！ と誰かが彼の肩をつかむ手。

「貴様、何処に行くつもりだ。」

ネロの肩を掴んでいたのはシグナムだった。ネロは内心ではぐつとため息をつきながら、

「ぶっころしに行くんだよ。」

「《悪魔》達を」

ネロは意味深な笑みを浮かべて《右腕》で掴まれていた腕を振り払い、走り去っていった。

誰も彼を止められなかった。特に彼の実力を目の前で見てしまっているのはとフェイトは、動けなかった。

もう一度言うが、ネロは入院服を来て医務室を飛び出た。

勿論武器を一切持たずに……

act 12 Froce《機動六課》（後書き）

ネロは入院服のまま、行っちゃいましたね。

（次回）

まだ六課に強力するとは一言も言う前に、事件が発生。

現れる《悪魔》に《黒》の名を持つ《悪魔狩人》が狩りを始める。

ドクターは次にどの刺客を送り込んで行くのか？

ネロは新しく目覚めた《護る為の力》をうまく扱えるのか？

その間、あのオッサン？ は一体どこで何をしているのか。

そして、過去のオッサンはいつ現れるのか検討もつかない。

それは他のダンテーズとお兄様も同じ、一体何時になったら出番が回ってくるのか？

余分な事も書きましたが、それでは次回を楽しみにしててください！！！！

「折角の party に遅れたら主催者に悪いな。」
ニヒルな笑みを浮かべる男性。

「早速お出ましか。招待状なら此処にあるぜ。」

「Let's Rock!!!」

act 13 赤い男《DANTE》 (前書き)

やっとオッサンが登場します。

無双です。チートが無双を発動します。

ようはチート無双です。

《史上最強の悪魔狩人》もとうとう異世界に降り立った。

だがその傍には、《聖歌聖女》の姿はなかった。

《黒》の名を持つ者が、最も愛する人物の姿は無い。

今、全ての役者の内二人は揃った。

残りの5名の役者は未だに揃わない。

全ての役者が揃った時……物語は本当の意味で廻り始める。

act 13 赤い男〈DANTE〉

ネロは六課内を走り回っていた。
その間にもものスゴイ注目を浴びた。

それもそのハズ、入院服姿の男がありえないような速度で走り回っているのだ。注目させないはずがなかった。
ネロはそんな視線は完全に無視をしていた。

「クソ無駄に広い！」
無駄に広い六課を適当に走り回るネロ。出口は一向に見当たらない。
その事に対して悪態を突く。

疼きが強くなる。この感じは数が半端じゃないときに現れる疼きと全く似ている。

あの一年前に万以上の悪魔が大量出現したときに感じた疼きとよく似ていた。

その事が更にネロをイライラさせた。

とうとうネロはとある壁の前で立ち止まった。

「H S ! ! ぶっこわすか？」

笑みを浮かべた。その表情から見て取れるが壊す気満々だ。

ネロは《悪魔の右腕》を引いて、いつでもパンチが出来る体制に入った。

「ま、待って〜止めて〜」

ネロを止めようとする女性の声。何処かで聞いた事のある声だった、しかもつい最近聞いたような気がする声だった。

ネロは動作を止めて、声のした方向を向いた。
サイドポニーにしている女性がこっちに向かって走ってきているのを見た。

「此処は何処なんだ。坊やもキリエの嬢ちゃんも居ねえ。」

ダンテは何処かも分らない廃墟の街に、只一人ポツンツと立っていた。

「何もねえのか。」

周りを見るが、人の気配所か、生物の気配も感じないが《悪魔》が最近現れた傾向が見られた。

この空間の次元が全くと云っていいほど安定してはいなかった。

何も無い、只のゴーストタウンと化していた。

今ダンテがいる場所にはピザおろかストロベリーサンデーも無い。

ましてやジントニックも美女もいない。

言わばダンテにとっての地獄だ。

ダンテが居るこの廃墟の街は、ダンテ達が子の世界に来る約一か月前に《悪魔》達によって一晩で廃墟にされた街であった。

「本当に何もねえな。」

両手を頭に鳴り、辺りを見回しながら言う。

「金もねえわ。腹も減るわ。マジで何もねえな。」

「せめて悪魔位は出てくれよ。でないとつまらないからな。」

ダンテの右手には漆黒の拳銃が握られていた。

「折角のpartyの誘いだ。乗ってやらないと、主催者が可哀想だ！」

「BINGO!!」

引き金を引き、弾丸を一発発射。

弾丸はドクロのような顔をした《悪魔》の額を貫いた。体と右手に持っていた死神の鎌は砂に帰り、全身を被っていたローブはそのばに落ちた。

空間の空気は変わり、ネットリと粘り着く突くような空気の質に変化して殺気が充満し始めた。

それから、この街を覆いつくすように黒い影が空から振ってきた。

「Ha-Ha!! 最高のpartyだぜ！」

そのすべては《悪魔》だった。

「It's SHOW TIME!!!!!! Yea a a h u u u h a ! ! ! ! ! !」

その男は真っ赤なラバーコートを靡かせ、背中には不気味に光る銀色の大剣。両手には漆黒と白銀の二丁拳銃《エポニー&アイボリー》を使い、まるでダンスを踊るかのようにして目の前に居る《悪魔》をぶち抜く。

この男は《史上最強の悪魔狩人ダンテ》の顔になっていた

ダンテの連射速度はマシンガンを優に超えていた。

気づいた時には蜂の巣状態。1秒間に20発以上の弾丸を発射して、襲いかかる。

コントロールは正確無比。

《悪魔》から言わせたらダンテの方が《悪魔》だと言いたい。

「どうしたどうした。もうオネンネか？」
死の鎌を避けながら、弾丸を発射して顔面に熱いキスを食らわす。
完全に余裕綽々のダンテは一切の容赦なく。

悪魔達の外殻を砕き、肉を裂き、骨を破断し、血を撒き散らせ、魂を叩き割る。

「Yeaaaaaasss!!! Yaahaaa
aaaaahahaha!!」

殺しても殺しても増え続ける《悪魔》にダンテのテンションは最高潮にまで達した。久々の超満員のLiveにダンテは快樂を得ていた。

ダンテを囲むよにして《悪魔》がドンドン出現してくる。その数は優に1000を超えている。
なのに更に増え続けている。

ダンテは武器を《リベリオン》に切り替えた。
刀身が真っ赤に輝く。ダンテの魔力が集まって行く。

「喰らいな。」

リベリオンを逆手に持ち腰を落とした。

「drive! (突っ走れ!)」
赤い斬撃が飛来して目の前の《悪魔》を切り裂く。
これだけで、100以上の悪魔がくたばるが、斬撃の勢いは一向に収まる気配を見せつけない。

前方にある家屋やビルをすべて切り裂く。

「one! two! (一発! もう一発もだ!)」
更に二回振り、二発分の真つ赤な斬撃が飛来して、《悪魔》を切り裂く。

それでも《悪魔》はダンテに襲いかかる。

この下等悪魔達を突き動かすのは正に『狂気』だ。

仇敵の血を前にした底無しの『憤怒』からくる殺戮欲。

そしてその力に対する圧倒的な『恐怖』からくる防衛反応。

この二つが組み合わさって『狂気』となり彼らの闘争心は爆発する。

こうして下等悪魔達は必然的にスパイダの血に群がるのだ。
敵わないと知りつつも、自ら死の中に飛び込んでいく。

催眠術にでもかかったかのように。

その小さな魂の『器』が『狂気』に『寄生』されて

「Huh」

ダンテを襲う為に用意された《悪魔》の数は軽く1000体は超えていたが、開始5分も経たない内に半分以上もやられた。

只の《下級悪魔》如きが1000体以上現れようと、ダンテに敵うはずもない。

一応その中にも《上級悪魔》も居たが、何ら遜色なく、ブチ殺す。

「Ha! もつとガッツのある奴はいないのか。」
喋る余裕がある。

《悪魔達》は完全にダンテの掌で踊らされていた。

見る見る内に《悪魔》の数は減っていくが、それに比例して《悪魔》の数も増えてくる。《悪魔》の数は減っては増え減っては増えを繰り返していた。
山の用に募っていく大量の肉塊。

端からみればそれは《虐殺》に見えてしうほどの一方的な戦い。

「イイイイイイヤアアアアアアアアアア！」

『ステインガー』により前方に居た《悪魔》の上半身が一斉に消し飛ぶ。

いや、消滅したという表現が近かった。

「久々にやったな。何時ものステインガーに1割増しのステインガー。」

たった何時もの『ステインガー』に1割程力を強めただけで、前方の次元が歪んだ。

そして次元が崩壊を起こした。

これが『伝説の魔剣士の血を引く者の力。』スパイダの血族の力。ダンテがバージルがこの“人間界”で力を解放して本気で戦ったら、“人間界”が完全に崩壊してしまう。

ネロはまだまだだ。まだ全ての力を開放しきれていない。

ネロも引き継いでいるのだ。『スパイダの血』を、全ての力に目覚めたらネロもダンテの領域に踏み込む強さになる。

今の段階ではダンテの足元には全く及ばないが、何時か追いつく。場合によっては抜かされる。

「久々にあれも使うか。」

「来い、《パンドラ!》」

ダンテは右腕を振り上げて《災厄》を呼んだ。

ダンテの右手には《災厄》のトランクが握られていた。

「見せてやるぜ、コレが……」

《災厄兵器パンドラ》の形が変形していく。

「変形武器の……」

乗り込み式の兵器に変わっていき、相当なサイズの大きさに変形した。

「男の……」

それに乗り込んだダンテは、何かを発射するための装置を握る。

「ロマンだ。」

ニヒルな笑みを浮かべて、装置を操作した。

アーギュメント。《災厄兵器パンドラ》の変形タイプの中で広域殲滅に特化した変形。

全部で20以上ある砲身から、ミサイルが発射された。

ミサイルは縦横無断に飛び回り、其処ら中に着弾する。その一発のミサイルだけで100体近くの《悪魔》が塵に帰る。

全てがすべて《悪魔》に着弾しているわけではなく、ビルとか其処ら中に着弾する。

その破片とかが、《悪魔》に襲いかかる。

避ける《悪魔》も入れば、直撃を貰い死にいたる《悪魔》も居る。

それでも殆どの《悪魔》がミサイルに当たり、木っ端微塵に消し飛ばす。その爆発のに巻き込まれて100体近くが塵となる。

その結果ダンテから半径100?は消し飛んだ。廃墟の街が只の焼け野原に変わったただけだった。

「やりすぎたか。」

そんな事を言っているダンテだが、こんなのは何時もの事だ。

ダンテが《悪魔》を狩る時は、必ず周りが崩壊してしまうのだ。特にテンションが最高潮に達したときと、《魔具》である《ネヴァン》と《パンドラ》を使うときは更に見境が無くなる。

瞬間、《パンドラ》が強烈な光を放ち始めた。

「ヤバ！」

流石のダンテでも危機感を感じ焦った。

《パンドラ》の暴走。それは、次元を越えて他の世界を破壊し尽くしてしまうほどの危険度。

ダンテは《パンドラ》を足で乱暴に閉じた。

それにより、暴走は納まったが被害は更に酷くなった事を此処に記そう。

「嫌な予感がするな。」

ダンテの《悪魔》としての感が告げていた。ダンテの感はよく当たるといふか殆ど100%の確率で当たる。しかも相当面倒臭い事になる。

ただ今回のように沢山の悪魔が出てきてそれを“狩る”だけならいい、だがそれ以上に面倒臭い事に物事が進んでいるとダンテの感は告げていた。

これは・・・

俺等一族……

スパイダの血族が……

この物事を中心になる。

未だ目覚めていない坊やが一番の中心になる。

ダンテの長年の感が告げていた。

只のpartyで終わらない。魔界と人間界の全てを巻き込む大きなpartyが行われる。

そのpartyは最大であり最悪の戦いとなる。

それからダンテは何食わぬ顔で何処かに消えていった。

1000体以上居た悪魔がたったの五分未満で全滅した。

コレが《史上最強の悪魔狩人ダンテ》の力の片鱗にも満たない。

その頃丁度。

「悪魔が全滅したの。」

ネロは一瞬、なのはが何を言ったのかが全く分からなかった。悪魔が全滅した。

この短時間でだと……

ネロには一人の男の顔が浮かんだ。アイツしか居ねえ。

こんな無茶苦茶をする奴なんてアイツ以外には有り得ねえ。

ダンテ。

ネロの脳内にその名前が出て来た。

ネロは不敵に笑い。そこら辺にあった椅子に座った。

やっぱりオッサンも此処に来て居たか。

後はオッサンと合流して、キリエと一緒にいるかどうかを確認するだけだな。

頼むからキリエ……ダンテと一緒に居てくれ。
切に願うネロ。

act 13 赤い男〈DANTE〉 (後書き)

ダンテがあまりにもチートすぎて、スタイリッシュな戦闘シーンが全く書けませんでした。
すいません。

もう虐殺、それしか書けません(笑)

ダンテをスタイリッシュな戦闘シーンを書くにはアイツ等しかいません。

今のネロと悪魔如きの戦闘レベルじゃスタイリッシュに書けませんでした。

本当に申し訳ないです。

今回はネロと六課の隊長人との会話が中心になる予定です。

未だ次話はどうなるか決まっています。

もしかしたら何かしらの伏線をはるかもです。

それでは次回を楽しみにしてください。

act14 条件〈Conditions〉(前書き)

少し遅れましたが、更新完了しました。

今回は全く戦闘はありません。

そして、今回の話で第一章の終了です。

次回から第二章に入ります。

今回の話はグダグダかもしれませんが、楽しんでください。

それでは始まります。

act 14 条件《Conditions》

とあるモニター室で白衣を着たドクターと呼ばれている一人の男性が、狂気の笑み浮かべて映像を食い入るようにして見ていた。

「フハハハハハハハハハハ！ 最高だよダンテ君！！！！！！
欲しい欲しい。早く欲しい！！！！！！」

テンションが馬鹿みたいに高いドクターは、モニターを見ながら耳障りな馬鹿笑いをしている。かなりの変態発言もしている。

そのモニターにはダンテの戦闘シーンが映し出されていた。それは、先程ダンテが廃墟で戦った悪魔1000体以上との戦闘シーンだった。

「もう少し声の音量を考えてくれないか。君の声は耳障りだ。」
ドクターの後ろから一人の男性が現れた。

見た目はスキンヘッドで赤と青のオッドアイ。服装はダークブルーのスーツを着こなしている。

右手には一冊の本を持っている。

年齢は40歳後半になる前位であろう。ようは中年のスキンヘッドで青と赤のオッドアイのオッサンである。

「やあ、君も来ていたのか。」

笑みを浮かべながら中年のオッサンの方に振り返る。

こうしてみると酷い絵面だ。キモイ笑みを浮かべるイカれたドクターにスキンヘッドで青と赤のオッドアイのオッサン……少しは華が欲しいものだが仕方がない。

しかも二人が居る場所は薄暗い為、更に不気味さを引き立てる。

「アーカム君。」

アーカムと呼ばれたオッサンは一歩一歩とドクターに近づいていく。その足取りには貫禄がある。

「君に“君”付けて呼ばれると寒気が走るから止めてくれないか。」

「そういうアーカム君も私の事を“君”付けて呼んでいるがね。」
満面の笑みを浮かべるドクター。

アーカムは「は〜」とため息をつきながら目頭を押さえた。頭が痛くなってしまう。

「分かった。私の事は好きなように呼んでも構わんから、その頭の痛くなる笑い声は止める。」

アーカムはドクターに指を指しながら発言した。

その声色には「もう止めてくれ」という願いが大いに込められていた。

「そんなの無理に決まっているではないか、これを笑わずに居れるわけないじゃないか。アーカム君。」
狂気染みた笑みを浮かべるドクター。

彼の相手をするのに完全に疲れた切ったアーカムは、無言でスグ傍にあつた椅子に座り足を組んで持っていた本を読み出した。

その本のタイトルには『伝説の魔剣士・魔神スパーダ』と書かれていた。

一方ダンは、

「ぶえつくしょんつ!!!」
突然のクシャミに、木々に止まっていた鳥たちが驚いて羽ばたいて逃げていった。木に止まって休んでいた鳥にとってはた迷惑だ。ダンテは足を止めて辺りを見回すが人の気配は一切感じられない。生き物の気配は一応感じられる……《悪魔》の気配は今のところ一切感じられない。《悪魔》が出現したらしたで、空気が極端に変わるから直ぐに分かる。

「誰か、俺の噂をしているのか？」
鼻水をすすりながら、

「俺の熱烈なファンか？」
一瞬今まで感じた事の無い悪寒が全身に駆けめぐるが、

「当然ベツピンさんだろうな。」
そう言い切るダンテ。
熱烈なファンという言葉はある意味間違っではなく、的を得ていた。しかし、可哀想な事に美女ではなくて、キモウザイドクターである。その事に全く気づくハズも無く、美女だと信じて疑わないダンテだった。

「早く坊やとキリエの嬢ちゃんと合流しないと。」
早くこの物語の中心人物に合流しないと盛大な『party』に乗り遅れてしまうと感じている。
悪戯小僧の用な笑みを浮かべるダンテは、どんな『party』になるのか楽しみで仕方がない様子。

当然土地勘なんて全くと言っていいほど無いダンテは路頭に迷う。迷っても全く気にしないダンテは適当に歩く。行く方向はすべて『気まぐれ』で決めて進む。

「腹減った。飯〜」

何度も腹の虫が辺りに鳴り響いた。

けど、飲食店なんて見当たらないし、あるハズが無い。

それもそのハズ今ダンテが居る場所は、『ネロ』と『ネロ・アンジエロ』が戦って、荒地にしてしまった所に居るからだ。

ダンテは地面に入っている巨大な亀裂を見ながら、

「また派手に殺ったな。坊や。」

それだけを、この場で言い残して何処かに歩いていった。

『気まぐれ』で道を決めて歩いて来たダンテは、この後思いもよらない出合いを果たすことになる。

『気まぐれ』これもある意味ダンテクオリティの一つでもある。

ダンテという存在自体には常識というものは全く通用しない……コレがダンテクオリティの芯の部分であり、真骨頂でもある。

「さて、此処からどうやって進むか。」

辺りを一旦見回す。前を見れば森林。左を見れば遠くの方に大きな教会らしきものが見え、右には相当遠くだがビルらしきものが見え

た。「ぐうぐう」と腹の虫が鳴る。

この世界に来て未だに何も食べていないダンテは、腹が減っていて少しばかり機嫌がよろしくは無かった。

「さてはて、坊やは何処に居るのかな？」

ダンテは晴れた青空を見上げながら、この先に起こるであろう激戦を思いを馳せていた。なあ、ネロ気づいているか、今から起こる戦いは……ネロ。お前を中心にして回っているんだよ。今回も、坊やの物語だ。

ダンテは適当に歩を進めた。

ネロは何時もの仏頂面で椅子に座っていた。だが、額にお怒りマークが沢山浮かびあがっていた。

「さて、何で俺はこんな目にあっているんだ？」

会議室に居るネロ達。ネロは身体と椅子をロープで巻かれて動けないように繋がれている。こんな所をダンテにでも見られたりしたら……絶対に笑いにされる。

ダンテと一緒にいなくて良かったと心底思った。

「あはははは……ゴメンね。」

苦笑いをした後、申し訳なさそうに謝罪をするなのは。その後ろでは、フェイトとはやても申し訳なさそうにしていた。そんな顔を見せられてなんか怒る気が失せた。

「はあ〜」とため息をついたネロ。さっきからコチラを睨みつける

人物が二名ほどいる。言わなくても分かっていると思うが、シグナムとヴィータだ。

「それで、俺に何を求めているんだ？」

「そうやね。ウチ等に力を貸してください。」

「……お願いします。」
「……」
なのは、フェイト、はやてが同時に頭を下げる。

「え？」

一瞬だが、思考が停止してしまったネロは素頓狂な声を上げた。だがそれも一瞬、直ぐに思考は回復した。

用は、目の前に居る人物が俺に助けを求めている。そんなの、答えは既に決まっている。

「それは依頼と受け取って良いんだな？」

意地悪そうな笑みを浮かべる。なのは達は俺の「依頼」という言葉に？を浮かべている。

「そういや、知らなかったよな。俺は《悪魔》を狩る事を仕事にしている《デビルハンター》だ。」

「……デビルハンター?!」「……」

次はネロ以外の全員が声を揃えて言った。そんなビックリすることか？ まあ、《悪魔》の存在を知らなかったんだ、知らないで当然か。

そう言い聞かせて納得させた。

「ああ、報酬と俺からの条件を呑んでくれるのであれば、その依頼

を受けよう。」
そんな事を口走っているが、最初から力を貸す気ではない。

いきなりシグナムに胸倉を掴まれ壁に叩きつけられ「がはっ」と肺の中にある酸素を全て吐き出したその手は、力が入りブルブルと震えていた。

「シグナム!!!」
はやての声が聞こえた。

「貴様!!!」
シグナムには言葉では言い切れない怒気が含まれていて、今にも病院服が引きちぎれそうだ。そうなる事は最初から予想してそういう事を言ったネロ。

「いつてえくなあ。コッチは怪我人だぞ。」

「黙れ!!!」
更に力が強まったのを感じた。その後ではフェイトがアタフタしてて、なのはヴィータを止めている。はやてはコチラに近づいてきている。
そして、シグナムの背後に立ち、何処から出したのかいつの間にか巨大なハリセンが握られていた。
それを大きく振り上げて、

「いい加減にせんかあああああああ!!!!!!」
振り下ろされた。

ハリセンはシグナムの頭に直撃。とてもいい音が部屋内に響きわたった。

シグナムは叩かれた瞬間、胸倉を掴んでいた手を話して頭を押さえた。

「主はやて。」

恐る恐るといった感じでシグナムが後ろを向くと、其処には、

「シグナム。少し落ち着いた方がええんちゃうか。」

凄みのある声色。スゲエな、コレなら《下級悪魔》も逃げ出さず。それほど凄みのある声色のはやて。

「は、はい。」

シグナムはシュンつとして、後ろに下がる。事の顛末を見ていたヴィータは直ぐに頭を冷やした。大好きなはやてを怒らせたくない。その一心で自制した。

280

「ほいで、その報酬と条件つちゅうのはなんなんや？」

目付きが先程俺と話していた時とは、全く違う。別人と思うぐらいにだ。

「じゃあ、良いんだな。」

「そつや。」

そついい力強く頷く。

「まず一つは、俺に住む所を探してくれ。後できれば何だが朝、昼、晩の三食付きであれば尚更な良い。」

ネ口は人差し指を立てて1つ目の条件を言う。中指を立ててふたつ目の条件を言おうとしたとき、

「……はい?」「……」

ポカンとしている皆さん。それに気が付いたネロは怪訝な顔をした。

「おいおい、まさか探せないとか言うんじゃないだろうな。」

「イヤイヤ、そうやなくて。ホンマにそんなんで良いの?」

疑問符を頭に何個も浮かべている。イマイチ納得できていない様子だ。

「一体俺が、どんな条件を出すと思っっていたんだ。」

「いや、報酬金、一億とか。この六課に居る女性陣全員を俺の女にしるとか。」

シレッとしたように言う。何か傷つくな、そんな風に思われていたとは、髭ならそんな条件出しそうだけどな。

「はあ」と深いため息をついた。

「まあいい、そんな事よりも次が一番大事だ。」
生唾を飲み込む音が聞こえた。

ネロは首にかけているロケットを取り外して、中に入っている写真を見せた。其処にはネロとキリエが映っていた。

「この人を探してくれ。」

全員に見せた。それを見た誰もが「綺麗」と声を上げた。
それはもう、無意識からなる言葉だった。

「綺麗な人やな。誰なん?」

そういいながら、ロケットを返してもらった。それを受け取った左手でネロはそれを強く握りしめた。

「俺の……………」

「俺の大切な人だ。」

その言葉にはどれほどの思いが込められていただろう。今傍に世界で一番“護りたい人”自分の命よりも大切な人がいない。

“護ると”誓った、もう悲しませないと誓った、ずっと一緒にいようと誓った人は、今傍にいない……それがネロにとって一番許し難いことだった。

その言葉に込められた想いを敏感に察知したなのは達は笑顔で、アイコンタクトを取った。

「……………当然だよ／や／！！！！」「……………」

なのはが、フェイトが、はやてが、ネロに敵意を現わにしていたシグナムが、ネロを全く信用していないヴィータが力強く返事を返して頷いた。

まさかのシグナムとヴィータの返事には心底ビックリした。あの二人は俺の事を目の敵にしている為、こんな返事が帰ってくると思っても見なかった。

少しの間思考回路が停止した。

「泣いとるん？」

はやてが、俺の顔をのぞき込みながらそんな事を言ってきた。Ha

！俺が泣いているって、そんな訳無いだろう、はやては何を言っているんだ。

そう言いたい、言葉が出ない。何故だ。

俺は目頭が熱くなるのを感じた。マジで涙ながしてんのか俺？
情けねえな。

自己嫌悪に陥る。

でもな、そんな姿をこれ以上晒すわけにはいかねえな。

「HA！何を言っているんだ。泣いているわけないだろう。」
そう強がって言うが、目は充血している。説得力は全くない。

誰もその事には触れない。触れてはいけなさと感じていた。

「うん。そうだね。」

なのはは、ネロの方に近づいていった。

「ネロ。その探してほしい人の名前を教えてくださいかな。」

「キリエだ。」

「キリエさんね。全力で探すから、心配しないでね。」

その微笑みはキリエと重なって見えた。キリエと同じ暖かく優しいモノを感じ取った。それはなのははだけではない、この場に居る全員から感じ取れた。

俺に対して敵意剥き出しのシグナム、ヴィータも助けを求めている人には、どんな人物だろうが手を差しのべる。此処に集まっているのはそんな『優しく』『暖かく』『甘い』連中なんだと、ネロは感じ取った。

同時にネロは思った。此処の人たちも“護りたい”と……強く。六課の人達全員とあっていないが、それでも“護りたい”とってしまった。

ネロは小さく笑みを浮かべる。それに気づく者はいない。俺は何時からこんな『甘い』奴になったんだ。

ダンテと出会い、キリエと恋仲になってからか。

それとも生まれたときからか？

ふッ！ 俺らしくも無い。

そんな事はどうでもいい事だ。只『護りたい人達』が増えただけだ。只それだけの事だ。

ネロは六課からの依頼を受けた。

六課はネロから出された条件をすべて承諾した。

ネロの住む所を直ぐに決まった。

此処、六課の男子寮に住む事になった。

時刻は夜。

ネロは用意された部屋のベッドで横になっている。

用意された部屋は、とても良い部屋だ。

トイレにバスルーム。更にキッチンとシングルベッドにテレビまで付いている。

こんないい部屋で暮すのは初めてだな。

ネロは思い返す。会議室であった話の事を、

「そついや、質量兵器やなんやらいつていたな。」

「そうですね。」

「なら、これをアンタ達に預けておいた方がいいよな。」

ネロは《右手》から《閻魔刀》を取り出した。それは机の上に置いた。その刀は此処にいる全員がその存在を知っている。

なのは達が帰ってきたときに、レイジングハートに頼んで録画してもらっていた《ネロ》と《ネロ・アンジェロ》の戦闘シーンを試聴したのだ。

「え、なんでなん!」

突然の事で状況が全く理解できない。

「幾ら、アンタ達に協力するって言っても。俺みたいな見ず知らずの男が持っているよりかいいだろ。」

ネロの口調はいつも通りなのだが、拳を握りしめて、俯いた視線の先には《閻魔刀》の姿があった。

はやては、なのは、フェイト、シグナム、仏頂面のヴィータと視線を交わして、同時に頷いた。
みんなの答えは決まっていた。

「ネロさん……」

「なんだ。」

《閻魔刀》からはやてに視線を向けるが、その瞳は何か悲しみに満ちた目をしていた。

「ネロさんの持ち物はすべてお返しします。だから、心配しないで下さい。」

はやては《閻魔刀》を持ち、ネロに返した。

「おいおい、良いのか！？ アンタ達の組織はデカイ組織なんだろう。その規則を無視したらヤバイんじゃないのか！？」

「そんな事は、気にせんでいい。うちにまかしとき。」

「でもな……」

納得しきれない。

「良いから。」

はやてから有無を言わせない迫力が滲み出していた。
その姿もキリエと重なった。ネロは心の其処で不敵な笑みを浮かべた。

そうだよな、さっき“護る”て決めたんだ。なら、アンタ達に何かがあれば、俺がなんとかすれば良い“護れば”いいだけの事だ。

それは事実上管理局の上層部に喧嘩を売るということであつた。

「しかし、似ていたな……キリエに……」
似ていると言っても性格、容姿が似ていることではない。

「本当に、似ていたな。“魂”の輝きが……」

「キリエ……」

ネロの咳きは夜に消えていった。

act 14 条件〈Conditions〉(後書き)

超貴重なネ口の涙です。

いる人は先着10名までです。

まあ、冗談です(笑)

欲しい人は涙を送りますよ。ネ口の超貴重な涙(笑)

それはそうと、アーカムまで出てきましたね。

あのスキンヘッド、一体何が目的なのか。あの性格上ジエイルを利用していると思えませんがね(笑)

これで、第一章の終了です。

次回からは第二章に入ります。

第二章予告

「クソ兄貴！ 何勝手な事言ってるだ!!」

「なぜ来たダンテ！ 俺は此処で良いと言っただろう。此処親父の眠る土地で」

双子の片割れの魂は、もう片方の魂を決して離したりはしない。

「髭！ 一旦死んどけ。」

「Hahaha hahaha hahaha!」

「にはははは、すごいね。」

ダンテに振り回される面子。

「おいおい、何でダンテがもう一人居るんだ。」

「さあな、だが面白くなりそうだ。」

「冗談だろ。」

「髭どうした？」

「なんでアンタが居るんだ。」

其処には双子の魂が

「え、え、え。なんでダンテがこんなにいるのをおおおお!?!?」

「さあな、まあ、俺以外のダンテに聞いたらいいだろう。」

少女は叫ぶ。

そして、最強のダンテが降臨する。

「おいおい、何だ此処は? 《魔界》じゃねえよな。」

「なあ、髭。あのダンテ。」

「ああ、俺の知らねえダンテだな。」

「多分、俺より先の……未来から来た俺だ。」

他のダンテとは違う。

品格と共風格も格段上のダンテ。

今此処に揃う。

スパイダの血を受け継ぎし者達。

「キリエEEEEEEEEEEEEイ!」

ネロの力が目覚める。

第二章「集う者達」

act15 夢の中へWhite World〈前書き〉

更新出来ました!!

本当に毎日が忙しいです。夏休みでも進学の為の補習で学校に行つて勉強(強制)

その後は家に帰って曲の練習。

今週末にライブがありますのでその練習と新しい曲の練習。

新しい曲はBzのウルトラソウルを練習しています。

後はオリジナル曲の制作もあつて忙しいです。

そんなこんなで更新できました。

では始まります。

翌日の早朝。

何時もより早く起きてしまったネロは機動六課の中庭を歩く。

多分まだ誰も起きていないだろう。もし起きていたとしたらそれは、ただ単に物好きな奴か、早起きバカか、俺みたいな奴だろうな。そう思うネロである。

夏に入る手前といっても太陽が上がったばかりで、少し肌寒い。肩の方に腕を回して上下に擦る。摩擦で肩周りに少しだけ熱が帯びる。少しはマシになった。

タンクトップ姿で回るんじゃないかと、上着を着てくれば良かったと少しだけ後悔した後、小さくため息をついた。

空は少し青みがかってきている。後少ししたら太陽が昇り青空になるだろう。そんな空だ。

視線を前に向ければ木々の枝に小鳥が数匹止まっていて、小鳥の囀りが聞こえる。一匹一匹バラバラに奏でていた囀りが徐々に重なっていき一つの音律を作り出し奏でる。

ネロはその木々の根元に近づき腰を下ろした。木に凭れるようにして背を預け、“右手”を頭の後ろに回して、左手をダランと力無く垂らす。

心が落ち着き懐かしい感覚。キリエの歌声を聞いているような感覚に陥る。

目を瞑ると気持ちと脳内がクリアになっていく、本当に落ち着く。気がつけば目を閉じて完全に小鳥の囀りを聞きいていた。更にネロの頭、肩、手先、側に小鳥たちが降りてきた。それはそれぞれのピースが重なり一枚の“絵”となっていた。でも思う。

今の状態を髭に見られたらとても面倒くさそうだ。

でも、一瞬だけそれも良いかなって思ってしまった。ネロは目を力

ツと見開いて両手で頭を抱える。

「なんでそんな事を考えてしまったんだ!!」 そんな事を内心でシャウトしながら、地面をのたうち回ってしまった。変な嫌な汗が全身から噴出する。

ネロの奇妙な行動にビククリした小鳥達は羽を羽ばたかせて、逃げて行く。ネロは逃げていく小鳥達に布で巻かれた右手を伸ばす。

しかし、その手は虚しく空気を掴むだけだった。右手を顔の目の前まで持ってきて開く、やはり何も掴めていなかった。ネロは自虐的な笑みを浮かべた。

ハハ！ いくら強くなっても“今”も“昔”もこの“右手”で掴めるものは無いんだな。

ネロは目を細めてこの“悪魔の右腕”を睨みつける。

それでも、あの時はキリ工を“護れる”事が出来たんだよな。一度は“護る”事が出来なかったが……柄にも無く感傷に浸っていた。

それも束の間、その場で立ち上がり両腕を真上に上げて背伸びをする。いい具合に背骨がポキポキ!! と鳴った。

その後、首を何週か回した。先程の背骨が鳴ったときと同じような音がした。

空を見上げる。

先程よりも明るくなっていて、少しずつ太陽が姿を表している。

「眩しい。」

ネロはそんな当たり前の事を呟きながら両手をズボンのポケットに突っ込みブラブラと適当に歩きだすと同時に、

「ねみい……」

そう呟いた後、口を大きく開けて欠伸をした。

何でこんなに早く起きてしまったんだ俺は、何時もは爆睡している時間帯なんだけどな……まだ、野宿の方が落ち着いて寝る事が出来たかもな。ネロは視線をまたもボロ布をグルグル巻にしてある“右

腕”に移す。

最近“右腕”に違和感を覚えるというか、何と言うか、“右腕”が何処かに見えない糸で繋がって居るようなそんな感じがするんだ。同時にその繋がって居る先に暖かい感じがある。キリエでは無いと思う。

なんと言つか、親近感みたいなものだろう。何かあの“暗黒騎士”と対面したときと似たような感覚なんだよな。

ハッキリとは分からないが、そんな違和感がこの世界に来てからずっと何だ。

最初はそんな気になる程強くは感じなかったが、ここ最近強く感じるようになってきている。

困ったことに戦闘しているとき、この感覚は少なからずもあった。

「泣けるぜ。全く……。」

誰もいない。そんな中、中庭で嘆く。

そしてまた直ぐに歩きだす。

数分歩くと、1本の大木を発見した。一番太いところで直径2m位はありそうな大木だ。

ネ口はそれを関心しながら見上げる。

高さは10mは超えている。相当巨大な大木だろう。

「ふっ」

地面を蹴る。

ネ口の身体が5m程中上がる。ネ口は左腕を伸ばして太い枝を掴み、身体を持ち上げる。

そのまま太い枝に座り根本の方まで移動すると、大木に背中を預けて両手を頭の後ろに回した。両足を組んで前方に伸ばした。

「気持ちの良い風だな。」

ネ口の髪を少し揺らすぐらいの微風が撫でた。
非常に眠いネ口は、瞼を閉じて意識を暗闇の底につつす。

案外、早く意識は沈んだ。

夢を見ている。

何も無い。只の真っ白な世界。

そんな何も無い真っ白な世界に俺は立っている。夢なのは分かっているが、少しだけだが現実味がする。

と、まあそんな訳の分らないただの真っ白で何も無い世界に俺は突っ立っている。

そうしていると足が動き出した。

一歩一歩と歩を進める。俺の意識とは全くの無関係だ。

勝手に動く身体に俺は身を任せた。只意識だけは目を猛獣が獲物を狩るように細めてずっと目の前に向けている。

なんでそんな事をしているか？ それはな……。

目の前に、

『 一人の銀髪の男性が左手に鞘に収めた閻魔刀
を持っている。』

からだよ。

目の前に居る銀髪の男性は髪型をオールバックのようにしていて、

金の刺繍が入った青いロングコートにダークグリーンの長ズボンにブーツ。

顔は白い鬨がかかって見えないが体格はオッサン並で相当な実力者だろう。

対峙しただけで分かる……オッサンと同等か、もしくはそれ以上の力を持っている。信じたくは無いが、“今”の俺では全くと言っていいほど適わないだろう。

だが、そんな事よりもなぜ目の前の奴が『閻魔刀』を持っている！なぜ元は自分の物のように持っている！！

その事が、ネロには気に食わなかった。それがたとえ“夢”の中であらうと……。

勿論『閻魔刀』はネロの物では無いが、髭から一応預かっている大切な物なんだ。それを目の前の奴は“自分”の所有物のように持っている。

沸々と怒りが込み上げてくる。だが、同時に親近感があり暖かい気持ちになっていくのもあった。

あの“右腕”に感じていた親近感が全身で感じ取れるようなそんな感覚だ。

怒りも湧いてくるが、そういう暖かい気持ちも湧いてくる。本当は自分が何をしたいのかが全く分からなかった。

目の前の男性に怒りをぶつけたいのか、と呼びたいのかが……ってなんだ。俺は一体何が言いたいんだ？頭にノイズが走り

その部分だけはちゃんとした言葉が喉に引っ掛かるような感じで出て来ないし、全く以て理解が出来ない。

体は自分の意志では動かない。勝手に歩を進めて目の前に居る銀髪の男性に近づいていく。

すると、目の前の男性が腰を少し落として右手を『閻魔刀』の柄にそえた。

全身が震える。額からは冷たい嫌な汗を噴出し、背中汗でビッシ

ヨリになった。目の前の男性が構えただけでこんな状態になってしまった。

ヤバイ！！　そう感じた時には目の前に居た男性が消えて俺の懐に現れた。

目で追うとか見えるとかの次元じゃない。ただ一言目の前から“消えた”その後には俺の懐に現れた。

斬られる！！　目をつぶる。しかしネロが予想もしないことが起きた。

金属と金属がぶつかりあう甲高い音が辺りを支配した。

その音が聞こえ目を開くと、ネロは目を疑った。いつの間にか“右手”に『閻魔刀』を握って相手の『閻魔刀』の抜刀切り上げを防いでいた。

全く感覚が無かった。一体いつの間？　そんな思いがネロを支配する。

だが、そんな思いも一瞬にして消え去った。目の前の男性が口角を少し上げて笑った。その笑みを見た瞬間、ネロの体が宙に浮いた。

ハ？！　何が起きたんだ？　全く以て何が起きたのか理解不能。

ネロの体は放物線を描きながら地面に着地した。直ぐに顔を目の前に向ける。

気付けば自由に体が動く。

全身に電流が流れたように悪寒が駆けめぐる。ネロはその場でサイドロールをした。

凶刃が何本かの横髪を切り裂いた。

あのまま避けていなかったら体が右半身と左半身にお別れしていた。いくら夢であろうとそんな思いはしたくはない。

「ほう。」

相手からそんな声が聞こえた。完全に舐められている。

いまの相手の一言により枷が外れた。ずっと親近感みたいなものが

沸いていたか戸惑いも少しだけあったが今はそんなものは関係無い。

「なめんなあああああああ！！！」

ネロも一瞬にして銀髪の男性の懐に入り込み『閻魔刀』を振り上げる。

「動きに無駄が多い。」

「え?!」

気がつけば男性がネロの後ろに居た。『閻魔刀』を振り上げる瞬間までは捕らえていた。

なのに、いつの間に後ろに?!

銀髪の男性がいつの間にか抜刀していた『閻魔刀』を鞘に収めると、一気にネロの服が切り裂かれて全身から血が吹き出した。

何が起きたのか全く理解できない。いつ抜いた? 何時俺は切られた? あの一瞬でか? 意味わからん。

そのまま自分の血で作り出した血の海に沈んだ。

あの銀髪の男が俺を見下ろしているのが分かる。

「まさか、ここまで弱いとはな。我が　ながら情けない。」

だからその　は一体何なんだよ?!　意味が分からねえ。

色々と言いたいことがあるが口が開かない。全く力が入らない。

クソが……また“負けるのか”あのとときの用に何も反撃が出来ずに
“まけるのか”

「ふざけんなあああああああ！！！」

体の其処から声を張り上げて立ち上がる。血が足りない、意識が朦朧として今にも倒れそうだ。

だが、今はそんな事は関係ねえ。

こんなボロボロにされてタダで負けるわけにはいかねえ。負けるな

ら一太刀は浴びせてもらうぞ。

「そうではなくては、面白くない。」

またしても目の前から“消えた”それ以外の表現が出て来ない。

「速過ぎるんだよ。てめえは!!」

そう悪態をつきつつも相手の一撃を防いだが、あまりの衝撃により体が後ろに蹠踉ける。

「このぐらいで蹠踉ける用だと、俺には勝てんぞ。」

『閻魔刀』の刃が迫りくる。体が蹠踉けているため避けるのは殆ど不可能。

“避ける”のは不可能なだけで、“防ぐ”のは……

「おらああああああああ!!!!!!」

不可能じゃない。

“右腕”を相手の振るう『閻魔刀』の軌道に合わせて防いだ。

その瞬間、二人の体が仰け反る。

それも一瞬、相手は一瞬にして体勢を立て直してネ口の視界から“消えた”

「DIE!!!!!!」

「冗談だろ……。」

鮮血が舞う。

肩から腰にかけてバツサリと切り裂かれた。

血が急激に失われ顔が真っ青になっていく。痛みは無く、只意識が無くなっていくのがハッキリと分かる。

ネ口は両ヒザを地面に付き、そのまま力無く倒れた。

赤黒い血と真っ赤な血が混ざり合う。鉄臭い匂いが充満する。

「俺の“負けか”」
ボソボソと呟く。ああ、ヤッパリ負けたんだな……俺。
チクシヨウ……。
声が聞こえたのか、銀髪の男性がコチラに向く。

「ああ、クソ……。」
悔しい。負けることは対峙した瞬間に分かっていた。それは仕方がないって事は認めた。
ただどな、一太刀も浴びせることなく“負けた”その事が一番悔しかった。手も足も出ない、完全な負け。
完敗だ。
その事が一番悔しい。

「何時でも此処に来い。何時でも相手になるぞ　よ……いや、ネ口。」
相手の声は戦闘していたときは声色が違った。
緊張感もなく殺気も無い。
“優しい”声色だった。その声を聞いただけで気持ちが落ち着いた。何か負けたことよりもこの声色の方が印象に残ったな。

「ああ、そうかよ。なら、そうさせてもらっわ……次は絶対に勝つからな……。」

「やれるものならやってみろ。そう簡単に　に勝ち星はやらん。」
即答しやがって。
知らないうちにネ口は笑みを浮かべていた。

「覚悟しておけ。」
ネロの意識は途絶えた。
すると、ネロの身体が光の粒子となり消え去った。

「やるな、流石は俺の　だ。」
そう言うのと同時に頬に赤い線が入り、その部分から赤い液体がツ
ーっと流れた。
銀髪の男性はそれを拭い取った。
すると顔にかかっていた白い靄が消えた。

その顔はダンテと瓜二つだった。

「うう……くああ。何か不思議な夢だったな。」
目を覚ましたネロ。眠気は全くない、スッキリしている。

「にしても、ポツロポロに負けたな。」
空を見上げると完全に太陽は上がっていた。太陽の位置関係を考え
ると、まだ上がって少し経ったぐらいだな。
となると7時過ぎぐらいか。
ぐうぐうという音がお腹から聞こえた。

「そっぴや、メシ食ってなかったな。」
ネロは木の枝から飛び降りて食堂に向かった。

「次こそは勝たせてもらうぜ
天に向けて指差して言い放った。
！」

act15 夢の中へWhite world (後書き)

彼の正体は誰だったんでしょね？
わかりませんね。

まあ、相当強いのは確かでしょうね。ネロを圧倒してしまいましたから(笑)

それはそうと次回の更新は何時になるか分かりません。

夏休みなのに忙しいって何？ 折角学生生活最後の夏休みなのに!!

次会を楽しみに待っていてください。

後番外編用アンケートの方も無期限でやっていますので、ドンドン送ってください。

それではよろしく願います。

まず始めにすいません。

投稿がとてつもなく遅れました。

ここ最近忙しかったもので、執筆する時間がありませんでした。

その一番の理由が試験です。AO試験を受けていました。

もし落ちた時のために、勉強もしていましたし期末試験もありました。それと他にも色々と忙しかったために投稿が遅れました。

誠に申し訳ありませんでした。

今から少しずつ、執筆していきます。

呼び名。

髭〃デビルメイクライ4のダンテ

ネロ〃ネロ

バージル〃バージル

二代目〓デビルメイクライ2のダンテ

若またはは愚弟（バージルは愚弟と呼びます。）〓デビルメイクライ
3のダンテ

兄貴〓デビルメイクライのアニメのダンテ

初代〓デビルメイクライのダンテ

番外編3 devilhunters最強決定戦一戦目

それは誰かかの何気ない一言から始まった。devilhunter、s の中で誰が一番強い？ と誰かが食事中に漏らした一言。その話題が六課の中で瞬く間に広がった。

そしてそれはダンテ達の耳にも入り、色々な局員たちがダンテ達に質問していった。誰が一番強いのかと？

「そりゃあ、二代目だろう。」

と髭は言い。

「二代目以外に誰が居るんだ。」

と兄貴は言い。

「二代目だろう。」

と初代が言い。

「二代目しか居ないっしょ。」

と若が言い。

「ふん、下らん。二代目以外誰が居るんだ。」

とバツサリと切り捨てるようにバージルは言い。

「二代目だろ。俺らが束になっても敵わねえよ。」

ネロは言う。

「まあ、俺だろ。それが髭のどっちかだろうな。」

と二代目は言った。devilhuntersは満場一致だった。だが、そうなってくると二番目に強いのは誰なのか？ 三番目に強いのは誰なのか？ ましてや誰が一番弱いのかという話になってきた。

まあ、そんなこんなで総当り戦が行われた。戦闘レベルが近い四人が行うことになった。

まず一人目は若きキリエloveのdevilhunterネロ。

二人目常に仏頂面の蒼き魔人鬼いさんバージル。

三人目超お気楽愚弟のdevilhunter若。

四人目此処最近魔帝ムンドウス倒したばかりなんですけど初代。

この四人による総当り戦。

ルール。

1 ʹdevil trigger類の魔力解放は禁止とする。理由、危険である為。

2 ʹ対戦相手を殺してはならない。

3 ʹ観客に被害を与えてはならない。もし与えたら、与えた者を敗者とする。

4 ʹ勝敗の決定は、降参するか審判が決めるか。または、戦意喪失。

5 ʹ優勝者には商品があります。

6 ʹ一番負けの多い者には罰ゲームが用意されています。

以上の事を踏まえて対戦を行ってください。b y 二代目。

まず一戦目。

ある意味夢の対決です。

「マジかよ、一発目からバージルと対戦とか勘弁してくれよ。」

視線の先には仏頂面の蒼き魔人鬼いさんバージルが腕を組んで額にはお怒りさんマークを沢山募らせていた。

バージルは全く乗り気じゃ無かったのだが、愚弟のせいで参加する羽目になってしまった。

その為か怒りが沸々と込み上げているらしく、非常に怖い。バージルの顔をまともに見れない。

「ネロ。先に言っておくぞ。」

「お、おう。」

怖すぎる形相にネロは、顔を引き攣らせた。

「俺のストレス発散相手になれ。」

「はっ?!」

「だから、直ぐに終わるなよ。」

ネロの額からツーツと嫌な汗が流れた。

「You shall die (死ぬがいい)」

行き成り死ぬ発言ですか！！ ネロはツツコム暇も無くサイドロールで回避をした。

ネロの真後ろにあったビル（六課がいつも訓練で使う訓練場。今回のステージは街。）が細切れになってズドーン！！ っという盛大な音と共に倒壊した。

マジかよ！！ 俺を殺す気かよ。

「ネロ。呆けていると死ぬぞ。」

「ちよっ！ まっ！！」

その場から飛び引く。次の瞬間、先ほどまで居た場所が次元斬で切り裂かれた。少しでも遅れていたら人間刺身にされていた。

これ死ぬ。マジ冗談じゃ無くマジで死ぬ！！！ でもな、

「やられっぱなしはな趣味じゃねえんだよ！！！！！！」

ネロは閻魔刀を出して、バールと同じように次元斬でやり返した。目の前の空間が切り裂かれる。

しかし、そこにはバールの姿が無かった。何処に行った？ 視線

を泳がした時に悪寒が走った。ネ口は飛び込み前転して、その場から離れた。

後ろからは嫌な風切音が聞こえた。

「ほおう。よく避けたな。」

「褒められても嬉しくないわ!! つうか、死ぬわ!!」

「当然だ。殺すつもりでやったんだからな。」

「勘弁してくれよ。」

右手で額を押さえる。丁度その頃、この戦闘を見ていた髭は腹を抱えてゲラゲラ笑っていた。良い性格している。

「シッ!!」

視界からバージルの姿が消え、ネ口は腰を落として全身に入っている力を抜いて、鞘に入った状態の閻魔刀を左手で持ち、右手を柄に添えた。

「ハッ!」

神速の抜刀を繰り返した。何回も繰り返した。

たった一秒の内に10回以上も打ち合った。その為か甲高い金属音が一回しか聞こえなく、なのは達で一回以上打ち合っているのが一瞬だけ見えたのがフェイトとシグナムだけだった。

「やるな、ネ口。」

「そりゃあ、どうも。」

今の打ち合いでどちらの実力が上なのか、双方共に理解した。故にネロは燃えた。

格下の俺が各上のバージルに勝つ。こんな燃える展開はそうそうやって来ないし、滅多に本気で戦わないバージルが本気になった。下剋上上等！！！！！！

血が燃える。スパイダの血がもつと！もつとつと訴えてくる。

滾る、血が滾る。ネロの緊張感・高揚感が一気に跳ね上がった。

目つきが変わったネロを見て、バージルが片方の口角を吊り上げて笑った。あの仏頂面が笑みを見せた。

そのギャップを見た女性局員が目をハートにして、その場で倒れてしまったのは此处に記そう。

こっからが、本番だな。二人の間の緊張感が高まってくる。それが伝わったのか、会場も静まり返り口を閉ざす。

「ッッッ！！！！」

合図も何も無く、二人は同時に地面を蹴る。二つの閻魔刀がぶつかり合う。

二つの大きな力が衝突した瞬間、爆発したような音がこの空間を支配し突風が会場を駆け抜ける。

連続的に金属と金属がぶつかり合う音が支配する。

この剣筋が見えているのはダンテ達しか居なく、若と初代は目を凝らして確認するのがやっとだ。なのは達の方には剣筋を目視できる人物はだれ一人いなかった。

完全に剣筋を見切っているのは戦っている本人達と兄貴、髭、二代目だけだった。

約10秒間の打ち合いの末、徐々にネロが押され始めてきた。それはネロが疲れている訳では無く、バージルの太刀筋の速度が上がって来ていたのだ。ネロの体に切り傷が増えて行く。

状況が芳しくないネロは軽く舌打ちをした。

何とかして状況を立て直したいネロは焦り、攻撃が少しずつ雑になり始めてきた。その瞬間を狙っていたバージルは「待ってました！」と叫び、つと言わんばかりの顔をして攻撃の手を激しくした。

ネロは思う。バージルはダンテと違って、派手さは無い分隙が全くない。それは攻撃が激しくなっても変わりが無くダンテ以上に戦いづらい相手、面倒臭い。

それが、ネロがバージルと真剣に戦って思うことだった。

やべえ、滅茶苦茶強い。髭より強いんじゃないのか？ くっそ、全然攻撃に移れねえ。

一切攻撃に移る事の出来ないネロは、少しずつストレスが溜まって

いた。

少くくらはいは攻撃させえや、ずっと防御だけじゃイライラするんだよ。徐々に怒りパラメーターが増えていく。

「だらあああああー!」

ネロは閻魔刀の一撃をデビルブリンガー掴んで、左手に持ち替えた閻魔刀を横に振う。

「ちっ」

小さく舌打ちしたバージルは、地面を蹴り上げて閻魔刀の柄を軸にして、その場で真横に一回転し、ネロの一撃を避けた。

「何だよそれ？」

滅茶苦茶な避け方に絶句する。そうだよな、バージルはあれでもダントテの兄なんだよな。

バージルのハイキックが見事にネロに直撃し、体が吹き飛び地面に体を何度も打ち付ける。

壁にぶつかり、やっと動きを止めた。立ち上がるうと両手足に力を入れようとしたが、頭がフラフラして力が入らなかつた。それにより、崩れて倒れた。

やばえな。目がチカチカする。力が入らねえな、さっきの蹴りが相当ダメージがあつたな。

勝てそうにないな。けどな、このまま負けるのは趣味じゃねえな。

せめて、強烈な一撃は入れさせてもらうぞ。バージル!!!!!!!!!!

ズドン!! とネロは思いっきり頭を地面に叩きつけた。そこを中心にして地面に少しだけ網目模様が広がった。

ネロの額が切れて、血が流れる。

ネロの不可解な行動を見たバージルは、

「何をやっているんだ？」

疑問を口にした。

「何でもねえよ。g u t sを注入しただけだ。」

「さあ、こつからはs h o w t i m eだ!!」

ネロの姿がバージルの視界から消えた次の瞬間、

「c u t o f f!!」

「ち!!」

舌打ちをしつつも、バージルはネロの疾走居合の斬撃全てを否する。しかし、全部否されること読んでいたネロはもう次の行動に移っていた。

殆ど至近距離からブルーローズの2発の弾丸が発射された。バージ

ルの目と鼻の先までに迫っていた。バージルはそれを、神速の抜刀術で閻魔刀で切り捨てる。

「catch this!!」

悪魔の腕がバージルを捕らえようと伸びる。バージルはそれを閻魔刀で弾こうともせずに、避けた。

いくらバージルでも、デビルプリンガーに力で勝てない事は分りきっている。それ以前にデビルプリンガーで力で勝てる存在この世に居るのかも怪しいくらいだ。

しかし、デビルプリンガーはバージルに迫る途中で動きを止めた。その一瞬バージルがこの戦闘で初めての大きな隙を見せた。ネロの視線が光る。

ネロは力強く地面を蹴って神速の踏込で、自分の射程範囲に入る。その距離は互いの得物が届く範囲でもある。バージルは抜刀したがネロはバージルよりも0.001秒程速く閻魔刀を抜刀していた。

鮮血が飛び散る。

そのたった0.001秒の差で、ネロの閻魔刀がバージルを捕らえたかに見えた。しかし実際は、バージルの閻魔刀がネロを捕らえていた。

ネロの方がバージルより速く抜刀していたが、バージルはそれを帳消し以上に、御釣りが来るぐらいの速度の斬撃速度だった。

「マジ、か、よ。」

ネロは吹っ飛び、ビルに突っ込んだ。しかし、ネロはあの一瞬だけ

バージルを本気にさせていた。真剣じゃ無く本気にだ。それはダンテ達でさえ本気にならなければなかなか出来る事ではない。

だが、同時に今の一撃で勝敗が決した。

ネロの体はもう動かないし、今のがダメだったらもう無理だと決めていた。あれはネロの全身全霊を賭けた一撃。それが通らなかつた。諦めの悪いネロでも、今回はかりは完敗だ。一撃も与えることが出来なかつた。

「畜生。」

突っ込んだビルの中でネロは右手で顔を覆い隠していた。

ネロVSバージル

勝者バージル

敗者ネロ

戦歴バージル1勝0敗

戦歴ネロ0勝1敗

「二代目。」

「どうした。髭。」

「俺ら何時か、ネロに越されるかもな。」

「そつだな。あいつも成長しているからな。」

二代目と鬘はお互いにニヒルな笑みを浮かべていた。

番外編3 devilhunters最強決定戦一戦目 (後書き)

本編が進まない。

番外編だけ、良い案が浮かんでくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5664o/>

DEVIL HUNTER`Sのリリカルな世界

2011年12月9日02時17分発行